



我らは長七の教え子だった

五中・小石川初代
校長に学ぶ

拓立
創志
作閑

寒水

長七 小諸を出て東京へ…

「小諸を去る辞」

ああ我、またついに
小諸を去らざるべからざるか。
懐かしき哉、小諸の土地よ

さらば浅間の山 さらば千曲の川

さらば小諸の知己

さらば我が学校の諸君

さらばよ故国信濃の山河健在なれ



小諸を立つ長七と別れを惜しむ教え子達

1905
東京高等
師範卒業

附属中学の教諭の傍ら五中校長までの
13年間、東洋英和女学校の講師を務める



東洋英和卒業写真に参列する長七（本文 P36 参照）



恒例となった
鯉揚げ



五中創立記念写真

長七初代校長となる



五中校舎講堂落成

五中は最初から変わっていたんだ！

長七渾身の
熊鶴亀犬猿猫体操



夏休みには農作業を体験『夏期転地修養隊』



宿泊した法禅寺にて

1918年府立五中誕生



折り襟ネクタイの
洒落た標準服





大統領から直筆の礼状

A beautiful bloom from Japan and the
symbol of American virtues for making
the great father of the republic may have
always in the pleasing earnest with
the photograph always.
Warren G. Harding

1922年ワシントン軍縮会議を傍聴



ハーディング大統領と
面会し少年少女からの
手紙を手渡す。



子供達の手紙を携へアメリカへ



1927年世界教育会議（トロント）に参加

ナイアガラ瀑布の前で全員集合の記念写真 前列中央が長七



preface

●はじめに

我らは長七の教え子だった

「長七さんからの手紙」

— 未来を担う若き人々へ —

「伊藤長七先生はどんな人だったのですか？」

五中・小石川創立百周年記念式典の日、若い生徒さんからこんな質問を受けました。その時、私の脳裏にある日の光景が鮮烈に蘇りました。

平成十四年四月十四日、今思うとその日は十三日祖父の誕生日の翌日でした。伊藤家に残された祖父の遺稿を中心にした長七資料の整理作業が行われた時の事です。参加して下さった小石川高校・諏訪清陵高校同窓会有志の方々は、まずその膨大な量に驚きの目を瞠りました。更に、長七直筆の巻紙の書簡の奔放な毛筆の文字、折々の臨場感あふれる写真、入学式の長文の演説の草稿、短歌が書かれた色紙、それらから香りたつて来る情熱は、その場にいた人々の胸に流れ込んでいきました。「立志・開拓・創作」を唱えた人物が、エネルギーあふれる実在の人間として立ち現れてきたのです。明治・大正・昭和を通

して、多分野に渡る発信をし続けた自由主義教育の開拓者・伊藤長七の人間像が、鮮やかに認識された日でした。伊藤長七の生前から没後に渡り、実に多くの各界の先達の方々が、歴史の変遷を超えて、その教育思想に篤く共感し、人となりをも語り伝えて下さいました。そして近年、長七資料に触れた方々の「長七の存在を伝えよう」という運動が始まったのです。

この度出版されたこの本は、その篤い思いが結集された結晶だと思います。伊藤長七著作七編が収録掲載されています。アメリカ、ヨーロッパへの教育視察の旅先から送られた手紙には驚くばかりのスケールの行動の軌跡が記されています。

各学校を回る事から始まって、国際軍縮会議を傍聴し、当時の米、欧の政治、経済、文化をも精察しようとする視野の広いフィールドワーク―アメリカ建国の歴史に想いを馳せ、人類文明の発祥に遡りその思考は古今東西の時空を旅するかの様です。

その中で長七さん―私の父はそう呼んでいました―のメインテーマ

は、全国から集まった少年少女の手紙一万数千通を各国の少年少女たちに配りきる事でした。その為にとつた長七さんの行動は、時の大統領に会い、世界平和を願う少年少女たちの純粹な心を伝え、青少年の国際交流を推進する事でした。校長の留守を守る五中の生徒さん達に大統領直筆の平和へのメッセージが記されたポトマック河畔の絵葉書をおみやげに持ち帰ったのです。手紙の文面にあふれる長七さんの熱い思い、伝えたい事を全て記した長文の手紙、その多重旋律の中に響き渡るのは、人間存在への大いなる信頼と生徒達への厳しくも慈父の様な深い愛です。

百年前の校長先生は、未来の生徒たち、あなた方へも語りかけているのです。

「全人間的教養を磨け。」

「正義人道を愛せよ。」

「正しきをふんで畏れず 自己の信ずるところを

どこまでも一貫する。」

「人各々命あり 人各々天職あり」

青く輝く地球の危機、過ちを繰り返す人類の歴史を未来に向かって是正していくのは、皆さん、若い世代のエネルギーと叡智です。長七さんの生涯の行動、全ての言葉は、皆さんが進む道に迷った時はなんらかの示唆を、怠け心には叱咤激励を、怯んだ時は困難に立ち向かう勇気を与えてくれるでしょう。

「伊藤長七とはどんな人だったのか」

皆さん、どうかこの本をひもといて、ご自分の長七像を思い描いて下さい。そして、あなた方未来の生徒たちに何を願ったのか、その呼びかけに応答えて下さい。

長七さんの手紙は、百年の旅をして、今再び、若き人々の元へ届けられました。長七さんの新たな旅立ちの時です。

「若き人々よ、核なき平和な、より良き未来へ向かって、ともに歩んで行こう！」

2022年11月 伊藤長七 孫・伊藤博子

CONTENTS

この本の発行の目的は、東京府立第五中学校初代校長の伊藤長七が、折に触れ残した冊子を次の世代に残すことにあります。

しかし、伊藤長七が亡くなって90年が過ぎようとしています。これらの冊子に残された長七の思いをより理解するために、第一部では伊藤長七の半生を物語として皆さまに紹介することにしました。

第二部は2003年に開催された府立五中・小石川高校創立85周年の記念同窓会で企画展示された14枚のパネル『我らは伊藤長七の教え子だった』を長く記録するため収録しました。

この85周年記念同窓会の参加者には、初代校長伊藤長七の半生をCDにまとめ記念品としてお配りしました。伊藤長七役は卒業生の加藤剛さん、ナレーションは長七の孫の伊藤博子さん。シナリオの元は伊藤長七が残した22冊の冊子。第三部はそのうちからシナリオに用いた7冊を選び紹介いたします。伊藤長七の生のお聞き下さい。



はじめに 7

第一部 伊藤長七物語 15

一八七七年長野県諏訪に生まれ一九二九年没するまでの長七半生。その波乱に満ちた物語をお楽しみ下さい。そして、長七の言葉に耳を傾けて下さい。

第二部 伊藤長七展パネル集 79

2003年の創立85周年記念同窓会の当日展示された14枚のパネルは参加者が熱心に見入っている姿が印象的でした。また、今も機会があるたびに校内で展示されています。

第三部 伊藤長七が残した冊子類 103

冊子には題名がないものが多いため、仮の題名を付けてあります。その目次題名の左に加藤さんの読まれた文の冒頭部を付けました。

あとがき 258

Part I

第一部

伊藤長七物語

伊藤長七物語



伊藤長七の半生その波乱に満ちた物語をお楽しみ下さい。そして、長七の言葉に耳を傾けて下さい。

目次

第一章 長野時代（一八七七年～一九〇一年）

長野県尋常師範学校時代	20
諏訪での訓導時代	21
小諸での訓導時代	25
島崎藤村	26

第二章 東京時代Ⅰ 高等師範学校（一九〇一年～一九〇五年）

嘉納治五郎	28
塩原ふゆと結婚	30
岩波茂雄	31

第三章 東京時代Ⅱ（一九〇五年～一九一九年）

東京高等師範学校附属中学校	33
諏訪中学校	34
東洋英和女学校	35
現代教育観	37
夏目漱石	38
後藤新平と新渡戸稲造	41

第四章 府立第五中学校校長時代（一九一八年～一九三〇年）

東京府立第五中学校長	43
標準服	45
夏期転地修養隊	46
紫友会・講話	48

第五章 長七、世界を駆ける（一九二一年～一九二七年）

第一回長期海外出張―欧米教育視察	51
（ハワイ・アメリカ本土・ヨーロッパ）	52
第二回長期海外出張―カナダ国際教育会議	59

第六章 長七を慕う人々・長七の親友

小山邦太郎	62
牛山充	64
島木赤彦と太田水穂	65

エピソード 伊藤長七の晩年	67
---------------	----

伊藤長七をめぐる人物100人リスト	71
-------------------	----

第一章 長野時代

一八七七年（明治10年）～一九〇一年（明治34年）

〈長野県尋常師範学校時代〉

一八七七年（明治10年）、長野県諏訪郡四賀村に生まれた伊藤長七は、十八歳で長野市にある全寮制の長野県尋常師範学校へ入学した。

長野県尋常師範学校は授業料や寮費など無料の給費制度があり、卒業後一定期間県内の小学校に勤務しなければならない義務があったが、その当時諏訪郡には上級教育機関がどこにもなく長野県内であっても長野県尋常師範学校一つだけだったので、この学校への入学は非常に難関であった。

三歳で母を亡くし祖母に育てられた長七は、幼い時には神童と呼ばれ、とてもおとなしく成績優秀であったため、地元の諏訪郡長から長野尋常師範学校入学を薦挙された。しかも難関を突破した新入生の中であってもトップの成績で入学している。

長野尋常師範の同級生には優秀な人材が多く後年、有名歌人となる太田水穂（太田貞一）や島木赤彦（久保田俊彦）らがいた。彼らは少年雑誌にたびたび寄稿したりして国文学や詩歌の素晴らしさをクラスに広めた。

「アララギ」の歌人となった島木赤彦は、長七とは諏訪からの幼馴染であり、長七の祖母の米寿を祝って「心砕きて御手づからせおい玉ひしいとし孫が世にいでそむるきのふけふ」など数首の

歌を捧げ、また結婚時など折りに触れて長七のために歌を詠むなど非常に仲が良かった。

また太田水穂は、歌人の四賀光子を妻とし、若山牧水の助力を受けて短歌結社誌「潮音」を創刊した。長七とは生涯にわたって長く親しい友であった。

長七も雅号を漢詩と諏訪湖から取って「寒水」と名乗り、二人に倣って大いに歌を詠んだ。

長野県尋常師範学校に入学当初、謹直で大人しく模範生であった長七は勉強していくうちに書物や同級生からの影響を受け、次第に自己主張が顕著になり理想に燃える活動的な若者へと変貌していった。同級生の一人が長七のことを「牧者に追われる羊が俄然猛虎となった」とその豹変ぶりを語っている。やがて長七は、学校制度や精神の矛盾に気付き、自治を旗印として皆の先頭に立ち理想教育の実現を目指し活動していった。この動きは徐々に大きくなってクラスから全校へと波及し、卒業間際には長野県全体の教育現場にまで及んでいった。

〈諏訪での訓導時代〉

一八九八年（明治31年）、長七は諏訪湖のほとりに立ち、これから新任教師として自分の理想教



伊藤長七 16 歳

育の実現に向けての熱い思いを胸一杯にしていた。そしていつも詩を高らかに吟じている高島城辺りをゆっくりと巡りながら、諏訪尋常高等小学校の門へと向かっていった。

諏訪尋常高等小学校では生徒たちが、新しい先生の登場を今か今かと待ちわびていた。そこに現れた長七の姿は、皆を驚かせるほどユニークなものだった。若き長七先生は鳥打帽に白袴を短く穿き、ステッキを振り回しながら飄々と門をくぐって歩いてきたのである。この恰好は長七お気に入りの出で立ちである。

長七は、赴任するや否や早速教育改革を始めた。他の教師たちが職員室に戻っている休み時間も、生徒たちと一緒に遊び、様々なことを話して聞かせた。すると彼らは、放課後や夜間に長七の自宅にまで押し掛けるようになった。やがて朝登校すると長七のもとに喜び集まるのが、生徒たちの日課となっていたのである。

子ども達には体育運動が非常に大切だというのが長七の持論で、諏訪湖を利用して湖水遊泳、月夜の湖水一周行軍、氷上運動（氷滑り）や高島城内での雪中行軍、雪投げ合戦などを生徒全員にやらせようとした。これには校長や一部の父兄たちが危険だと大反対したが、長七は一向に構わなかった。初めて生徒たちを引率して氷滑りをさせた時などは、校長は教師ばかりでなく町役場の職員たちを総動員してまで、中止させようとして大きな騒ぎになった。しかし結局のところ長七は大反対にも屈せず無事に氷滑り授業を行いきった。諏訪湖のスケート授業は長七が始めたものである。これらの一連の画期的な教育方針が親たちの反発を呼び、校長以下古参の教師たちは、生徒たちが日々生氣に溢れ、活発になっていく様を目の当たりにして、長七のカリスマ性を危険

視するようになっていった。

長七はもちろん遊びや運動ばかりでなく勉学が一番大切だと思っていた。明治の時代にもかかわらず男の子ばかりでなく女の子であっても学問は必要だと考え、担任していた優秀な女生徒たち数人に自分が卒業した「長野師範学校」の受験を勧めた。

女生徒の親たちは当初、女には高等教育は必要ないと考えていた。長七は各女生徒たちの親の家を訪ね、女性であっても学問は必要であること、規則正しい生活が送れる全寮制で費用の心配のない給費制度があること等を熱心に説いて回った。

最終的に三人の女生徒が受験することとなり、彼女たちの受験時には、長七は諏訪から長野師範のある長野市まで引率し付き添った。この入学試験引率出張についても、校長に大反対され職員会議で一波乱あったのだが、またしても長七はこれを強行してしまった。ちなみにその女生徒の一人は、後に長七の妻となる塩原ふゆである。



伊藤長七 訓導時代

度重なる校長からの命令無視や規律違反により、長七はたった一年で諏訪高等小学校を蹴になり、下諏訪尋常高等小学校へ転任となった。下諏訪尋常高等小学校でも長七の生徒たちへの働きかけや態度は変わらず、僅か六ヶ月足らずで岡谷の小学校に転任させられてしまった。そこでもまたまた校長と衝突し、遂にその年度末には転出を余儀なくされた。

しかし諏訪郡内には遍く長七の悪評が伝わり、最早どの学校も長七を引き受けようとはしなかった。このような場合、県知事の判断を仰ぐことになっていて、これを通称「公売に付される」と言われ、教師にとつて最も屈辱的なことであった。そしてもし受け入れ先がどこにも見つからなかったら、長七はたった二年間で教職を辞めねばならないことになってしまう瀬戸際に立たされた。だが幸いなことに佐久郡の小諸高等小学校首席教師の伴野文太郎が、長七の優秀さと教育への情熱を理解して引き受けてくれた。まさにすんでのところ長七は拾われたのである。

春まだ寒い四月初め、諏訪湖畔の料亭に多くの友人が集まり長七の送別会が開かれた。さすがの長七も「公売に付された」ことの屈辱感とあわや職を失うかもしれない危機感があったのか、しおらしく先輩や同輩たちの和歌による励ましや戒めの言葉に思わず涙した。そしてその数日後、長七は同僚や友人、諏訪の生徒たちに見送られ、高島城を後にして小諸へと旅立った。

意気消沈していたかの様子を見せていた長七ではあったが、実は全くめげてはいなかった。和田峠を越える頃には、いつもように大声で詩を吟じ、ステッキを振り回して、新たな土地での理想教育実現の思いに燃えながら小諸へと向かっていった。

〈小諸での訓導時代〉

諏訪には高島城址があり、小諸には小諸城址の懐古園がある。長七はいつも高島城残塁の高みに立ち、詩を吟じていたのだが、ここ小諸の懐古園にも絶好の吟じ場所があった。それだけで長七は小諸という場所が気に入った。小諸高等小学校では、首席教師の伴野友太郎という良き理解者を得たことや「公売」に付されてしまったという事実に向き合っていて、さすがの長七も少しは自重したのか校長との衝突は何とか避けられた。そして生徒たちからは、諏訪にも増して絶大な信頼と尊敬を勝ち取ったのであった。

その中にも代々醸造業などを営んでいた小諸の名家、小山家の長男邦太郎の長七への傾倒ぶりは、半端ではなかった。優等生で級長だった邦太郎の影響は、他の生徒たちに及び、小山家の家族までも長七へ全幅の信頼を寄せるようになり敬愛した。土地の有力者小山家の信頼を得られたことで、小諸では他の生徒の親たちからも長七の画期的な教育方針は、概ね受け入れられた。

長七の熱血教師ぶりのエピソードとしては、腕白で人に迷惑ばかりかけていた札付きの生徒を叱って二度とやらないと誓わせたのに再びやってしまった時に、「男一匹誓ったことは死んでも守らにやならん。それが出来なかった弱い意思をここで叩きのめしてやる。だが君のその意思を直してやる力がなかった私も悪い」と号泣しながら生徒をビンタして、自分の頭を何度もげんこつで強く叩いた。長七の熱き涙と言葉の迫力に圧倒され、その生徒、依田巻人は以後見違えるような模範生となり生涯長七を敬愛し、後年、長七を慕い作られた小諸小学校の同級会「立志同級会」（長七が命名）の幹事の一人となり、長七の頌徳碑建立に一役買った。

〈島崎藤村〉

懐古園に近い長七の下宿先傍に小諸義塾という私塾があった。小諸義塾には、島崎藤村が国語と英語の教師として長七より一年ほど前に赴任していた。藤村はその時、既に「若菜集」を発表していて、詩人として華やかに文壇に登場していた。長七はかねてから島木赤彦や太田水穂から憧れの藤村の話は聞いていたので、小諸に着任するや否や藤村を訪ねて教育や文学について熱弁を奮った。さぞかし藤村はこの厚かましいとも言える長七の振る舞いに面食らったに違いない。

だが藤村は、長七の嘘のない真直ぐな性格と教育に対する造詣と情熱を、たちどころに理解し二人の親密な交流は始まった。二人は春に朧月夜の下、懐古園の桜をめながら散歩し、秋には碓氷峠から錦繡の山並みを見渡した。その間、長七は敬愛する藤村の話をただ傾聴するだけでなく、自分の教育への思いを大いに語ったのであった。

またある時、長野師範学校の大先輩大江磯吉が、大変優秀な教師にも拘わらず出自のことからの差別で何度も転任させられてしまったことを、理由は違っても長七自身同じように短期間での転任を強いられたことと相まって大きな義憤を感じ藤村に話して聞かせた。これが藤村の小説の処女作「破戒」へと繋がったのである。長七は、藤村の小説執筆へのヒントを与えただけでなく、「破戒」の中の土屋銀之助のモデルになったのではないかと言われている。確かにステッキを振り回す外見や行動は、長七に似ている。



島崎藤村

「小諸を去る辞」 抜粋

ああ我、
またついに小諸を去らざるべからざるか。
懐かしき哉、小諸の土地よ
御身の四周をめぐる山と水と
御身の身边をかざれる森と花と
御身の上を流るる清涼の空気と
御身が生みたるあどけなき少年少女と
御身の中にそばだち見ゆる小諸小学校の
建物と
また特に我が受け持ち百三十人の
少年を教えたる薄暗き土蔵と
楽しかりしは晩春の修学旅行なりき。
……中略……
顧みる、信濃教育界における我が三カ年の
歴史を思えば、恍として只夢のごとし。
さらば浅間の山
さらば千曲の川
さらば小諸の知己
さらば我が学校の諸君
さらば我が教えの庭の子等
さらばよ故国信濃の山河健在なれ
いざ別れん哉
〈1901年（明治34年）〉

小諸での一年はあっという間に過ぎ、長七は東京の高等師範学校へ入学することになった。もともと長野師範を卒業した時点から高等師範学校へ進学したいとの希望はあったが、地元の小学校への奉職が師範学校の給費制度を受けた者の義務で、すぐには進学出来なかったのである。進学の夢が叶い希望に燃える反面、島崎藤村や小山家など小諸の人々、特に生徒たちの熱き心に接して、たった一年で小諸を去るのは断腸の思いであった。長七はこうした小諸への思いの丈を長文「小諸を去る辞」にしたためた。

第二章 東京時代 1 高等師範学校時代

一九〇一年（明治34年）～一九〇五年（明治38年）

高等師範学校へも長七は優秀な成績で入学した。同じ長野県出身からなのだろうか澤柳政太郎校長に対して新入生にも拘らず、いつもの調子で臆せず堂々と接していく長七だった。

澤柳政太郎は後に文部次官、東北帝国大学総長、京都帝国大学総長を歴任し、その後成城学園を創立するのだが、長七とは、共に信濃通俗大学会創立へ尽力し、また一緒にカナダの国際教育会議に出席するなど生涯にわたって関わっていくのである。



澤柳政太郎

〈嘉納治五郎〉

長七が入学した翌年、高等師範学校は、広島にも高等師範学校が出来ることを機に東京高等師範学校へと改名し、著名な教育者、嘉納治五郎が校長としてやって来た。嘉納治五郎はそれ以前にも二度高等師範の校長になっていたの、三度目の校長就任である。

長七にとって大変尊敬し憧れていた嘉納治五郎との出会いは非常に貴重なものとなった。嘉納治五郎はその時、既に講道館を設立主宰し、自由な教育と運動教育の大切さを説いていた。それは長七の教育理念とも合致していた。

以後長七が学生時代そして卒業後、附属中学校に教師として勤めた実に十七年間にわたって嘉納治五郎は、常に東京高等師範学校校長であった。

どんなに近づき難い大人物であろうと長七の物怖じしない性格は、嘉納治五郎との出会いにも遺憾なく発揮され、積極的にアプローチすることによって大きな影響を受け、且つ学んでいった。嘉納治五郎から国際交流の重要性を説かれたからか、長七は英語を専攻し、またもや優秀な成績で卒業した。

教育学に於ける嘉納治五郎の長七に対する信頼も厚く、東京高等師範学校内に「中等教育研究会」なるものを作った際には、事務局長を長七に任せている。これは単に長七が学問的に優秀であっただけでなく、あらゆる方面でのネットワーク力やフットワークの良さに起因していたからであろう。

長七は講道館にも通い、東京高等師範附属中学校の「柔道部長」を務めた。それまで惨敗を期してばかりいた対戦校、院長乃木大将の学習院中学に勝った時は、長七大いに喜んだという。また講道館では、多くの嘉納治五郎の弟子たちと親交を結んだ。その代表的な人物に、後に外交官となる嘉納治五郎お気に入りのお弟子の杉村陽太郎がいて、長七の渡米出張時には便宜を図ってくれた。



嘉納治五郎

もう一人は、ウラジオストクに嘉納治五郎と一緒に銅像が建てられている「ロシア柔道の父」と呼ばれた小樽商学校教授の苫米地英俊で、長七が一時北海道に移住を考えるほどの親しさであった。

〈塩原ふゆと結婚〉

諏訪高等小学校の教え子の塩原ふゆは、大変優秀な女生徒で、反対する親を長七が説得して長野県尋常師範学校に進学した。受験の時も長七がわざわざ諏訪から長野まで付き添って物議を醸し、小学校長から叱責されるという事件もあった。

その時から心の奥底には、お互いほのかな想いがあったのだろう。二人の気持ちは、その後もずっと続き、ふゆが長野県尋常師範を卒業し諏訪湖ほとりの高島小学校へ奉職する頃には、結婚への思いは固まっていた。

長七は既に二十六歳になっていたが、まだ学生の身であったため、経済的にもすぐ結婚するのが難しかった。しかし翌年、ふゆは実家から高島小学校へ通勤し、長七は東京で学生生活を続けるといふ別居婚に踏み切った。二人の純愛が実を結んだのである。別居婚はその後三年間続いた。

嘉納治五郎は、別居結婚で経済的に困窮している長七のためにいくつかの講師の職（アルバイト）を紹介した。一つは、嘉納治五郎自らが作った留学生のための学校「宏文学院」の講師の口と



伊藤長七 26 歳頃

もう一つは校長以下主たる教師はカナダ人の「東洋英和女学校」であった。その「東洋英和女学校」では、長七が後に東京府立五中校長になるまでの実に十三年間にわたって講師を勤めたのであった。

〈岩波茂雄〉

長七と同郷で四歳年下の岩波茂雄は、近所で評判の長七のことを幼い時からとても慕っており、茂雄の母親もまた長七に絶大な信頼を寄せていた。

茂雄が国粹主義者の杉浦重剛に心酔し諏訪実科中学を中退して、杉浦が校長を務める日本中学に入学するために上京する際、小諸にいた長七は、茂雄を自宅に一泊させ、お得意の詩を高らかに吟じて東京に送り出した。跡取り息子である茂雄の上京は、親戚や近所の外間が悪いため、子煩悩な母親が隠れるように茂雄を諏訪から出発させて、長七に小諸から東京への歓送を頼んだのであった。

茂雄は上京後、日本中学から第一高等学校へ進み多くの友人を得た。特に秀才藤村操や安倍能成と親しくしていた。

ある時、藤村操が心そこにあらずの態度で英語の授業を受けていたため、教師の夏目漱石から酷く叱責された。すると藤村操は、その二日後に華厳の滝で自殺



岩波茂雄

してしまった。この事件はセンセーショナルに報道されて、漱石は自分のせいではなかったかと悩み、岩波茂雄は親友の死に大きなショックを受け、一高を中退し信濃の野尻湖の弁天島に籠ってしまった。安倍能成は、愛する人の兄（後に妹と結婚）である親友の藤村操の死に衝撃を受けたと同時にもう一人の親友岩波茂雄の隠遁に心悩ませ、長七のもとへ相談に行った。茂雄の母親の方からも相談を受けていた長七は、学業に戻るよう根気よく茂雄を説得した。最終的に母親を野尻湖に行かせることで大いなる母の愛情に気付かせ、茂雄は遂に復学することとなった。

長七は、茂雄が東京に帰った後も何かと気遣い、真宗大谷派僧侶の近角常観が主宰している本郷の求道学舎へ通うことを勧めるなど、精神的に弱っている茂雄を助けた。

その後、茂雄は紆余曲折を経て東京帝国大学哲学科選科を卒業し教師になったが、自信が持てず辞めて、神田神保町で古本屋を開いた。この時期あたりから長七の影響が、茂雄に見られるようになり精神的に逞しくなっていた。

茂雄は新しく開く店の看板を夏目漱石に書いてもらっている。そして翌年の一九一四年（大正三年）には、「こころ」を初出版させてもらうのである。夏目漱石の「こころ」が、出版社「岩波書店」の出発点であった。

そして一九一六年（大正五年）に漱石が亡くなった翌年には、「漱石全集」を刊行し大成功を収めるのである。

成功した後でも岩波茂雄は、伊藤長七への感謝と敬愛の念を忘れず、長七の海外渡航に際した時などに金銭的援助を怠らなかった。現在の岩波書店の資料室には、長七の岩波茂雄に送った多数の書簡が、いまだに保存されている。

第三章 東京時代 2

一九〇五年（明治38年）～一九一九年（大正8年）

〈東京高等師範学校附属中学校〉

長七は、東京高等師範学校を卒業し、附属中学の教師となった。国立の附属中学には優秀な生徒が集まっいて、長七は諏訪や小諸と同様、都会の生徒たちにも大いに受け入れられ人望を集めた。また生徒たちだけでなくその親たちとも密な関係になっていた。

教え子の伊集院松治、竹二（大野竹二）兄弟の父親の伊集院五郎は、第五代連合艦隊司令長官（前任者は東郷平八郎）の海軍元帥の地位にあったが、筆まめな長七は長年にわたって伊集院五郎や妻の繫子に書簡を送り続け、また兄弟二人も附属中を卒業し、海軍兵学校に入った後も長七に近況を知らせるなど、伊集院家との繋がりは深いものがあった。



伊集院五郎

また夏目漱石の「吾輩は猫である」に出てくる近所の医師、甘木先生のモデルと言われる尼子四郎は、教え子の尼子富士郎の父親でお隣に住む漱石と親しくしていた。漱石に息子富士郎の高師附属中学の英語の受験指導を頼んだが、漱石は家庭教師を引き受けたものの富士郎の出来の悪さを嘆いたらしい。しかし富士郎は高師附属中学に無事合格し、長七の指導の下、成績優秀で卒業し後年老人医学の先駆者となった。

尼子四郎と夏目漱石は、単に医者と患者というだけでなく、漱石お気に入りの画家、結城素明を交えて芸術愛好仲間として親しい友人となっていた。そこに何と長七が、夏目漱石や尼子四郎とだけでなく結城素明とも関わって交流していた書簡が残っているのである。

あらゆるチャンスを逃さず何事にもエネルギーをぶつかっていく長七には、ただただ驚かさるるばかりである。

他にも高師附属中学の教え子には、ジャーナリストの石川欣一、地震学者の石本巳四雄、高島屋の飯田東一など長じて著名になる人物が多々いて、彼らは皆、後々まで長七を敬愛していた。

〈諏訪中学校〉

その頃諏訪では諏訪中学校が新設され、生徒の中から校歌を作ろうとの機運が高まり、かつての長七の諏訪高等小学校時代の教え子が、新設の諏訪中学校には縁もない、しかも東京に住んでいる長七に、わざわざ作詞を頼んできたのであった。

たった一年間だけであっても、諏訪高等小学校の生徒たちの心の中に、長七の教えが強烈に残っ

ていたのである。長七が作詞した八番もある長い校歌は、諏訪中学から諏訪清陵高校になった今も「♪東に高き八ヶ岳♪」と歌われている。

同じように長七を慕っていた諏訪中学の生徒に小平権一がいた。小平権一は諏訪高等小学校で直接長七に教えられた訳ではなかったのだが、有名な同郷の先輩長七を尊敬し何かと頼っていた。権一が諏訪に「道志社」という学生寮を作った時や、その後上京して一高、帝大に進んで「東京道志社」を結成する際に長七に相談して趣旨書を頼んで書いてもらった。長七は「道志社」の精神的指導者としてだけでなく、諏訪の財界人に建設資金調達の根回しをするなど面倒見良く、多方面に働きかけて権一に協力した。

権一は、プライベートルな面でも長七を頼り、相談に乗ってもらっていたため、生涯に渡って感謝の気持ちを忘れなかった。後に自分の息子を、長七が校長になった府立五中へわざわざ入学させたりもした。その息子とは、日本で初めて数学界のノーベル賞といわれる「フィールズ賞」を受賞した小平邦彦である。

〈東洋英和女学校〉

東洋英和女学校は、カナダから派遣された女性宣教師たちが主に教師を務める女学校であった。長七は東京高等師範学校を卒業したばかりで、学生結婚したふゆとはその時まで別居中であり、嘉納治五郎に斡旋された東洋英和女学校の講師の職は経済的にありがたかった。しかも東洋英和女学校という職場は、国際感覚を身に着け、英語能力を向上させる上でも絶好の場であったのだ。

長七の担当教科は教育学であって生徒に英語は教えていないが、職員室でまったく物怖じせず、陽気にカナダ教師陣に話しかけている姿が目には浮かぶ。この職場で長七の英会話力が上達したことは想像に難くない。

長七は正式に東京高等師範附属中学の教諭となつて、ふゆを諏訪から呼び寄せた後も、十年以上東洋英和女学校の講師を続けた。そしてクリスチャンでもない長七が長きにわたつて講師を続けることが出来たのは、教育指導能力が優れていたことに外ならず、事実カナダ本部へ送られた校長や理事が出席する東洋英和女学校理事会の報告書にも、長七の評価が高いと記されている。

「赤毛のアン」の翻訳で有名な村岡花子は、東洋英和女学校を卒業して一時、甲府の女学校の教師になつてゐるが、長七から教育学を学んでいた。その当時、キリスト教教育をする東洋英和女学校には政府の圧力があつて、日本人教師による教育学の授業を受けなければ、卒業してから教職に就くことが出来なかつたのである。村岡花子とその親友で歌人の柳原白蓮が一緒の卒業写真には、長七が特徴ある風貌（禿げ頭）で並んで写つていて、とても目立っている。

長七が講師として勤めている時に、北米のプロテスタント系キリスト教徒の人々の基金によつて、日本初のキリスト教系女子大学創設の話が持ち上がり、東洋英和女学校の高等科が併合されることになつた。校長のイザベラ・ブラックモア等が、中心となつて東京女子大学創設へと動いていくのだが、東京女子大学初代学長となる新渡戸稲造が、度々東洋英和女学校へ講演者として訪れていた。長七は、ここで嘉納治五郎に勝るとも劣らない国際派の大人物、新渡戸稲造と知り合いそし

て新渡戸稲造の親友、後藤新平へと繋がっていくのである。

〈現代教育観〉

長七は東京高等師範学校附属中学校の教諭時代に嘉納治五郎が主宰する「中等教育研究会」の事務局長を務める傍ら、自身も教育研究について深く考察し論説文にしたためていた。そんな時、思いもかけない発表の機会が訪れた。一九一二年（明治45年）四月三十日から七月一日までの何と四十八回にもわたって、朝日新聞の文化欄に黒風白雨楼のペンネームで「現代教育観」と題して論説文が連載されたのである。日頃、長七が考察しているその当時の教育界、教育行政や学校教育システムの欠点や弊害などの論説ほか「海外に於ける同胞子弟の教育」、「日本と米國にて教育せられたる児童観念界の対比」、「支那学生教育の失敗」、「朝鮮半島の教育行政、偉人の施設経緯に待つ」などという題目も掲載された。これらは明治末期だけでなく現在でも十分に通用する考察であって、長七の慧眼には只々驚かされる。

この連載は大きな反響を呼び、朝日新聞社に読者の意見が多寄せられたので、同じ年の十月には「読者の声」などを追



現代教育観第一回

記・補記して単行本として出版された。

たかだか三十六歳のそれも無名の一中学教諭が、どうして朝日新聞に論説を連載出来たのか疑問に思うが、その答えは、長七が「現代教育観」を単行本化した時の自序に二人の人物へ感謝の辞を述べていることで分かる。一人はその頃もう既に歌人として名を上げていた長野師範学校の同級生太田水穂で、彼の強力な後押しがあった。もう一人は朝日新聞社社員の薄井長梧という人物で、この連載の実現に直接携わっていた。

薄井長梧（北澤秀一）は、予てから夏目漱石を敬愛し且つ親しくしてもらっていて、漱石が東京帝国大学を辞め朝日新聞に入社すると、既に読売新聞の社員であったのにもかかわらず、漱石を追うように朝日新聞に入社した。漱石亡き後、薄井は朝日聞社を辞め漱石を偲んで英国に渡り、帰朝後にロンドン報告として「モダンガール論」を発表し、日本に於ける「モダンガール」の命名者と言われている。

この薄井と長七を結びつけて「現代教育観」の朝日新聞連載の影の力となったのは、夏目漱石ではなかったかと思われる。

〈夏目漱石〉

「吾輩は猫である」を一九〇五年（明治38年）ホトトギスに発表後、漱石は東京帝国大学教師の道を捨て、一九〇七年（明治40年）朝日新聞に入社し職業作家としての道を歩み始めた。

一九〇八年（明治41年）、朝日新聞に連載された「三四郎」に何と伊藤長七と思しき中学教師が

登場してはいたではないか。

第十章のところで三四郎が広田先生の家に病氣見舞いに行くと、座敷で広田先生と柔道の形を実演している中学教師がいて、三四郎が持参した土産の柿を三人で食べる場面がある。学科以外に柔道も教えるその中学教師は、広田先生の家で柔道の形を実演し先生を組み敷いてしまう事（長七なら他人の家の座敷で目上の人を組み敷くことくらい平気でやったであろう）、生活難で妻を国元に預けている事（新婚のふゆとは経済的理由で東京と諏訪とで三年間別居）、一つ所に長く留まっていられない事（二年間で三回も辞めさせられ、四つの学校に勤めた）、紛擾の事（正木直太郎長野師範学校長教科書取賄裁判で長七は正木無罪弁論の証言に立った）などそれまでの長七が辿った人生と悉く符合するである。

この中学教師は「三四郎」の中でこの場面にだけにしか出てこないが、貧しくて辞職に怯えながらも前向きで、学生生活が如何に充実していたかを懐かしむこの人物を、漱石らしくシニカルな表現で三四郎に語らせている。

岩波茂雄が親友藤村操の華嚴の滝投身自殺にショックを受け精神的ダメージを被って野尻湖への引きこもってしまった事件をきっかけとして、長七は、安倍能成を通じて夏目漱石と関わりを持った。また漱石の家の隣に住む高等師範附属中学の教え子、尼子富士郎とその父親四郎との関係から



夏目漱石

も、長七は厚かましく漱石宅に出入りしていた。

夏目漱石は、育った環境が影響したのか癩癩持ちで神経質、人に対する見方が辛辣でありまた上昇志向の強い人間や名譽を重んじる人たちを嫌っていたので、自分に積極的に近づいてきて饒舌に語る一中学教師を初めのうちは、あまり快く思っていなかっただろうと想像できる。

だがその一方で漱石は多くの弟子たちに慕われて面倒見も良く、本質のところは優しい人物であった。それ故、島崎藤村や他の多くの大人物と同様にやがては、長七の教育に対する真摯な姿勢や考察、そのエネルギーッシュな行動力に心を動かされていたのではないか。

一九一一年（明治44年）の漱石の日記に伊藤長七が訪ねて来て、長野県での講演を頼んでいったと記されている。

漱石は前年の「修善寺の大患」で入院し、やっと退院したばかりだということにもかかわらず快く長七の申し出を引き受けた。鏡子夫人は、病後間もない夫を心配して当初この講演旅行に反対するのだが、漱石は聞き入れなかった。それで講演旅行の妻同伴を恥ずかしいと嫌がる漱石に有無を言わず、夫人は強引に付き添って行くことでこの旅行を承知した。

長野講演は長七ゆかりの地の三か所で催された。まず島崎藤村や小山家など長七の思い入れの深い小諸、卒業した長野師範学校のある長野、そして故郷の諏訪、しかもその会場は、かつて妻ふゆと親友島木赤彦と一緒に勤めていた高島小学校の講堂であった。

この長野講演は各地で盛況を極めた。また漱石はあちこち楽しく觀光もして無事に帰宅出来たため、殊の外ご機嫌であったらしい。そのことは長野各地で世話になった信濃教育界の人たちに（長七の親しい友人守屋喜七宛て）送った漱石の書簡などで伺い知ることが出来る。

長七の「現代教育観」が朝日新聞に連載されたのは、この漱石の長野講演旅行の翌年一九一二年

(明治45年)であった。

〈後藤新平と新渡戸稲造〉

後藤新平が台湾総督府民生長官の時に五歳年下の新渡戸稲造を技師として台湾に招聘して以来、後藤は貴族院議員となり政府の重職に就き、新渡戸は東京帝国大学教授となっていたが、二人は度々一緒に欧米視察旅行をするなど長きにわたって親しい関係にあった。後藤新平は、予てより通俗大学(社会人教養大学)の必要性を提唱し、新渡戸稲造もリベラルアーツの重要性を実感していたので、二人は協力して通俗大学の創立を図った。

そこで重職にあるこの二人に代わって実際に行動し、通俗大学「信濃夏期大学」の実現に漕ぎ着けることができた一番の功労者が、長七であったことを忘れてはならない。

大臣を歴任しているような偉い大人物の後藤新平に対して、二十歳も年下で一介の中学教師にも拘らず、卑屈な所が全くなく積極的に接していくのが長七の常で、通俗大学会を創立するために信州への橋渡し役を自ら率先して引き受けた。



後藤新平

まず長七は、後藤新平の「通俗大学」講演会を長野県各地で開くことを企画し、長野県教育界での通俗大学の理解を深めることに成功した。また長野出身の財界人からの経済的支援を取り付けるために活躍し、長七のネットワーク力は遺憾なく発揮されたのだ。

その結果、総裁に後藤新平、会長は新渡戸稲造となる信濃通俗大学会が創立され、理事には、長野出身の澤柳政太郎博士と加藤正治博士そして伊藤長七の三人が選ばれた。それから藤原銀次郎や

田中銀之助といった著名な財界人が監事となって、遂に一九一七年（大正6年）「信濃木崎夏期大学」が開学した。また翌年には「軽井沢夏期大学」も始まった。

講師陣の選択にも長七のネットワークがフル活動したので、後藤新平、新渡戸稲造、澤柳政太郎、加藤正治たちは勿論だが、吉野作造、神田乃武、小平権一、鳩山秀夫等、高名で魅力的な講師たちが揃った。

裏方の世話役として八面六臂の活躍を見せた長七ではあったが、「信濃木崎夏期大学」では、教育論講演の壇にも立った。ちなみにこの「信濃木崎夏期大学」は現在に至るまで長きにわたって続いている。



新渡戸稲造

第四章 府立第五中学校校長時代

一九一八年（大正7年）～一九三〇年（昭和5年）

〈東京府立第五中学校校長〉

一九〇一年（明治38年）、東京府立第一中学校からの分校として東京の三地域に府立第二、第三、第四中学校が創られた。以後東京府には十七年間、この四校しか公立中学校がなく年々入試難が激化してきたため、一九一八年（大正7年）に府立第五中学校が新設されることになった。

その校長に東京高等師範学校附属中学校教諭の伊藤長七が大抜擢されたのである。

信濃通俗大学会創立の際に大活躍を見せた長七は、時の東京府知事井上友一に認められ新設中学の校長に任命された。井上東京府知事だけでなく内務大臣後藤新平や新渡戸稲造、澤柳政太郎、そして嘉納治五郎といった大人物の後ろ盾があったためであろう、長七はそれまでの公立中学校とは一線を画すユニークな中学校設立を許された。



授業風景

「立志・開拓・創作」をモットーに自由、自治の精神が五中教育の基本に据えられ、特に理化学教育を重視し、緻密な考察力をもって知力、体力の備わった人格者を養成することを最大の目標とした。上級学校受験合格のための知識の詰め込み教育などは決してせず、広く教養を深め、自分自身で考え行動しろという長七の教師になって以来の持論そのものである。

先ず教師陣に優秀な人材を集めた。英語の岩崎民平（研究社英語辞書の編纂者）、音楽の築田貞（「どんぐりころころ」や「城ヶ島の雨」の作曲者）、図画の矢沢弦月など後に著名になる人物を多数採用した。それから漢文の栗山津禰（日本初の男女共学大学「東洋大学」に入学した最初の女子学生）や英会話のジェネビーブ・コールフィールド等、日本の教育史上初めて男子中学校の教壇に女子教師を立たせたことも画期的であった。

長七はまた「熊鶴亀犬猿猫体操」という熊、鶴、亀などとの掛け声のもと、皆で同一の動作はせず、各自勝手に動物の動きを発想し体現するといういかにも長七らしい健康法を考案した。しかしこの体操は、集団で各自勝手に行う動きが特異な状況に見えるようで、残念ながら生徒たちには不評であった。



熊鶴亀犬猿猫体操



女教師による英語の授業

毎年五月五日、端午の節句の休日に長七は、全校生徒を校庭に集め、鯉のぼりの腹に風船をたくさん詰め、背びれなどにも取り付けて「アメリカ大陸まで飛んでいけ」と叫んで大空に舞い上がらせた。この行事は、生徒たちの胸に熱い思いを満たすことができ、いたって好評であった。

後日、鯉のぼりが埼玉県南埼玉郡に落ちてきたとの知らせに「鯉のぼりはアメリカまで行った後、埼玉まで帰ってきた」と、長七は生徒たちを大いに笑わせたという。

五中名物になった鯉のぼり飛ばしは、長七亡き後も毎年続いたが、不幸にも日中戦争で終わってしまった。

〈標準服〉

府立五中のブレザーにネクタイ姿の標準服は、質実剛健の詰襟服姿が当たり前の時代にあって、世の人々を驚かせた。しかも制服ではなく、あくまでも標準服であったので例えば詰襟服を着ても服装違反を咎められることはなかった。長七は英国の名門パブリックスクールの校風を範として紳士的に振舞うことを、生徒たちに望んでいたのも、まず服装から入って背広にネクタイという「紳士」としての



朝礼



鯉あげ

自覚と誇りを持たせようとしたのである。

長七は度々朝の講話で「諸君は若年といえどもジェントルマンである。故にわが府立五中は紳士の学園である。生徒を小紳士として遇するのであるから自覚をもって行動せよ。従ってわが校に罰則というものはないのだ」と話していた。

長七の朝礼での話は、いつも長く時には泣きながらの熱血ぶりであったので、初めのうちは辟易しながらもやがては生徒たちの心を揺さぶっていったのであろう。皆のびのびと自己を表現し、自発的に学ぶといった府立五中生独特の生活スタイルを身につけていった。

〈夏期転地修養隊〉

知力ばかりでなく体力も重要と考えていた長七は、生徒たちに農村生活を体験させて、農業が我が国の基幹となることを体得し、合わせて心身の鍛錬、知識の修養を図る目的をもって「夏期転地修養隊」を計画実行した。一九一九年（大正八年）の初回は、夏休みに入ってから約二週間の日程で総勢六十人の生徒たちが上野駅を出発し、先ず軽井沢へ行き軽井沢夏期大学宿舎に一泊した後、小諸では長七の教え子の小山邦太郎の案内で製糸工場や懐古園を見学し、北佐久郡志賀村の法禅寺に一週間ほど逗留。そこで芋堀、田草取



転地修養隊法禅寺(1920年)

り、山林の手入れ、桑園手入れなどの農作業を実体験した。その後長野に行き善光寺参りを済ませ、戸隠に回って野尻湖から長野を経て上野に帰着というスケジュールであった。次の年以降には、諏訪や木崎夏期大学の方にも足を延ばして、夏目漱石の長野講演の時もそうであったが、長七の長野県に於ける馴染みの場所が一目瞭然で面白い。

「夏期転地修養隊」は、北佐久郡志賀村村長の神津猛の全面的な協力のもと、北佐久郡の多くの人々が府立五中生徒のため「夏期転地修養隊」実現に力を貸してくれた。志賀村長の神津猛は「赤壁の家」で知られる佐久の名士、実業家で、島崎藤村、田山花袋、高浜虚子等多くの文人との交流があり、中でも島崎藤村が一九〇六年（明治39年）に「破戒」を自費出版する際には多額の援助をしたことで知られている。長七とは当然小諸時代に島崎藤村を介して知り合ったのであろう。その当時、神津家で話題に上る人物は、島崎藤村は当然として藤村に勝るとも劣らなかつたのが、長七だったそうである。それ故なのか神津猛の息子の神津康雄は、わざわざ東京の府立五中へ進学している。

また神津猛は長野の考古学発展に寄与した人物で、転地修養隊で泊っている五中生徒たちに考古学の話聞かせた。それがきっかけとなって考古学に興味を持った江上波夫は後に「騎馬民族征服王朝説」を唱える有名な考古学者となった。

神津猛と長七を結びつけたのは、島崎藤村であるが、東京府立五中の校歌の作曲者北村季治を紹介したのも藤村である。藤村と北村季晴は明治学院の同級生で仲が良かった。北村は、東京音楽学校を卒業し青森の師範学校



神津猛

を経て長野師範学校の音楽教師として赴任した。そして一九〇〇年（明治33年）に、今や長野県歌となっている有名な「信濃の国」を作曲したので、長七は藤村の紹介を受け、五中校歌の作曲を北村季晴に依頼した。作詞は当然伊藤長七である。

〈紫友会〉

長七は学校経営者としても卓抜な才能を見せた。

「紫友会」という今のPTAのような教職員、生徒、保護者（保証人）からなる会員組織を作り財団法人化して長七自ら理事長を兼任した。

また保証人の中の有力会員を評議員として、学校施設の拡充や奨学金制度などの基金作りを委託した。そして事業報告や会計報告は、会員全てに周知され公明正大に徹していた。

当初の評議員には、実業家の井上角五郎や安田善三郎、中央公論社の麻田駒之助、ジャーナリストで政治家の安藤正純、国文学者で当時国学院大学学長の芳賀矢一、仏教学者で後に東洋大学学長になる高島米峰など各界の錚々たる名士が選ばれていた。

特に北海道炭礦鉄道や日本製鋼所を設立した実業家井上角五郎は「紫友会」の有力なスポンサーとなり、また長七の海外渡航の際にも援助を怠らなかつた。

〈講話〉

長七は、軽井沢夏期大学を後藤新平や新渡戸稲造と共に設立した経験から、ただ学業の知識を得

れば良いということではなく、広い教養を身につける大切さを生徒たちに学ばせようと長七お得意のネットワーク力を駆使して、各界の著名人を講話者として数多く招いた。

嘉納治五郎、後藤新平、澤柳政太郎等は勿論のこと新渡戸稲造は一九二〇年（大正九年）から国際連盟事務次長となりスイスジュネーブへ転居しているので、その代わり東京女子大学二代目学長の安井てつ、恵泉女学園創立者の河合道、鉄道省官僚の鶴見祐輔（後藤新平の娘婿で後に政治家になる）等の新渡戸稲造の愛弟子たちが講話者として府立五中を訪れている。

学者では東京帝国大学法学部教授の末広殿太郎や寛克彦らが壇上に立ち、その他、後藤新平東京市長の元で東京市助役、その後東京市長を務めた永田秀次郎、東京女子医科大学創設者の吉岡彌生、外務省課長の武者小路公共（作家の武者小路実篤の兄）、文筆家で歌人の三宅花圃（三宅雪嶺の妻）、諏訪出身の軍人永田鉄山（後に暗殺される）、世界旅行冒険家の菅野力男、麻布学園創立者江原素六、女性運動家の久布白落美といった中学生向けにはもったいないほどの実に高尚でバラエティーに富んだ講話者たちを招いている。

また、近代吟詠の祖と呼ばれる諏訪出身の木村岳風（松木利次）は、人生に迷いこれからの自分の身の振り方を相談しに五中の校長室を訪ねた際、長七にその吟詠力を見出され全国に詩吟を広めることを勧められて従った。長七も木村岳風の活動を助け、五中の生徒たちに講話として吟詠を聴かせる機会を度々設けた。

講話は、五中が創立されてから海外渡航出張の期間を除いて、長七が病に倒れるまで続けられた。

第五章 長七、世界を駆ける

一九二二年（大正10年）～一九二七年（昭和2年）

長七は一九一九年（大正8年）一月、東京府立第五中学校校長の辞令を受けてから、昭和四年の元旦、病に倒れるまでのおよそ十年間に四度、海外出張をしている。その内の二回は、「全国中学校校長会議」で、一回目は一九二二年（大正10年）に奉天で行われ、長七は満州、朝鮮を回って他の中学校長たちと同じように帰国した。二回目の全国中学校校長会議は一九二六年（大正15年）十一月、台北で行われた。大正天皇が重篤な病状のため大半の校長たちは、台湾基隆から帰航するも長七等は、台湾各地を回り、アモイなど中国本土にも足を延ばし、皆に遅れること二十日あまり後の十二月十五日に帰国した。

驚くのは、二度の長期海外出張で、一回目は、一九二一年（大正10年）十一月から翌年の十二月まで一年と一か月あまりの長きにわたった世界一周「欧米各国教育視察」出張旅行。二回目は一九二七年（昭和2年）七月に出発したカナダトロントで行われる「国際教育会議出席」のための出張で、トロントだけが目的地のはずなのに、カナダからアメリカを経由して南米ブラジルを回り、ヨーロッパ、シベリア、朝鮮を経て十二月末に帰国したという六か月間にわたるこれまた世界一周の海外出張であった。新任の校長が、これ程長期間しかも複数回学校を留守にしたのだ。全国の公立中学校校長の中でこのようなことが出来た人物は、大正時代から現在に至るまで伊藤長七ただ一

人だけではなかったか。

〈第一回長期海外出張―欧米各国教育視察〉

一九二二年（大正十一年）十一月十一日、長七は東京府命令による公務出張で一年余に及ぶ欧米各国教育視察旅行に出発した。

長七と関わった著名人の後藤新平、新渡戸稲造、嘉納治五郎、澤柳政太郎、島崎藤村等だけでなく他にも多くの友人が海外渡航していた。その影響を受けていたからか、長七も予てから世界各地に出向いて海外教育事情の実態を知りたいと願っていて、その希望が叶ったのである。

ただ長七は、ここで漫然と海外視察旅行に出たわけではなかった。事前に「世界の子どもたちと文通」の募集を、全国の学校にいる長七の先輩知己の先生たちに依頼して、アメリカ、イギリス、フランス、イタリア、ベルギー、スイス、ドイツ各国の生徒たちへの手紙を、日本中の小、中、高校の生徒から、何と一万数千通も集めたのである。

大正時代の公立中学校長の世界一周の外遊は大変珍しかったのであろう。府立五中「紫友会」の井上角五郎らの評議員や教職員関係者は、長七のために盛大な送別会を開き多額の饞別を送った。また長野師範や諏訪、小諸そして東京高等師範附属中学時代の友人や教え子たちが、長七のもとに駆け付け、この外遊に際して米国や、欧州各国の有力な関係先紹介の労を執った。主だった名前を挙げると第一銀行理事の小平省三、動物学者の石川千代松博士、永田稠しげじ日本力行会会長、商社の野沢組社長たちで、他にも多くの人たちが、長七の海外渡航先の便宜を図ってくれたのである。

後藤新平男爵邸と小川平吉國務院総裁宅には、長七の方から出発の挨拶に向いたが、東京駅には府立五中の生徒たちが見送りに来てくれた。横浜港には、長野師範時代の友人の太田水穂や北澤種一、嘉納治五郎の弟子の苦米地英俊小樽商学校教授、留守中の府立五中の一切を託した橋教頭を初めとして、長七が感動を覚えるほど沢山の人が集まった。そして日本の少年少女の手紙が詰まった三つの柳行李を携えた長七を、船上に皆で見送った。

長七の一年余りの旅程コースを辿ってみる。

(ハワイ)

浄土真宗大谷派の近角常観の紹介を受けて長七は、本願寺別院を訪ねた後、日系ハワイ人子息のための学校、生徒数約五百人の「中央学院」を視察。修身の教科書は澤柳政太郎博士、国語は「紫友会」評議員の芳賀矢一博士の著作が使用されていた。長七は、英語が母語の生徒たちに漢字の書物を用いる大変さを実感した。

ハワイを起航してからアメリカ本土に向かう船上で催されたサンクスギビングデイ(感謝祭)の仮装パーティーに、長七は欧米人に交じって果敢に挑戦してみた。結婚以来伸ばしていた口髭を剃り落として、白塗りの化粧をし、禿げ頭をナイトキャップで隠して婦人物のガウンを羽織った赤ん坊になったのである。残念ながら長七一生一代のこの仮装は、船内人気投票の一位を取ることは出来なかった。

(アメリカ本土)

サンフランシスコに上陸後は、信州の高等小学校や東京の高等師範附属中学校の教え子がカルフォルニアに居住していたため、彼らの案内によりあちこち見学し観光することが出来た。特にスタンフォード大学に行った時は、その大学風景に感動し、「禿げ頭の身ながらまた学生に戻りたい、勉強したい気持ちが大きいが高まった」と長七らしい感想を述べている。また「これからの日本人は、胸を広くして国際的に生きていくことを養い育てていかねばならない」と国際教育の大切さを、府立五中の教職員及び生徒たちに外遊初期の時点で書き送っていることが注目される。

サンフランシスコからロサンゼルスに回り大陸を横断して、ニューヨークへ到着するまでの間に長七は、各地の中学校を訪問視察し、大歓迎を受けながら文通希望の生徒たちに日本の少年少女たちの手紙を配って回った。

嘉納治五郎の愛弟子で駐米日本大使館外交官の杉村陽太郎（新渡戸稲造の後に国際連盟事務次長になり、また嘉納治五郎の次にＩＯＣ委員になった）の世話で、二月四日の「第六回ワシントン国際軍縮会議」を傍聴出来るようになったため急遽ニューヨークからワシントンへ向かった。米国国務長官ヒューズ卿や英国など各国代表演説を傍聴し、感激した長七は、幣原喜重郎駐米大使にヒューズ卿との面会を強く希望した。しかし幣原大使から到底無理だと拒絶されるも、めげない長七は粘り強く懇願し、とうとう面会を勝ち取った。

国務省でヒューズ卿と面会できた長七は、「日本の少年少女の書面四千通を既にアメリカ各地に配って回ってきています。それは日米の青少年間の親善を図りたいとの目的なのです」と話すと、ヒューズ卿は、大変感激し長七を褒め称えた。すると長七は、「ハーディング大統領にも是非表敬したい」と願い出てヒューズ卿は、それを快く引き受けてくれた。翌日の二月十二日、ホワイトハウスで第二十九代米大統領ハーディング氏との面会が叶ったのであった。

ハーディング大統領も長七の日米双方の少年少女間の文通を図る親善行動を大変喜び、長七持参の絵葉書に手書きの文章を書いてくれた。そして辞去しようとする長七を再び着席させ、「日本の教育者は、あの難しい漢字を今後どのように教えていくつもりですか？」などの質問を投げかけ長七は、「日本にはカナがあり、またローマ字でも対処します。」と答えるなど極めて友好的でぎっくばらんな雰囲気の話であった。



交換された手紙



ハーディング大統領

大統領との面会の後、長七は「日本では文部省事務次官に面会するのでさえ容易ではありません。さすがアメリカは違つたものですねえ。この人間と人間の近さはどうですか。今日という今日は、私はアメリカに惚れました」と付き添いの日本大使館書記官に語つた。

長七が帰朝後の朝日新聞「国民外交の卵―少年少女の国際通信」と題された記事によるとワシントンからフィラデルフィア、シカゴ、デトロイト、ピッツバーグ、ボストンへと回り、アメリカ各地の中学校を精力的に訪問し大いなる歓迎を受けました。

中でもフィラデルフィアのセントラルハイスクールでは、二千人の生徒を前に講演し、講演後、同市の教会堂の晩餐会に招かれ、土地の名士百人ほどの前で日米関係についての考えを述べる機会を持てたことは、自分の国際親善の思いを外国人に伝えることが出来て喜びで胸がいっぱいになりました。

そしてアメリカの中学生は外国から来た客をもてなす態度が良くできていて、国際教養もあつて大変感心しました。特にカルフォルニアの学校で、一人の女生徒が、「日本の生徒からの手紙は、



東京朝日新聞

大体英語で書かれていますが、私たちは、返事を英語ではなく日本語で書けるよう、東洋の文明をもっと勉強しなければならぬと思う」と発言してくれたことは、何とも言えないほどの感激でしたなどと長七は語っている。

三月にニューイングランドのプリマスから府立五中の職員、生徒、父兄母姉に宛てて長七は、二十五頁の冊子からなる長文のしかも感動的な手紙を出している。そこにはアメリカに到着してからの詳しい活動報告とアメリカ各地の人々から温かいもてなしを受け、アメリカへの感謝と礼賛を詩的に綴っている。

だが一方で、アメリカ人の民族愛と人類愛の基調が一つでないこともしっかり見抜いていて、盲目的にアメリカを絶賛していたわけではない。手紙の終わりには、横浜埠頭を出発してから早四か月余り、アメリカの歴史から見ると最も新しいカルフォルニアを出発して最も古いメイフラワー号が着いた港プリマスにいますということは、とても象徴的に思えるとの感想と共に三月下旬には、ニューヨークから予約済の船で大西洋を横断して、いよいよヨーロッパに向かうつもりだと書いていた。しかし予約してあった船には乗っておらず、何故かアメリカ滞在は大幅に延長され、アメリカ西部のソルトレイクシティやロッキー方面にまで足を延ばし、ロンドンのテムズ河畔に立ったのは予定よりおよそ一か月遅れの五月になってからであった。

(ヨーロッパ)

イギリスではロンドンからスコットランドのエジンバラまで回り、各地の学校で概ね日本の少女の手紙は歓迎された。だがイギリスの名門パブリックスクールのイートン校とハーロー校では、教頭や主任教師から「生徒に紹介できる適当な時間がなく、第一この学校の生徒は外国の生徒との文通を好みません」と断られてしまった。長七はがっかりしたが例のごとく諦めず、休み時間や放課後にクリケット練習場やテムズ河畔のボート練習場などで生徒を捕まえ話しかけた。それでイートン、ハーロー校の生徒にも少しずつではあったが、手紙を渡すことが出来た。

ドイツに併合されていたオーストリアのウイーンでは、親友島木赤彦が「アララギ」の同門で留学中の斎藤茂吉に長七の世話を頼んでくれていた。茂吉は、長七をウイーンで一番洗練された上品且つハイカラな女学校に案内した。その学校では、手紙を配る長七に女学生たちが、あたかも鯉が魅に飛びつくように殺到し、その明るく無邪気な態度に接して長七は大変喜んだ。その後下校時に、街でその女学生たちに出くわして挨拶したところ、ちょっと会釈しただけで、にこりともしないで歩いて行ってしまった。長七は「ははあ、あゝいう教育をしておるのじゃな、成程いろんな場合を見んけりゃならんな」と言ったというエピソードが、斎藤茂吉の随筆「不断経」に書かれている。



斎藤茂吉

スイスでは、岩波茂雄の紹介で駐在武官の陸軍軍人永田鉄山の世話になった。スイスの生徒たちは礼儀正しく、配られた手紙のお礼として歌を歌ってくれたりして外国人へのもてなしは、素晴らしいものだった。それから長七は、澤柳政太郎や諏訪出身の教育者長田新からの影響を受けて、スイスの教育家ペスタロッチを大変尊敬していたため、わざわざペスタロッチのお墓を訪ねて行き、墓の前で「自分にとって教師が一番有意義な道だ」と改めて確認した。

スイスは長七にとって、理想的なデモクラシーの国でむやみに愛国心を振り回さない国民性だと感じ、得るところの多い国だったようだ。



永田鉄山

フランスのパリでは画家の小山敬三が、予定より大幅に遅れている長七の到着を、首を長くして待っていた。小山敬三は、小諸高等小学校の教え子の小山邦太郎の弟で、敬三がフランス留学を希望した際に、長七が小山家当主を説得して後押ししてくれたこともあり、兄の邦太郎同様、長七には絶大な信頼を寄せていた。敬三が長七の到着を待ちかねていたのは、モントルイ伯爵家出自のマリールイズ嬢との結婚式に長七にも立ち合ってもらって、この国際結婚を郷里小諸の小山家の人々に認めてもらえるよう説得を依頼したかったのである。後に一九二八年（昭和3年）、敬三が妻マリールイズを伴って帰郷した時、長七の働きがあったため、小山家やその周りの人々は、碧眼の夫人を温かく迎え入れ万事問題なく結婚生活を送ることが出来た。

後年、小山敬三は文化勲章を受けるほどの大画伯になった。

フランス、イタリーでは、学校の夏期休暇中に当たってしまい学校参観が難しかったが、それでも長七は何とか幾つかの学校を探して手紙を渡すことが出来、そして喜んでもらった。

こうして旅の終わりには、日本の少年少女の全ての手紙を歴訪各国の生徒たちに無事渡すことができたのであった。その内訳は、アメリカ約七千、イギリス約四千、ドイツ約千五百、フランス約千二百、イタリー約七百、スイス約八百、ベルギー、オランダ合わせて約五百通等であったという。

一年余りに及ぶ長七の世界一周欧米視察出張旅行は、当初の目的を無事に果たして地中海から紅海、インド洋を経て一九二二年（大正11年）十二月、神戸港へ帰着した。

〈第二回長期海外出張―カナダ国際教育会議〉

一九二七年（昭和2年）七月初め長七は、澤柳政太郎等と共に日本代表の一人として、カナダのトロントで開かれた「国際教育会議」に出席するため横浜港を出発した。この国際会議では各国の教育者が集って教育問題を話し合い、世界平和を目指すことが目的であった。各国代表が演説する場で、日本を代表する教育者の澤柳政太郎をはじめとして、長七も自説の教育論を演説した。すると多くの新聞記者に取り囲まれ長七の演説が記事になったので、自分の演説は澤柳博士より上出来だったと自慢する手紙を故郷の近しい友人に書き送っている。

十日間のトロントでの国際会議が終わった後、長七は帰国の途に就かず、単身キングストン町から川船でセントローレンス川を下りポストンを経てニューヨークの港で、船を間違えたと言ってブラジル行きの船に乗った。船を間違えたというのは方便で長七は、周到にブラジル視察の計画を立てていた。この計画を協力推進したのは永田稠であった。以前、長七が永田のために澤柳政太郎、新渡戸稲造、後藤新平、小川平吉、片倉兼太郎、今井五介等十人に余る人々を紹介し、永田の南米におけるブラジル移民のための活動のきっかけを作ってやっていた。その結果永田は日本力行会会長として、三大臣（渡辺千秋、国武、千冬）を生んでいる長野県岡谷の渡辺家からブラジルのアリアンサ（協和の意味）移住地の土地を任されて、子どもたちから



カナダ国際教育会議参加者記念写真 前列中央が長七

「南米おじさん」と呼ばれるほどの活躍をしていた。

永田は長七のトロント国際教育会議出席の件を聞いて、会議後のブラジル行きを強く勧め、旅費の方も片倉兼太郎の会社（片倉製糸紡績）に頼んでニューヨークで受け取るよう手配した。

長七自身も予てから海外教育活動構想を持っており、嘗て親友の太田水穂にブラジルに日本移民のための一大都市を作って私立大学を作りたいとの夢を語っていたことから南米視察は願ってもなかったことだろう。

ブラジルに着いてからは、有吉明ブラジル大使が視察に同行し、サンパウロからアリアンサ移住地、そしてアマゾンから南米ウルグアイの首都モンテヴィデオまで足を延ばしていた。

帰りは航路でイギリスに着き、フランスから陸路でドイツに回り、ソ連のモスクワからは、開通したばかりのシベリア鉄道に乗ってウラジオストクへ行き、南下して京城キョウギョウを経て釜山港から乗船し神戸港に十二月末に帰国した。好奇心溢れ進取の気性を持つ長七らしい世界一周旅行であった。

そして長七が神戸に帰着したその日に、トロントからは別行動をとっていた澤柳政太郎が、外遊中に悪性のしょう紅熱に罹患し死去した。

第六章 長七を慕う人々・長七の親友

伊藤長七という人物は、頭脳明晰であったことは言うまでもないが、類い稀なるネットワーク力が際立っていた。中央公論の元編集長、故粕谷一希氏は、長七を「天衣無縫な親和力の持ち主」と表現されていて、遥か目上の著名な大人物だろうと、目下の名もなき者や子どもたちにも誰にでも、積極的にアプローチして熱血溢れた語りで人々を魅了した。そして面倒見も良くエネルギーに活動した結果が、これほど多くの人たちとの交流になった。それは教育関係の分野だけにどどまらず、政界、財界、文学、芸術、医学など長七を取り巻く交友関係は、歴史に残る著名人だけに限っても百人を遥かに超えるほどである。（長七の多くの書簡が、県立長野歴史館に整理保存されている）

〈小山邦太郎〉

長七を慕う人物には、岩波茂雄をはじめとして小平権一、木村岳風、永田稠、小山敬三など、枚挙に暇がないが一番長七を慕っていたのは、小諸高等小学校の教え子の小山邦太郎ではないだろうか。小山邦太郎は、長七にたった一年間だけしか教えを受けていなかったにもかかわらず、長七への敬愛は強く長く続いた。関東大震災の時、府立五中の建物や長七宅は、それほど被害を受けてい

なかったが、いち早く沢山の食料を持って小諸から駆け付け、長七宅の玄関先で「小山邦太郎、只今伊藤先生をお助けに参りました！」と声をあげて現れたという話が伝わっている。

家業の醸造業や製糸業経営の傍ら長野県議會議員になって政界入りした邦太郎は、長七の親身な助言もあって一九二八年（昭和3年）、国政の衆議院議員選挙に立候補し当選した。その当選の報は、誰よりも早く長七にもたらされたという。

また邦太郎は小諸の長七の教え子たちの集まり「立志同級会」会長でもあったので、長七を度々困らせた生徒、暴れん坊の依田巻人から立志同級会の皆で長七先生の頌徳碑を作ろうと提案され、それを受けて頌徳碑建立のために尽力した。



伊藤寒水碑

長七は当初、自分の頌徳碑などんでもないと固辞していたが、教え子たちの熱意に負けて、「では一切お任せしよう。けれど目立たない簡素なものにしてくれよ」と言って受諾した。

しかし長七の親友太田水穂の助言もあって邦太郎は、やるなら大きく立派な物にしよう、表の題字の「伊藤寒水碑」の揮毫を東郷平八郎元帥邸にまで依田巻人と一緒に頼みに行った。

東郷元帥から「よくわかりました。当代随一の教育者伊藤長七君を慕う諸君の情熱に東郷も胸打たれました。私で良かったら喜んで書きましょう」との快諾を受けて、邦太郎は東郷邸を辞去した瞬間、嬉しさのあまり依田君と二人で抱き合って泣いたと述懐している。

「伊藤寒水碑」の裏面には、「立志同級会」の皆に指名された邦太郎が、斎戒沐浴し錬磨の上に長七の「小諸を去る辞」の一節を書き上げた。

「伊藤寒水碑」は、残念ながら長七の生前には間に合わず、一周忌にあたる一九三二年（昭和6年）四月に小諸市郊外の小諸善光寺に建立された。

〈牛山充〉

もう一人、長七を慕った人物として牛山充が挙げられる。牛山充は、長七より七つ年下で諏訪の長七生家の近所に生まれ、物心のついた頃から長七に憧れていた。高島藩の藩校の流れをくむ「長善館」が、東京の土地を諏訪家から無料で貸与されることを受けて、諏訪地方から上京する青少年のために学生寮を建設した。長七は入寮していなかったにもかかわらず、寮生たちと親交を持ち、よろず相談事に乗っているうちに「長善館」の自治運営にも関わっていき、しまいには副館長になっていた。

牛山充が「長善館」に入寮し苦学の末、晩学ながら東京音楽学校に入学して音楽家として活躍し、後に文化功労章を受章出来たのも、長七の指導と励ましがあつたからだつた。また牛山充の出身地、諏訪下桑原部落が霧ヶ峰の利権を巡って上桑原部落と長年争つていた時も、長七が岩波茂雄や藤原咲平らと和解調停斡旋に入り、実際に解決したのは長七の死後六年も経つてはいたが、牛山は長七への感謝の念を長野の信陽新聞に述べている。

〈島木赤彦と太田水穂〉

長七を慕う人物というよりは、長野師範学校の同級生で最も親しかった友人二人、島木赤彦と太田水穂との関係について述べなくてはならない。

島木赤彦と太田水穂は、同級生の文学や短歌の同好仲間としてお互い切磋琢磨して成長し、歌人として次第に名を成していくのだが、やはりライバル意識も当然あつたのであろう。後年、袂を分かち絶交してしまうのである。

島木赤彦は、信州で教職に就きながら正岡子規から始まつた「アララギ」を伊藤左千夫や斎藤茂吉と共に支えていたが、教職を辞めて上京し「アララギ」の編集、発行の重責を担っていくうちに、歌壇の中で大きな地位を占めるようになっていった。

長七とは、諏訪からの幼馴染でもあつたので特に親密で、時に触れて長七のために歌を詠み長七渡欧時には、



島木赤彦

斎藤茂吉を紹介して便宜を図るなど長く友人関係は続いていた。

一方、太田水穂も長七とは、同級生の中でも特に親しく長七の朝日新聞「現代教育観」連載にあたっての力添えなど、やはり生涯に渡って親密な関係にあった。太田水穂も初めは信濃で教職に就き、上京して日本歯科医専教授の傍ら歌誌「潮音」を創刊した。その後、安倍能成、幸田露伴、小宮豊隆、和辻哲郎などと「芭蕉研究会」

を結成し、松尾芭蕉の文芸を短歌の世界に取り込んだ。このことをアララギ派の斎藤茂吉が、赤彦とともに猛烈に批判し、所謂「病雁論争」となり島木赤彦と太田水穂は永遠に決別してしまったのである。

何か事が起きると、仲裁に入るなどすぐに行動を起こす筈の長七が、何も動いた様子がない。今までのところそのことについての長七の記述は見つからず理由は不明である。二人の親友の間に挟まれてどうにも動くことのできなかつた長七を、アララギ派の人たちは、太田水穂の側に立ったと見たのではないか。一九二六年（大正15年）に島木赤彦が死去した際に長七は、臨終間際の見舞いや葬儀の出席を許されなかった。そして赤彦の死から三か月後、長七は諏訪の幼馴染の家を訪れて、赤彦の死を悼み号泣した。そして自分たちは墓参りも許されないのでと嘆いた。またさらに四か月後、追悼歌「島木赤彦君の霊前に」九首を墓前に詠んで、長七は親友の死を密かに悼んだ。



太田水穂

エピローグ 伊藤長七の晩年

一九二九年（昭和4年）の元旦、皇居前広場で府立五中の新年祝賀式に臨んだ長七は、結核性肺炎の発作を起こし倒れた。病状は深刻だったのにも関わらず、五月には母校長野師範学校での講演などに行き、自宅療養中の病床では、精力的に論文などを書いていった。

そんな矢先の五月下旬に四男晴が急性虫垂炎の手術入院をしたため、妻のふゆは、病院に泊まり込みで介護にあたっていた最中に、昼食で食べた店屋物の食中毒によって急逝してしまった。四十五歳の若さであった。

ふゆは、諏訪高等小学校の教え子で長七の強い勧めによって長野師範学校へ進学し、卒業後は教師となり、三年間の諏訪と東京との新婚別居生活を経て、ひたすら長七に寄り添う二十六年間の結婚生活を送ったのであった。長七との間には、四男三女の子どもを設け（長男と三男は早逝）、海外出張で長期間にわたる夫不在の家庭を、しっかりと守ることができた聡明な女性であった。

ふゆの突然の死は、長七に耐え難いほどの大きなショックを与え、また病を押して葬儀に参列したことも重なって急に病状が悪化し、とうとう東京帝国大学病院の真鍋嘉一郎内科に入院することになった。真鍋嘉一郎は、四国松山中学時代の夏目漱石の教え子で、大正天皇や夏目漱石、浜口雄幸の主治医を務めるほどの高名な教授であった。例にもれず長七は、夏目漱石を通して真鍋嘉一郎

とも既に書簡を交わす間柄で、長七の主治医となったのである。しかし長七は、病室に巻紙を持ち込み、寝たまま一日五十本もの論文を書くなど安静にしておらず、真鍋教授の制止の言葉も届かなかったようで病状はますます悪くなっていった。

やがて東京帝大病院では治療の術がなくなり、転地療養を勧められて湘南平塚の杏雲堂病院に移った。転院しても弱っていく体力の中で長七は「すこやかなる心身へ」の執筆を止めることはなかった。

一九三〇年（昭和5年）四月十九日、伊藤長七は転地療養の甲斐もなく力尽きて、愛する妻の元へ一年も待たずに逝った。享年五十三歳であった。

長七の葬儀は、府立五中の校庭において三千人を超える参列者のもと学校葬として執り行われた。長七が予てより尊敬する真宗大谷派の近角常観が導師となり、牛塚虎次郎東京府知事、井上角五郎紫友会代表、太田水穂、北沢種一、小山邦太郎等多くの人たちが甲辞を述べた。

相次ぐ伊藤長七夫妻の死亡で、まだ慶応大学の医学生だった次男の國男を筆頭に十三歳の三女信子まで二男三女の子供たちが残されてしまったが、五中紫友会が募金活動を行う等、多くの人たちが、遺児たちの今後の生活を支えるべく動いてくれた。伊藤國男は、



胸像落成式

長じて医業の傍ら「医者というもの」を著し、長七の文書、書簡の保存に努めた。現在、長野県立歴史館に多くの文書、書簡が残されているのは、國男の働きに外ならない。

長七が没してから三十五年後の一九六五年（昭和40年）、長七から直接教えを受けていない（校歌「東に高く八ヶ岳」は熱唱していた）諏訪中学の出身者たちが中心となり、長野が生んだ教育界の先駆者、伊藤長七の記念碑を建立しようということになった。

岩本節治諏訪市長、清酒「真澄」の宮坂醸造株式会社社長の宮坂伊兵衛、諏訪医師会会長長寺島清七の三人が発起人代表となり、小諸は小山邦太郎、小川平二の二代表、東京は紫友会代表真田幸男らの協力によって募金活動が行われた結果、諏訪中学出身の彫刻家、清水多嘉示が制作した、長七の胸像と自筆の「創作開拓」の文字のレリーフを巨石にはめ込んだ見事な頌徳碑建立された。場所は、茅野駅と上諏訪駅の間地点を少し登った諏訪湖を眼下に見る高台で、周りをつつじなどで植樹された頌徳公園と名付けられた中にある。

伊藤長七（寒水）は、教育界の風雲児として五十三年間という短い人生を、多くの人と繋がってそして駆け抜けていった。

今日も諏訪湖を眼下に遥かアルプス連峰を望む頌徳公園から、長七は私たちに自由、自治、教養の大切さを訴えかけているような気がする。

文責 川口由紀子（020）



諏訪市伊藤長七頌徳碑

〈参考文献〉

「寒水伊藤長七伝」 矢崎秀彦著 島影社

「夏目漱石全集」 岩波書店

長野県立歴史館所蔵文書

東洋英和女子学院史料室文献

「立志・開拓・創作―五中・小石川高の七十年―」 紫友同窓会

長七をめぐる 100 人

下記のリストは長野歴史館にある書簡や本書に登場する長七に関わった人物 100 人の略歴をまとめたものです。略歴末尾 () 内の数字は長野歴史館データ番号です。
(川口由紀子記)

- あ
あかし てるお
明石 照男 1881 ~ 1956 年、岡山県出身、東京帝大卒、実業家、貴族院議員、第一銀行頭取、渋沢栄一娘婿 (663)
- あかほし てんた
赤星 典太 1868 ~ 1958 年、熊本県出身、帝大法卒、大蔵官僚、1915 長野県知事、信濃木崎夏期大学創設に尽力
- あさだ こまのすけ
麻田 駒之助 1869 ~ 1948 年、京都府出身、中央公論初代社長、滝田禔陰を編集者に迎えて中央公論社の基盤を築いた。高浜虚子に師事し「ホトトギス」同人となる。子は五中 1 回生工芸学者の麻田宏、紫友会評議員
- あべ よししげ
安倍 能成 1883 ~ 1966 年、愛媛県松山出身、哲学者、教育者、東京帝大文卒、京城帝国大学教授、戦後文部大臣、学習院院長、一高同期の岩波茂雄との交流は終生続き岩波の伝記を執筆、漱石の弟子
- あまこ ふじろう
尼子 富士郎 1893 ~ 1972 年、山口県出身、東京帝大医卒、医師、老年医学の先駆者で日本初の老人施設「浴風園」園長、高等師範附中卒、父親の尼子四郎は隣に住む夏目漱石のかかりつけ医師 (521)
- ありよし おきら
有吉 明 1876 ~ 1937 年、京都府出身、東京高商卒、外交官、ブラジル特命全権大使、長七が昭和 2 年トロントの教育会議後、ブラジルへ向かった際に案内する。
- あんどう まさずみ
安藤 正純 1876 ~ 1955 年、東京出身、東京専門学校卒、ジャーナリスト、政治家、衆議院議員、国務大臣、文部大臣、1920 年朝日新聞編集局長、紫友会評議員 (1027)
- い
いいた とういち
飯田 東一 1901 ~ ? 年、東京帝大経済卒、高島屋飯田取締役、高等師範附中教え子 (527 複数有り)
- いしかわ きんいち
石川 欣一 1895 ~ 1959 年、ジャーナリスト、随筆家、東京帝大、プリンストン大卒、毎日新聞社等に勤務、父は動物学者の石川千代松、高等師範附中教え子 (614 複数有り)
- いしもと みしお
石本 巳四雄 1893 ~ 1940 年、地震学者、フランス留学、1928 年東京帝大教授、シリカ傾斜計を考案、高等師範附中教え子 (513 複数有り)
- いじゅういん ごろう
伊集院 五郎 1852 ~ 1921 年、薩摩藩士の子に生まれ海軍元帥、男爵、1908 年東郷平八郎の後の第 5 代連合艦隊司令長官 (170 複数有り)
- いじゅういん しげこ
伊集院 繁子 海軍元帥伊集院五郎の妻、伊集院松治、大野竹二の母 (139 多数有り)

- いじゅういん たけじ
伊集院 竹二
(大野 竹二) 1894～1976年、日本海軍軍人、戦艦「大和」第4代艦長、伊集院五郎次男で母方の大野家の養子に入る、高等師範附中教え子(998、161)
- いじゅういん まつじ
伊集院 松治 1893～1944年、海軍中将、男爵、伊集院五郎長男で妻は日野資秀伯爵次女清子、高等師範附中教え子(400-15 複数有り)
- いとう くにお
伊藤 國男 1906年～1997年、長七の次男、慶応大学医学部卒、長七死後医学生をしながら弟妹の世話をし長七の文献の保存、資料の信州への疎開に努める。練馬総合病院創立、著書「医者という者」
- いとう ふゆ
伊藤 ふゆ 1884～1929年、長野県諏訪出身、長七の妻、長野師範卒後高島尋常小教諭、1903(明治36)年長七(27歳)と結婚、上京後7人の子を育てる。四男晴入院中に急死(176-1)
- いのうえ かくごろう
井上 角五郎 1860～1938年、広島県出身の実業家、北海道炭礦鉄道社長、日本製鋼所設立者、政治家、一時アメリカに移住、紫友会評議員(1089 複数有り)
- いのうえ ともいち
井上 友一 1871～1919年、石川県出身の内務官僚、大正4年東京府知事となる。大正8年帝国ホテルで渋沢栄一らと会食中脳溢血で死去(223)
- いまい ごすけ
今井 五介 1859～1946年、長野県岡谷出身、初代片倉兼太郎の実弟で今井家養子となる、実業家、政治家、信濃鉄道社長、片倉製糸紡績副社長、貴族院議員
- いまい としき
今井 登志喜 1886～1950年、長野県岡谷出身、東京帝大文・史学科卒、東京帝大教授、登呂遺跡を発見(592 複数有り)
- いわなみ しげお
岩波 茂雄 1881～1946年、長野県諏訪出身、東京帝大、出版人、岩波書店創業者、貴族院議員、茂雄の幼い時から長七の晩年まで大変近い関係(158-1 複数有り)
- う うしやま みつる
牛山 充 1884～1963年、長野県諏訪出身、音楽・舞踊評論家、1913年東京音楽学校卒、東京音楽学校講師、1922年より「東京朝日新聞」の音楽と舞踊欄を担当(974 複数有り)
- え えばら そろく
江原 素六 1842～1922年、東京出身、教育者、キリスト教徒、衆議院議員、東洋英和学校校長、1895年麻布学園を設立し初代校長、五中講話者
- お おおた みずほ
太田 水穂
(太田 貞一) 1876～1955年 長野県塩尻出身 教育家、長野師範卒、歌人、国文学者、空穂と親交 和歌革新運動に。「潮音」刊行、長七の葬儀に弔辞を読む。(1368)
- おかむら ちまた
岡村 千馬太 1875～1936年、長野県南安曇郡出身、初等教育家、長野師範卒、同窓に宮沢国穂、伊藤長七等がいる。「東西南北会」設立、登山奨励の先駆者
- おがわ へいきち
小川 平吉 1870～1942年、長野県諏訪出身、政治家、弁護士、鉄道大臣(1071 複数有り)

- おさだ あらた
長田 新 1887～1961年、長野県諏訪出身、教育者、ペスタロッチ教育学の研究、澤柳政太郎の成城学園創立を支援する。広島文理科大学学長時に被爆、「原爆の子」を編集（973）
- か かけい かつひこ
笈 克彦 1872～1961年、長野県諏訪出身、法学者、神道思想家、1897年帝大法卒、ドイツ留学、1903年東京帝大法科教授、五中講話者（403-1 複数有り）
- かたくら かねたろう
片倉 兼太郎 1863～1934年、長野県諏訪出身、初代片倉兼太郎の末弟で二代目を継ぐ、実業家、資本家、片倉製糸紡績会長（1276 複数有り）
- かたやま のぼる
片山 昇 1885年～1964年、教育者、1928年長野師範校長、東京盲学校校長（986 複数有り）
- かとう まさはる
加藤 正治 1871年～1952年、長野県出身の東京帝大教授、中央大学学長、枢密院顧問、信濃通俗学会理事、澤柳政太郎と「日本アルプスの会」結成
- かない きよし
金井 清 1884～1966年、長野県諏訪出身、東京帝大法卒、鉄道省参事官の時、関東大震災復興のために後藤新平が設立した帝都復興院に出向し尽力、後に諏訪市長、小平権一の義兄（1029）
- かのう じごろう
嘉納 治五郎 1860～1938年、兵庫県出身の教育者、柔道家、東京高等師範学校ならびに附属中学校校長、I.O.C 委員、貴族院議員、治五郎が中等教育研究会会長の時、長七は事務局長を担当する。五中講話者
- かわい せいいちろう
川井 清一郎 1894～1930年 長野県松本市出身、教育者。長野師範学校卒、1924年松本女子師範学校附属小の修身科研究授業で国定教科書を使用しなかったことで休職処分（川井訓導事件）の時、長七は意見書を提出した。長田新の勧めで広島高師へ進学、広島女学校に勤務
- かんだ ないぶ
神田 乃武 1857～1923年、東京出身の教育者、1886年帝大教授、男爵、貴族院議員、東京高等商業学校（一橋大）教授、英語教育に力を尽くす。正則学園を設立（999）
- き きたざわ たねいち
北沢 種一 1880～1931年、長野県諏訪出身、長野師範卒、高等師範卒、東京女子高等師範教授、ドイツで労作教育を習得し「作業教育」の先駆者となる。（184）
- きたむら すえはる
北村 季晴 1872～1931年、東京出身、作曲家、作詞家、東京音楽学校卒業、長野師範学校教諭、長野県歌となった「信濃の国」を作曲、その後北村音楽協会を設立し邦楽の採譜に尽力、五中校歌作曲者
- きむら かくふう
木村 岳風
(松木 利次) 1899～1952年、長野県諏訪出身、本名松木利次、長七の言葉が契機となり近代吟詠の祖となる。薩摩琵琶師範としての雅号は木村碓水、五中講話者（1020 複数有り）
- く くりやま つね
栗山 津禰 1892～1964年、山形県上山出身、東洋大学に女性として初めて入学・卒業。長七が初の女性教師として五中に採用し8年間漢文の教壇に立つ。
- こ こうづ たけし
神津 猛 1882～1946年、長野県志賀村（佐久）出身、銀行家、考古学の発展に尽くす。島崎藤村など文化人を支援、藤村の紹介で五中転地修養隊を受け入れる。五中1回生の江上波夫は古墳からの出土品に接して後に考古学を志す。子は五中13回生の神津康夫

こさか	じゅんぞう	1881～1960年、長野市出身の実業家、政治家、信濃毎日社長、衆議院議員、長男は小坂善太郎、三男は徳三郎（信越化学社長）（198 複数有り）
小坂	順造	
こだいら	ごんいち	1884～1976年、長野県諏訪出身、1910年東京帝大農卒、農商務省、農林次官、衆議院議員、子は五中 9 回生の数学者小平邦彦、諏訪市長金井清は妻の兄（1013 複数有り）
小平	権一	
ごとう	しんべい	1857～1929年、岩手県出身、医師、内務省衛生局長、台湾総督府民政長官、満鉄総裁、内務大臣、外務大臣、東京市長、信濃夏期大学に尽力、五中講話者（581 複数有り）
後藤	新平	
こやま	くにたろう	1889～1981年、長野県小諸出身、政治家、衆議院議員、長七小諸小学校時代の教え子、洋画家小山敬三は弟、1940年米内内閣の海軍参与官、1945年鈴木貴太郎内閣の陸軍政務次官（655 複数有り）
小山	邦太郎	
こやま	けいぞう	1897～1987年、長野県小諸出身、洋画家、小山邦太郎の弟、島崎藤村の勧めで渡仏し、パリでの仏女性との国際結婚に伊藤長七が立ち会う。文化勲章受章
小山	敬三	
さ	さいおんじ	1849～1940年、公家、政治家、教育者、公爵、パリ平和会議の歓迎の辞を長七が書いたか（下書きあり）（243）
西園寺	公望	
さいとう	もきち	1882～1953年、歌人、精神科医、「アララギ派」の中心人物、島木赤彦が同人、長七が渡欧した際にウィーンを案内する。文化勲章受章（619）
斎藤	茂吉	
さとう	とらたろう	1866～1943年、長野師範卒業、小諸高等小学校校長、信濃教育会会長、1920年衆議院議員、1924年岩田村中学校校長（101-7）
佐藤	寅太郎	
さわやなぎ	まさたろう	1865～1927年、長野県松本市出身、文部官僚、長七高師入学時の校長、京都帝国大学第五代総長、貴族院議員、成城学園創立者、「現代教育観」の序文を書きトロント国際教育会議に長七と同行（242 複数有り）
澤柳	政太郎	
しまき	あかひこ	1876～1926年、長野県諏訪出身、1898年長野師範卒、長七と同級生、1911年玉川小校長、諏訪郡視学、歌人、「アララギ派」斎藤茂吉と同人（762 複数有り）
島木	赤彦	
しまぎ	とうそん	1872～1943年、長野県木曾出身、詩人、小説家、詩集「若菜集」出版、小諸時代に長七と交流、「破戒」出版時に神津猛の支援を受ける。長七に転地修養隊宿泊地として神津家を紹介（1376）
島崎	藤村	
	（島崎 春樹）	
すぎうら	じゅうごう	1855～1924年、滋賀県出身、国粹主義的教育者、日本中学校校長（岩波茂雄転校時）、政治家、思想家、衆議院議員、東宮御学問御用掛（昭和天皇）（721）
杉浦	重剛	
すぎむら	ようたろう	1884年～1939年、高等師範附中卒、国際連盟事務局次長、IOC委員、イタリア大使、フランス大使、嘉納治五郎の弟子、長七渡米時に便宜を図る（7-1）
杉村	陽太郎	
せんげ	たかとみ	1845～1918年、宗教家、政治家、司法大臣等歴任、東京府知事、貴族院議員、男爵、出雲大社宮司（1169 複数有り）
千家	尊福	

- た たかしま べいほう 1875～1949年、新潟県出身、社会教育家、仏教学者、哲学館（後の東洋大学）
高島 米峰 卒、東洋大学 12 代学長、紫友会評議員
- たちばな じゅんいち 1884年～1954年、五中初代教頭、長七海外視察時に校長代行を務める。
橘 純一 (694 複数有り)
- ち ちかすみ じょうかん 1870年～1941年、滋賀県出身、真宗大谷派僧侶、本郷に求道会館設立、
近角 常観 長七の五中校葬の導師（1134 複数有り）
- ちの ぎたろう 1883～1946年、長野県諏訪出身、東京帝大独文科卒、慶応義塾大学教授、
茅野 儀太郎 ドイツ文学者、詩人「明星」同人（1172）
(蕭々 しょうしょう)
- つ つるみ ゆうすけ 1885～1973年、東京帝大卒、鉄道省、政治家、衆議院議員、一高時代夏目
鶴見 祐輔 漱石に薫陶をうけ、東大在学中に新渡戸稲造に師事、後藤新平の娘婿、
五中講話者（107 複数有り）
- と とまべち ひでとし 1884～1907年、国際法学者、オックスフォード大学、ハーバード大留学、
苫米地 英俊 小樽商高教授、衆議院議員、嘉納治五郎の直弟子でロシアに柔道を広める。
(633 複数有り)
- とも の ぶんたろう 1869～1934年 佐久市出身の教育家 長野師範卒、小諸小訓導、長七は
伴野 文太郎 伴野に招かれ小諸小で1年間教職に就く、佐久地方の各地で校長を歴任
- な ながい りゅうたろう 1881～1944年、石川県出身、早稲田卒、オックスフォード大卒、政治家、
永井 柳太郎 民政党幹事長、拓務大臣、逓信大臣（391 複数有り）
- ながた しげじ 1881～1973年、長野県諏訪出身、早大卒、移民事業家、日本力行会第2代会長、
永田 稠 1922年信濃海外協会設立に参画、ブラジルのアリアンサ信濃村の建設に尽力、
長七ブラジル訪問時の支援者（875 複数有り）
- ながた てつぜん 1884～1935年、長野県諏訪出身、陸軍軍人、岩波茂雄と交友があり藤原咲
永田 鉄山 平と同級、陸軍内部の抗争で殺害される、五中講話者
- ながた ひでじろう 1876年～1943年、兵庫県出身の官僚、政治家、内務官僚後第8代と14代
永田 秀次郎 東京市長、第4代拓殖大学学長、貴族院議員、五中講話者
- ながた りょういち 1911～1997年、兵庫県出身、政治家、王子製紙を経て衆議院議員、東京市
永田 亮一 長永田秀次郎長男（507）
- なつめ そうせき 1867～1916年、東京出身、東京帝大英文卒、東京高等師範学校、第一高等学校、
夏目 漱石 帝大講師などを経て1907年（明治40年）朝日新聞入社、「現代教育観」掲載
時の文芸欄担当、長野講演を長七が依頼
- に にとべ いなぞう 1862～1933年、岩手県出身、札幌農学校2期生、教育者、思想家、国際連
新渡戸 稲造 盟事務次長、東京女子大学初代学長、信濃通俗大学学会、信濃夏期大学の
創設に尽力（965）
- は ハーディング 1865年～1923年、29代米大統領。長七が渡米中にワシントン軍縮会議後、
(Warren Harding) ホワイトハウスで面会

	ほとやま ひでお 鳩山 秀夫	1884~1946年、1908年東京帝大法卒、法学者、東京帝大教授、鳩山一郎の弟、高等師範附中卒（1244）
ひ	ひぐち ながえ 樋口 長衛	長野県出身の教育者、斎藤茂吉と開成学園で岩波茂雄と東京帝国大学で同級生だった。妻の樋口志保子は島木赤彦門下の「アララギ派」歌人（599）
	ひだい てんらい 比田井 天来	1872~1939年、長野県佐久出身、本名鴻、「現代書道の父」と呼ばれる。東京高等師範学校習字科講師（539複数有り）
	ひらばやし ひろんど 平林 広人	1886~1986年、長野県東筑摩郡出身、東筑摩郡陸郷北小校長、「夏期大学建設の激」を信濃教育に出し、1917年木崎夏期大学開設に尽力、アンデルセンの研究など児童文学翻訳家（289）
ふ	ふじかわ ゆう 富士川 游	1865~1940年、広島県出身、医者、医学史家、広島医学校卒、広島医学会設立、東洋大学教授、鎌倉中学校設立、日本医史学会設立、尼子富士郎の父親四郎と広島医学校で同級（404）
	ふじもり りょうぞう 藤森 良蔵	1882~1946年、長野県出身の教育者、長野師範を退学させられ東京物理学校に学ぶ、受験参考書を著し高等数学の大衆化を目指して講習会「日土大学」を開催、五中講話者
	ふじわら ぎんじろう 藤原 銀次郎	1869~1960年、長野県出身、実業家、政治家、貴族院議員、王子製紙社長「製紙王」の異名あり。藤原工科大学（後の慶応大工学部）設立（185）
	ふじわら さくへい 藤原 咲平	1884~1950年、長野県諏訪出身、1909年東京帝大卒、気象学者、中央気象台長、甥に新田次郎（小説家）、その妻藤原てい、その息子藤原正彦（996）
	ブラックモア (Isabella Blackmore)	1863~1942年、カナダ出身、メソジスト教会婦人伝道会、1890年東洋英和女学校校長、のち東京女子大学理事長、1925年カナダに帰国
ま	まさき なおたろう 正木 直太郎	1856~1934年、長野県上田出身、教育者、長野師範学校校長、信濃教育会長。教科書裁判に連座し休職となるも後に無罪（長七証人に立つ）
	まなべ かいちろう 真鍋 嘉一郎	1878~1941年、愛媛県出身、医師、1904年東京帝大医科卒、東京帝大教授、中学の恩師が夏目漱石。大正天皇、夏目漱石、浜口雄幸、長七の主治医（77）
み	みずの れんたろう 水野 鍊太郎	1868~1949年、江戸（秋田藩）出身、東京帝大法卒、内務官僚、政治家、貴族院議員、優待事件で文部大臣辞任（535）
	みむら やすじ 三村 安治	1870~1932年、長野県出身 初等中等教育家 長野師範卒、諏訪、長野で小学校長として初等教育に新機軸を開き、大町中学校長、諏訪高等女学校長を歴任（671 複数あり）
	みやけ かほ 三宅 花圃	1869~1943年、小説家、歌人、三宅雪嶺の妻、五中講話者
	みやざわ くには 宮澤 国穂 (中村 国穂)	1876~1920年、長野県上伊那郡出身、初等教育家、海外移住功労者、長野師範卒、高島小で長七、守屋と改革に着手。県学務課で「海外発展指針」を刊行、信濃海外協会で啓蒙活動に従事
	みわ さんきち 三輪 三吉	1860~1918年 長野県諏訪出身、教育者、松本師範中退、教員免許を取得、諏訪実科中学創設に参加、1992年高島小校長、諏訪中教諭、諏訪教育会の重鎮。息子は三輪知雄（東京教育大学学長、初代筑波大学学長）（262）

- む むらおか はなこ
村岡 花子 1893年～1968年、甲府市出身、東洋英和女学校在学中8歳年上の白蓮と寄宿舎生活を共に友情を育む。翻訳家、児童文学者
- も もりや きしち
守屋 喜七 1872～1945年、長野県上伊那郡出身、教育家 長野師範卒、長七と高島小で教育改革運動に参加、信濃哲学学会創設、信濃教育会の運営に尽力(698複数有り)
- もろい かんいち
諸井 貫一 1896～1968年、実業家、1921年東京帝大経済卒、秩父セメント、秩父鉄道社長、埼玉銀行会長、高等師範附小・附中(22回)卒(615)
- もろはし てつじ
諸橋 轍次 1883～1982年、新潟県出身、漢学研究、『大漢和辞典』編者、東京高等師範卒、都留文科大学初代学長、長七が欧米視察時に自分の目指す仕事について示唆する手紙をパリから諸橋宛に出す。(395)
- や やざわ げんげつ
矢澤 弦月 1886～1952年、長野県上諏訪出身、本名貞則、1911年東京美術学校卒、日本画家、五中で3年間図学を教える。(388複数有り)
- やじま おとし
矢島 音次 1877～1958年、長野県諏訪出身、教育家 長野師範卒 高師卒 高文試験合格、朝鮮総督府、『信濃教育』の編集主任。戦後は仙台へ。
- やすい てつ
安井 てつ 1870～1945年、東京出身、女子教育者、東京女子高等師範卒、1896年英国留学、1923年第2代東京女子大学長、東洋英和女学校理事、五中講話者
- やすだ ぜんざぶろう
安田 善三郎 1870～1930年、愛媛県出身の実業家、貴族院議員、安田財閥の総帥善次郎の婿養子となるも、1919年安田家より離縁される。子は五中1回生彫刻家の安田周三郎、紫友会評議員
- やなぎた くにお
柳田 國男 1875～1962年、兵庫県出身、民俗学者、1900年東京帝大法卒、農商務省、1914年貴族院書記官長、1920年朝日新聞客員(1236)
- やなぎわら びやくれん
柳原 白蓮
(宮崎 燐子)
みやざき あきこ 1885～1967年、東洋英和女学校卒、歌人、福岡の炭坑王と結婚、白蓮事件後離婚し宮崎竜介と結婚、娘は落萇、孫は小石川017回生の宮崎黄石
- よしおか やよい
吉岡 彌生 1871～1959年、教育者、医師、東京女子医学専門学校(東京女子医大)創立者、五中講話者(1240)
- よしの さくぞう
吉野 作造 1878～1933年、宮城県出身、政治学者、思想家、東京帝大教授、大正デモクラシー運動の理論的指導者、木崎夏期大学講師
- わかばやし ふひと
若林 不比等 1896～1961?年、徳島県出身の宗教活動家、明治大学卒、皇道同志会・日本日蓮主義青年団創立、1923年川上初枝と結婚し満州へ渡り特殊工作員となり後に処刑されたか?(410)
- わたなべ ちあき
渡辺 千秋 1843～1921年、長野県諏訪出身、官僚、政治家、伯爵、長善館館長、国武は実弟、千冬は千秋の子
- わたなべ ちふゆ
渡辺 千冬 1876～1940年、長野県松本出身、政治家、実業家、叔父で子爵の渡辺国武の養子で実父渡辺千秋の三男、長善館館長

第
一
部

「我らは長七の教え子だった」
パネル集

「我らは長七の教え子だった」 パネル集



2003年に開催された創立85周年記念同窓会は、伊藤長七初代校長にスポットが当てられた場でもありました。

長七がことあるごとに語った言葉から記念CDが生まれ、それを更に深めようと「目で見る『我らは伊藤長七の教え子だった』」が企画され14枚のパネルにまとめられました。

目次

パネル1	プロローグ・・・・・・・・・・・・・・・・	85
	(伊藤長七展への誘い)	
パネル2	伊藤長七略年譜・・・・・・・・・・	86
パネル3	展示展資料等について・・・・・・・・	87
パネル4	府立五中初代校長に大抜擢 ・・・・・・・・・・・・・・・・	88
	(中学教諭から中学校長へ)	
パネル5	五中の創立・・・・・・・・・・・・・・・・	89
	(五中設立時の想い出の写真等)	
パネル6	五中の理念・立志・開拓・創作 ・・・・・・・・・・・・・・・・	90
パネル7	五中は最初から変わっていたんだ (1)・・・・・・・・	91
	(真田幸雄先生の語る五中)	

パネル 8 五中は最初から変わっていたんだ (2) 92

(女性教師に鯉あげ)

パネル 9 国際人たれ 93

少年少女の手紙を持って世界へ

パネル 10 伊藤長七、世界を駆ける 94

世界地図上の2度の世界旅行の足跡

パネル 11 国際平和を「ワシントン軍縮会議」 96

ハーディング米大統領とも面会

パネル 12 伊藤長七没す。されど 97

伊藤長七の顕彰

パネル 13 没してもなお語りかける長七の言葉 98

伊藤長七の残した言葉

パネル 14 エピローグ 99

私たちからの伊藤長七への呼びかけ

補 足 (2004年に発行した冊子に掲載した補足事項) 100

伊藤長七展と女性教師

「目で見ると 我らは伊藤長七の教え子だった」

85周年記念事業実行委員会

あなたは、家族や仲間に母校を語るとき、どんなときに誇りを感じますか。

過去に、東大入学者数が日本一だったことでしょうか。いえいえ、こんなエピソードを語るときではないでしょうか。

お父さんの学校で昔、こんなことがあったんだ。期末試験が始まる日の朝、新任の担任教師が自分のクラスの生徒を殴ったんだ。クラスは一致して抗議し、試験もボイコットしたんだ。それでどうなったんだと思う。学校は生徒をいっさいとがめることなく、殴った教師を免職。その時の説明は、「もうこの学校には生徒を殴る教師はいません」。担任を辞めさせてしまったんだから、このクラスは担任無しのまま。これ、いつ頃の話だと思う。太平洋戦争真只中の昭和18年。殴って教える軍隊式の教育が当たり前前の時代の話なんだ。

あなたの年次にも、こうした、私たちが一個の人間として扱われていると感じさせるエピソードはありませんでしたか。

そして、最も多感な青春期を、芯のある校風の中で、仲間と成長したことの喜びを語るとき、「誇り」を感じるのではないのでしょうか。

私たち、85周年記念事業実行委員会は、今回の同窓会のテーマを「私の五中・小石川さがし」としました。何度も語り合い、たどりついたのが、この『校風』と、伊藤長七初代校長でした。私たちは、伊藤長七にスポットをあて、次の三つの事業を行うこととしました。

1. 伊藤長七の残した精神を、諸分野で発揮する卒業生を顕彰する
「小石川賞」
2. 伊藤長七が残した多くの資料を展示する
「目で見ると 我らは伊藤長七の教え子だった」
3. 伊藤長七が残した種々の文章を再構成した朗読CD
「我らは伊藤長七の教え子だった」

本企画、「目で見ると 我らは伊藤長七の教え子だった」を通して、伊藤長七初代校長が住ぎ込んだ情熱。そして生み出された校風を守り、伝えた諸代校長、教師、卒業生、そして生徒たちのすばらしさを感じていただければ、これに勝る喜びはありません。

立志開拓創作

伊藤長七略年譜

和暦	西暦	年齢	略歴
明治 10年	1877	1	生誕 父孫右衛門・母りかの三男 長野県諏訪郡西賀村曹門寺
19年	1886	10	上桑原学校初等科卒業 同中等科(旧制)入学
23年	1890	14	西賀村立西賀尋常小学校高等科卒業 育英会第二回生
31年	1898	22	長野県師範学校卒業 諏訪高等小学校訓導(四年女子担当)
32年	1899	23	下諏訪小学校に転任
33年	1900	24	小諸高等小学校に転任
34年	1901	25	高等師範学校予科入学 「小諸を去る辞」
36年	1903	27	諏訪中学校校歌「東に高き八ヶ岳」作詞
38年	1905	29	東京高等師範学校卒業 同校研究科入学
44年	1911	35	東京高等師範学校付属中学校教諭
45年	1912	36	『現代教育観』朝日新聞に連載、単行本として出版
大正 7年	1918	42	後藤新平総理の経井沢夏期大学創立に尽力
8年	1919	43	東京府立第五中学校校長 小石川黒龍町校舎で開校 三校是 「立志、開拓、創作」 校章で輝上げ 五中校歌作成
9年	1920	44	『開拓』第1号発行 集友会創設
10年	1921	45	全国中学校長会議(開催地：奉天) 第1回創作展開催 学外著名人3000人参加 欧米各国視察(大正10年11月～11年12月) ワシントン公会堂傍聴 ハーディング大統領に面会
13年	1924	48	第一回卒業生134名
昭和 元年	1926	50	台湾・南支那公務視察
2年	1927	51	国際教育会議(開催地：トロント)出席 ブラジル視察
4年	1929	53	肺炎で入院 夫人急逝
5年	1930	54	平塚市古蓮堂病院にて逝去 学校葬舉行
6年	1931		伊藤長七先生胸像を校内に建設 伊藤寒水碑建立(小諸市郊外善光寺)
40年	1965		伊藤長七顕徳公園建設(諏訪市)



長七16歳



長七26歳頃



朝礼中の長七



外遊先の長七

立志開拓創作



「目で見る 我らは伊藤長七の教え子だった」は、伊藤家からの資料の他、多くの方々のご協力で実現できました。

ご協力者または参考にさせていただいた資料の一部を紹介することで、感謝にかえさせていただきます。

展示資料

伊藤家 多数の資料の提供をいただきました。本資料は伊藤國男夫妻が戦禍を超えて守ったものです。

参考資料

- 「寒水 伊藤長七伝」矢崎秀彦（鳥影社）／「世界と地域を見つめた長野県教育」（長野県立歴史館）／「半世紀」小石川高校創立50年記念誌（紫友会）／「立志・開拓・創作—五中・小石川高の七十年—」（都立小石川高等学校）／「小石川高校新聞縮刷版1」（都立小石川高等学校生徒自治会）／「図説教育人物事典」唐澤富太郎編著（ぎょうせい）他

立志開拓創作

伊藤長七、府立五中初代校長に大抜擢

1912年（明治45年）、歌人**太田水穂**（1876 - 1955）は、東京朝日新聞が教育問題について評論を求めていることを知り、**長野師範学校の同級生で生涯の親友の東京師範学校附属中学校の英語教諭だった伊藤長七**に執筆を勧める。長七は黒風白雨楼のペンネームで「現代教育観」を48回にわたり寄稿。教育界の現状を憂い、教育界の刷新をうたえる教育論は、各界で話題を呼び、長七の名を知らしめたのです。



伊藤長七が教育界のみならず広く知られるきっかけとなった東京朝日新聞に寄稿された「現代教育観」連載（全48回）最初と最後の掲載紙（明治45年）



左端：太田水穂 右端：伊藤長七

1918年（大正7年）、ときの東京府知事**井上友一**（1871 - 1919）は、東京府立中学が一中から四中までで、その後約二十年途絶えていた府立中学の開校を決定し、長七をその校長に大抜擢したのでした。

井上友一は1915年（大正4年）に東京府知事に任命されるが、在職中の五中が生まれた大正8年に病死している。この時の長七の弔辞が、五中の雑誌「開拓」一号に残っている。



新設府立五中の校長に伊藤長七が内定したことを伝える東京朝日新聞（大正7年）



五中校長就任を報告する挨拶（大正8年1月）



長七を五中の校長に大抜擢した井上友一東京府知事

立志開拓創作

五中の創立

校舎は現在の地蔵籠町、元は東京東鴨病院の跡地。長七いわく「ゴミ溜、どぶ水の池 八重むぐら繁れる中に 未結れの秋の野の八千草 それが私の身の丈をかくす位に生えて居る所に 新たに運ばれた材木が五六本横たへられてあつた。『開拓をせねばならぬ』といふ心の声が其時から私を刺激した様に存じます」とその気持ちをあらわしている。



講堂新設なる



創立記念写真
開校時の教職員



開校記念絵葉書
左下に長七のサイン

立志 開拓 創作

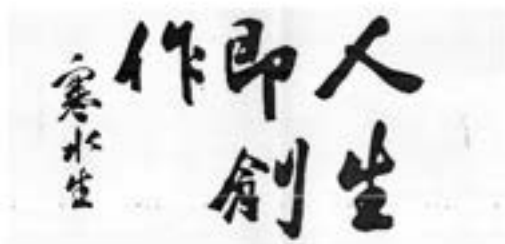
五中の理念—立志・開拓・創作

五中初代校長となった長七は、生徒を集め演説すること好みました。そして、その演説や手紙の多くは小冊子としてまとめられ、今も見ることができます。

新入生を迎えての第一声も、第二回の入学式のものが入り紙として残っています。その中で「立志とは・・・」、「開拓とは・・・」、「創作とは・・・」と、立志・開拓・創作の三つの理念が語られています。これは創立二年目からのことではなく、創立直後から、生徒に、ことあるごとに語られたものだったのです。



長七の「人生即創作」の書



長七の「立志・開拓・創作」の書



入学式に話したことを小冊子にしたもの。右より小冊子表紙、三校章の部分抜粋、**立志・創作・開拓**について語る。また、「よく遊び、よく遊ぶ、よく学ぶ」ように説いています。長七の多くのメモが入っており、最後まで原稿に手を入れていたのがわかる。

立志開拓創作

五中は最初から変わっていたんだ(1)

長七から数えて六代目の校長となった真田幸男先生（第三回卒業生）は、この創立間もない五中について、次のような思い出を語っています。



真田元校長

『何もかもが豪勢な時代だった。大正八年といえば、第一次大戦の後の自由主義の波が日本全体を洗っていた時代。物資も豊か、人の心ものびのびしている。そういう世の中に、ぼっかり、新しい府立中学が生まれ出たのだ。四中までで、あとが途絶えていた東京に、新しい中学ができる。それだけでも何かしら新鮮なものを感じて、人々はこの新しい学校に期待した。そこへ伊藤長七という一大のロマンティストが、校長さんとして任命されたのである。世間の「人気」が、わっとこの学校に集まったのも無理はない。

折り襟、ネクタイのしゃれた制服。入学試験のメンタルテスト——いわゆる知能検査は今度の戦争後の輸入品ではないのだ——、夏休みの転地修養隊——上野を発つ夜汽車の窓に新聞社の写真班のフラッシュ。信州の山奥まで新聞記者がワンサカ記事を取りに押しかけてきたものだ。



標準服の折り襟（背広とは言わない）。ネクタイは結ばずボタンで留める。襟ネクタイの先生もきまっています。



大正8年7月22日。上野から佐久へ向かう五中の生徒と伊藤長七。五中創立年で一年生のみ。

この写真は、大正期の中学校の活動を紹介する時しばしば用いられる。例えば朝日新聞刊「20世紀クロニクル」のキャプション。

「要は信州の佐久高原を自然の大教場とするにある」と伊藤校長。課外活動や修学旅行が活発化していくのも大正期の中学校の特徴だった。



転地修養隊大正9年。法禅寺の庭



転地修養隊(今の臨海林高等学校)の通知

当時この試みは新聞をにぎわせたと言われている。



新龜体操

立志開拓創作

五中は最初から変わっていたんだ(2)

真田元校長の話はつづく

創作展覧会——デカデカの見出して書かれた各社の記事を僕は思い出す——等々。何もかも型破りで、世人の耳目を聳動した。

理科教育の斬新方法も、当時の国の要望に応じて喝采を浴びた。こうして、生まれたての学校が一挙に東京中の秀才を吸収してしまったのである。」
(1949年〈昭和24年〉)



五中が変わっているのはこれだけではありません。まずは女性教師陣。**栗山津禰先生**(漢文。大正11年から昭和5年)、**ミス・ジュネビーブ・コールフィールド**(英語会話。大正12年から昭和12年)、**物井ハナ先生**(英語。大正15年から昭和4年)の三人の女性教員が授業にあたったのです。栗山先生は高等中学校初の女性教師。もちろん男性教師陣も多士済々。

ミス・コールフィールド(イギリス人)の英語会話の授業や校長の年取に近いレコード教材も使用したというように、外国語教育への熱の入れようも五中の特徴。



物井ハナ先生



栗山津禰先生



昭和2年2月5日 教育週報

創立した年から昭和13年まで続いた五中の誇るイベント、「**鯉あげ**」も変わっています。

五月五日の端午の節句に、生徒が紙で作った鯉に、水素ガスを詰めたゴム風船を入れ、長七は、「アメリカまで飛んでいけ」と唱えて飛ばしたのです。鯉のぼりはゆっくり、空の彼方に消えていく雄大な行事です。

鯉のぼりが埼玉に落ちたと連絡を受けると、長七は生徒に向かって、「諸君。この鯉のぼりは、アメリカから再び埼玉に帰ってきた」と話したとのこと。



立志開拓創作

国際人たれ

伊藤長七は、生徒に真の国際的教養の必要性を説き、外国語の習得に心を砕きました。

そして、長七自身、数多くの海外渡航を実行したのでした。

五中創立からまだ三年しかたっていない1921年（大正10年）には満州、朝鮮へ。また同年暮れから一年もの間、日本から少年少女の手紙一万数千通を携え、訪れた各地でそれを配ったアメリカ、ヨーロッパ周遊。この時には、長七はホワイトハウスを訪ね、ハーディング大統領と面談しております。

それから五年後の1926年（大正15年）には台湾。さらに翌年の1927年（昭和2年）にはカナダのトロントで開かれた世界教育会議に出席しています。その帰途には、「船を間違えた」と称して、南米に渡り、さらにヨーロッパを回り、シベリアを経て、朝鮮より帰国しているのです。



国民外交—少年少女の国際通信 第1回世界周遊

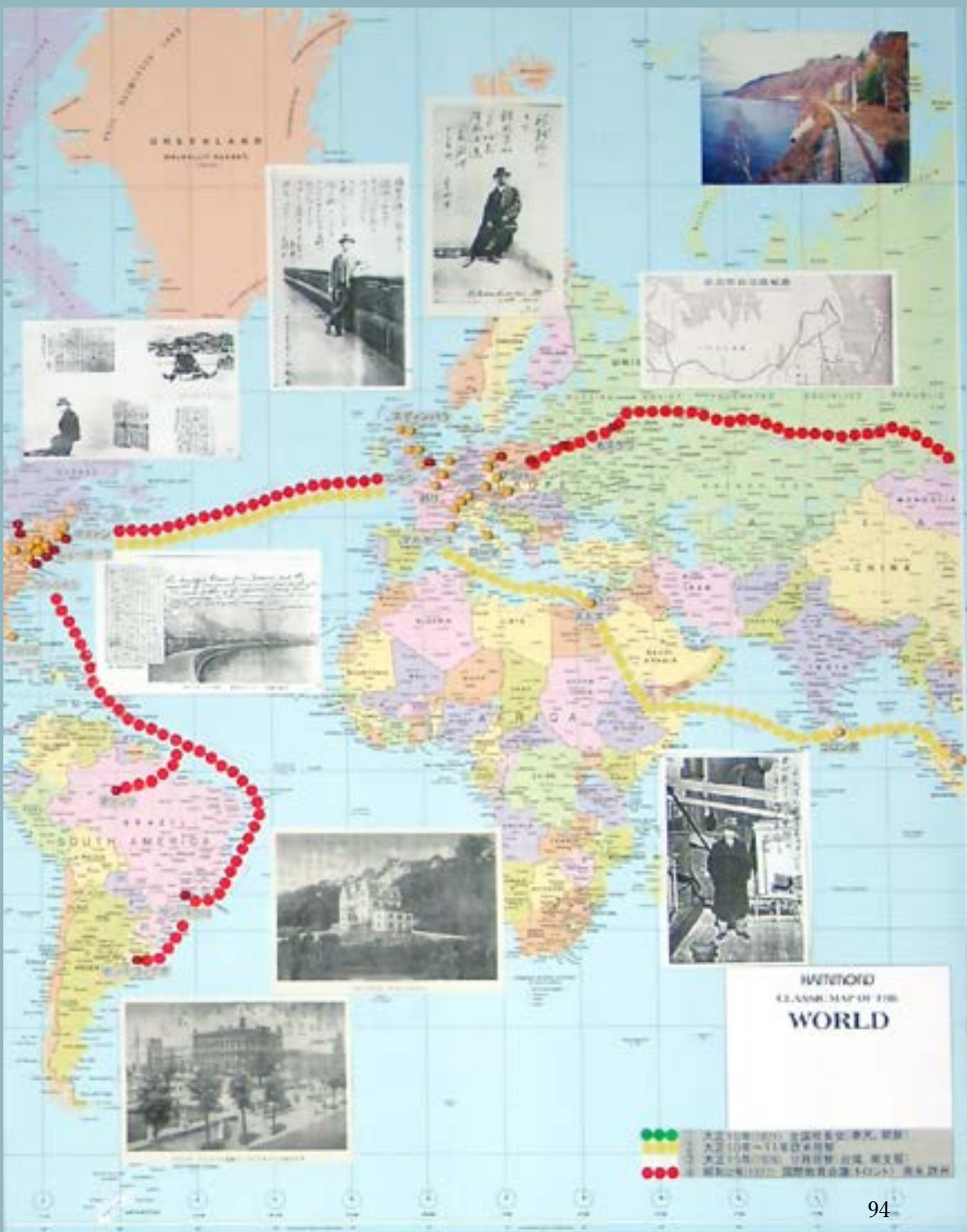
東京府より、1921年（大正10年）10月より1年余におよぶ欧米教育視察を命じられた長七にひとつのアイデアがひらめいた。日本の少年少女の手紙を集め、訪問先の各地の学校の生徒にこれを配り、交流を図ろうというアイデアである。

長七自身多くても数百と考えていた手紙であるが、集まったのは1万数千通。多くは中学生、高等女学校の生徒からの手紙で、ほとんどが英語で書かれていた。

長七は行李に、日本の子どもたちの手紙1万数千通を詰め、サンフランシスコへと船出したのです。



帰国後、これを訪問先の各地で配り、国際交流の一助としたことを、東京朝日新聞に「国民外交の卵—少年少女の国際通信」として寄稿している。（大正12年1月5日より7回連載）





立志開拓創作

国際平和をーワシントン軍縮会議ー 第1回世界周遊

また長七は、この旅の途中、アメリカ東部に滞在中にワシントン会議の公開会議の開催を知ると早速、ワシントンに向かい、1922年（大正11年）2月4日の公開会議を傍聴。ワシントン会議の中核をなす海軍軍縮条約は公開会議の翌々日の2月6日に締結され、海軍主力艦の保有比は、英：米：日：仏：伊がそれぞれ5：5：3：1.6：1.6と決められた。ワシントン会議終了直後の2月11日に会議の進行役のヒュース國務大臣と、翌12日にハーディング大統領と面会が実現した。大統領から「両国間の和親、永久に変ざらんことを」の一言をもらう。



ハーディング大統領

この時、長七は、ワシントン会議の精神を受け入れ、軍事大国ではなく、文化大国への脱皮を五中生に呼びかける手紙を送っています。

五中生への手紙（小冊子）

五中生への手紙（小冊子）



ヒュース國務大臣



ワシントン会議風景

ー世界教育会議ー 第2回世界周遊

1927年（昭和2年）。この年カナダのトロントで開かれた世界教育会議に参加した長七は、その帰り南米ブラジルの地を訪れる。これは、五中の運営が順調になった後、ブラジルで日本人学校を開校したいという大きな夢があったため。ブラジル駐在大使の案内で各地を周り、詳しい事情を得たとのこと。

長七は、五中生に海外に目を向けさせ、海外に飛躍できる力をつけよと教えたとおり、自分も海外への飛躍を計画していたのでした。



立志開拓創作

長七没す。されど・・・

五中創設という一大事業を成し遂げつつあり、更に海外に新たなる学校を建設しようという次なる自らの夢を追い求める長七に、病魔が襲い、1929年（昭和4年）6月末肺炎（実は結核）で入院。翌年の4月19日に療養のための転院先の平塚の吉雲病院で没す。享年54歳。五中は**学校葬**で長七を送り、翌年**胸像**を作る。

長七の小諸での教師時代は1年と短いものの、その後も「立志同級会」を作り長七を師としていた小諸小学校時代の教え子たちは、一風忌の1931年（昭和6年）に、東郷平八郎の揮毫の**伊藤寒水碑**を小諸市郊外の小諸善光寺境内に建立した。

戦後、1965年（昭和40年）には、諏訪市長、長七が校歌を作詞した諏訪中学の出身者を発起人とし、長七生誕の地の諏訪市四賀に**伊藤長七顕徳公園**が建設された。公園内には、諏訪中学の出身の彫刻家、清水多嘉示氏による長七の胸像と「創作開拓」のレリーフを巨石にはめ込んだ顕徳碑が置かれている。



建立時の伊藤寒水碑



現在の伊藤寒水碑



諏訪市、伊藤長七顕徳碑



胸像落成式



立志開拓創作

没してもなお語りかける長七の言葉

あなたに、74年前、病床で書きつづった長七の言葉に耳を傾けてほしい。
この情熱と信念と平和への希求を。

日本の国民として、昭和の世界に生きんとする若き男女には、どうしても系統的に、またきめ細やかな国際的教養を備えねばなりません。一口に国際的教養と申しますと、洋食の食べ方を器用に、外国語を手際よく口にし、気の利いたハイカラ振りに身支度するというような、その種の馴れをすることのように思いこむ人々が少なくないと思いますが、これは大間違いであります。洋食の食べ方も、身支度も、外国語の運用も、むしろ第二、第三のものであり、国際教養上、第一に重要視すべきは



純真なる人類愛の心

正義、人道に終始せんとする信念

に生きんとする心の姿を育てることです。

国と国と相対立して、軍事のみならず、学問、産業、各方面に競争のしのぎをけずりおるのが、私どもの眼前に見る世界の事実であります。けれど、それとあべこべに、国際連盟の内容が、年々醇化せられ、国際協調の各種の催しが創設せられ、国際善意デーなどのやさしい仕事が、至る所に美しく舉行せられ、やがて不戦条約が列強の間に調印される気運も生まれ出た、という現実を見逃すわけには参りません。すなわち、今より後に戦争は断じて無し、などとは何人も断言しえざるごとく、世界列強、各民族の間に、平和運動、人類愛の現れが、年々その新たな姿を見せていると言うこと、これまた何人も否定できぬところあります。

私たちは、初等教育から中等教育の時代において、若き男女を、正しく、国際的に教養し、彼らの先輩たる日本国民が招きし不面目と失敗とを、彼らには繰り返さしめたくないものであります。むやみに日本ばかりよい国であるなどと教えぬように。また、わざと日本の気候風土が世界に冠たりというような独断を言わぬよう。特に、海を隔てて相隣りせる、アメリカ、中国、ロシアなどを、頭から台無しに悪く言うような、失態なからんことを切望します。

我が産業の行き詰まりを救う道も、人口問題の解決も、我が国民の心の鏡に、今や投げかけられたる暗影をはらう道も、上述のごとく、若き人々を国際的に仕立てると言うことが、その主眼の一つであると、私は中心より考えております。
(1929年(昭和4年))



以上の文章は昭和4年12月3日に配布された「すこやかなる心身へ」(長七最後の小冊子)よりの引用。この年元旦に発病し、6月入院、翌年4月に死去している。

立志開拓創作

長七に聞いてほしい私たちの言葉—長七の精神は今も

昭和4年。（伊藤長七校長の時代） 「ある少年—心理学者の自伝的回想」 乾 孝（思想の科学社）
年に一回、上から現役校長が「査問」にやってくる。全校生徒を正方形に集め、真ん中の壇の上に乗って生徒に試問した。「何年何組何某。軍備はなぜ大切か」。署名された生徒は「軍備はいりません」。怒った校長は「何組の何番の誰。我が国連年の精神は何か」。「世界の平和であります」。
校長は窮地に立たされるが、生徒にはその後も何一つ注意しなかった。

昭和11年。（落合虎平校長の時代） 「じーちゃんの思春期」 武田 専（出版芸術社）
入学式校長挨拶で「五中の建学の精神は、開拓・創作であり、モットーは自由の尊重である。自らの判断で選び取ったことに責任を持つことがほんとうの自由です。
先生方を「さん」一対で呼ぶのが五中の伝統です。
登校の途中で上級生に会っても先にあいさつする必要はありません。必ず先に上級生が帽子を取って「おはよう」とあいさつしてくれます。下級生の人格を尊重し、下級生をいたわるのが五中の校風です」

昭和25年。（沢登校長の時代） 80周年紫友同窓会トークショウ
サッカーは、フィールドに出たら全て自分で判断するわけです。監督から右へ蹴れとか左へ蹴れとかいう暇もない。自分で局面を開拓し、その局面を創作していくわけです。「こういうスポーツを学校の中心のスポーツに据えられたこと自体、学校の考え方というものがそこに生きていたんだな」と痛切に感じます。

「2ちゃんねる」チャットより：小石川高校を巡る幅広い世代の意見交換が見られます。以下はその例です。

- ☆ 文武両道。うちの学校でも、日比谷、戸山なんかより小石川が断然人気です。校風が素敵みたいです。 (01/12)
- ☆ 小石川 何か応援したくなる。明朝快活な子供たちというイメージ。生徒さんは別荘がなく本当にいい印象です。 (02/01)
- ☆ あの自由な雰囲気にならされてしまうと通い難いでしょう。生半可な大学より自由です。 (02/01)
- ☆ 人を中身や個性で見るのできる人が多かった気がします。自分はこれから高校受験をする、豊かな高校生活を望む人々には自信と誇りを持って小石川を薦めます。 (02/01)
- ☆ 小石川の良いところは、全てを受け入れてくれるところ。悪いところを注意するのではなく、良いところを認めあうので、自分を持っていない人は馴染みづらいかな。進路に関してもしっかり、全てが自己責任。 (02/02)
- ☆ なんか2ちゃんにしては珍しいくらい肯定的なレスが多いですね。ここ。関係者の方々の回答も非常に親切です…つまり小石川って、それだけ素晴らしい学校だということでしょうか。 (02/02)



伊藤長七展が終了して1年後に、新たな情報も加えて冊子「我らは伊藤長七の教え子だった」を編集しました。追加された情報を2点紹介します。

まだまだ見つかる卒業生の五中・小石川賛歌

一九七九年（昭和54年）卒業生の言葉

校則を押しつけることのない学校。型にはまった目で私たちを見ていない担任。そんな中で自由に三年間、人生最良の時を過ごすことができた。

一九七九年（昭和54年）卒業生の言葉

二十年ぐらい前は学園ドラマが人気。先生が生徒たちと毎日一生懸命生きていく。所詮ドラマで現実にはそんな学校などあるはずはないと思っていた。小石川にはいるまでは。当時の日記、夏休みの初日「今日からつまらない夏休み」と書き出している。

こんなエピソードも残っています

一九七八年（昭和五十三年）。クラブの顧問も参加したコンパで酒を飲んだA君。何とか終電に間に合ったものの電車で寝込み、一駅乗り過ごしてしまう。逆の電車も終電は出た後。A君は線路を歩き始める。そこへ回送電車が・・・。

告別式で、息子を亡くした父親は、「あの子はいつも小石川を礼賛しておりました。学校へ行くのが楽しくてしょうがない、こんなに生徒が伸び伸びと、好きないように自分を伸ばせる小石川にきてほんとうによかったと常々申しておりました。あの子が好きだったのは自由な小石川でした。あの子が犯した過ちで、自由な小石川の締め付けが厳しくなり、他の生徒さんたちが今までのように自由が謳歌できなくなったらあ

子は浮かばれません。

先生方お願いします。どうか小石川が今までの通りでありますように。今度のことで自由な小石川が変わってしまったように、くれぐれもお願ひ申します」

校章はムラサキムラサキ（紫） Gromwell

太い根を染料や薬用利用するムラサキ科の多年草。日本各地の山地の草原に自生し、朝鮮半島、中国、アムール川流域にまで分布する。地中に紫色の太い根があり、シコニンとよばれる紫色の色素がふくまれる。茎は直立して高さ四〇〜八〇センチメートルになる。葉は細い楕円形で鋸歯はない。六〜八月に直径八ミリメートルぐらいの白い花がさく。花の基部は筒状で上部は五つにさけてひらく。紫色の根を日干しにしたものを紫根（しこん）とよんで

漢方で解熱、解毒剤につかう。外用薬としては華岡青洲による紫雲膏に紫根の利用が知られ、火傷、切り傷、痔などによくきく。



追加された情報の2点目は五中の女性教師に関するものです。以下に紹介します。

五中の女性教師陣

栗山津禰 国語漢文

在籍一九二二年(大正十一年)～一九三〇年三月(昭和五年)

全国初の男子中学の女性教諭。袂のはしを持たれて、いかにも恥ずかしげに教えていたとのこと。



物井ハナ(木村道子) 英語

在籍一九二六年四月(大正十一年)～一九二九年九月(昭和四年)

外語に校長が引き抜きにきた。あだ名「お花ちゃん」小柄で赤ら顔でめがねをかけている。ある日チョークの箱にヘビが入っていた。



ミス・ジュネビーブ・コールフィールド (英) 英語会話

籍一九二三年一月(大正十二年)～一九三七年二月(昭和十二年)

あだ名「ミソ・コンビーフ」「コワイヤツ」。こちらの語源は生徒が騒ぐと「ビー、クワイエット」で「コワイヤツ」。

ジュネビーブ・コールフィールド

コールフィールドは、ウィリアム・ウオレン著(吉野勇一訳)の「失踪」(第三書房昭和四四年刊)に登場している。タイのシルク王と言われた米人ジム・トンプソンが一九六七年にマレーシアで失踪した物語。彼はタイのバンコクで盲人協会学校を創立し経営するコールフィールドを尊敬し、観光名所のトンブソン家の観覧料を全て寄付している。彼女の学校には六歳から一四歳までの盲目の生徒一五〇人が学んでいる。学校の創立は五中をやめてまもなくの一九三九年。

一九五六年から一九六〇年まで、ベトナム政府の招待により視覚障害児のための学校と少年のためのリハビリテーションセンターを組織した。

一九六一年に、アジア地域で社会貢献などに傑出した功績を果たし個人や団体に対して贈られる「アジアのノーベル賞」
とも呼ばれるラモン・マグサイサイ賞を受賞。一九六三年にから大統領自由勲章を受章。

一九七二年に八五歳で亡くなった。



第三部

伊藤長七の残した
小冊子類

伊藤長七の残した小冊子類



85周年記念同窓会の参加者に手渡されたCDは伊藤長七が残した小冊子からシナリオを起こし卒業生の加藤剛さんが息を吹き込んで作成されたものです。

今回、残された22冊の小冊子群からCDの基になった7冊を選び、皆さまに紹介します。

冊子には題名がないものが多いため、仮の題名を付けてあります。また目次の左側には加藤さんの読まれた文の冒頭部を付けました。

目次

その一	府立第五中学校入学式告示（一九二〇年・大正九年）	109
-----	--------------------------	-----

立志とは、昔、支那周代の太聖人、孔子が十有五で志を立て、学問を始められたように、高等普通教育を受けるために中学校に入学する志を立てることである。

その二	開拓の精神とは何ぞや（一九二七年・昭和二年）	133
-----	------------------------	-----

かのマゼランの世界一周、かの博士ヘディンの中央アジア探究、あるいはナンセン博士の極地探検、いずれが開拓の精神の発露にあらざらん。

その三	パリからの手紙（一九二二年・大正11年）	143
-----	----------------------	-----

創作とは、自分の力のできるだけの仕事を、自分でなし、自分で考え、自分で工夫し、他人のまねでない、何かを作り出すということである。

その四

ニューヨークからの手紙（一九二三年・大正11年）……………159

ここに一言申し述べねばならぬことは、「東京五中の天才教育方針」という言葉であります。東京五中は全人間的教養を標榜しておりますが決して天才教育を標榜いたしません。

その五

プリマスからの手紙（一九二三年・大正11年）……………175

思慮に基づける軍備縮小のために、我が政府および国民は、誠意を傾けて努力する必要がある。軍備縮小後、今からは一層多くの力を文化政策にいたすべきである。

その六

自治之國東京第五中（一九二七年・昭和2年）……………203

なすべきを自らなせ／学ぶべきものを自ら学べ／天下に率先して、自ら治る精神を發揮せよ／天下を動かさんとするものは、まず自ずから動かずんばあるべからず。

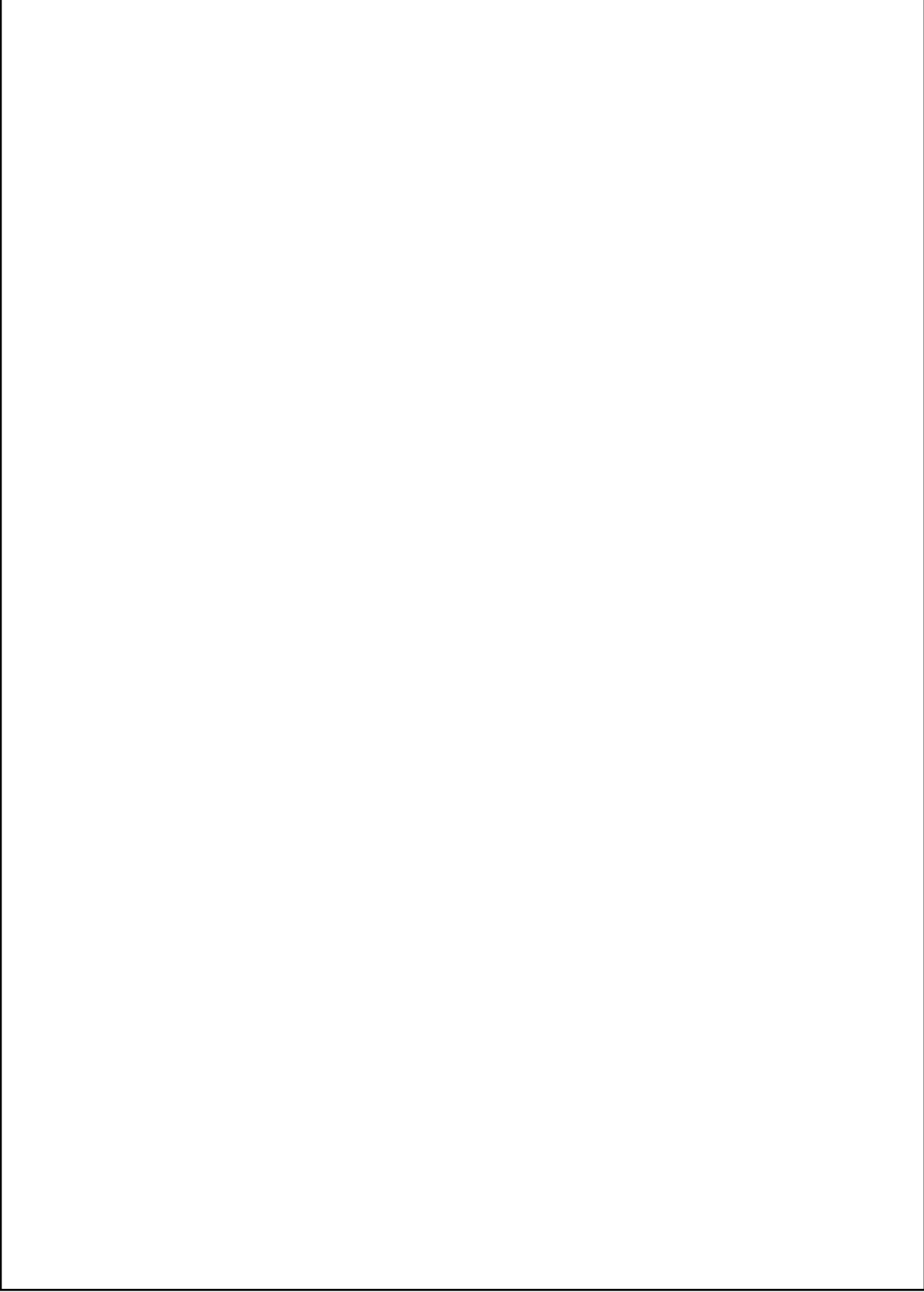
その七

すこやかなる心身へ（一九二九年・昭和4年）……………215

日本の国民として、昭和の世界に生きんとする若き男女には、どうしても系統的に、またきめ細やかな国際的教養を施さねばなりません。

大正九年四月

東京府立第五中學校入學式告辭



大正九年 東京府立第五中學校入学式告辭

校長 伊藤長七

『花は櫻木、人は武士』と、昔から日本の國の精華を言ひあらはして居る言葉は、大正の今の世にも、昔ながらに價を持つて居る。併し昔の日本に於ける武士といふ一階級は、必ずしも今の世の軍人だけを含んで居るのではない。一旦緩急あれば戈を執つて戦ふ人々も、平生にあつては、或は政治に或は農業につとめはげみながら、國民の hands となるべき學問修業に身を委ね、花も實もあるほんとうの紳士となるべき責任と自信とを持つて居る人、是が日本の國のほんとうの武士である。

今の世に海陸の軍人として籍を持つて居る人達は天晴れ帝國の武士である。

併しながら中學校以上の教育を受けて、國家緩急の場合には、義勇公に奉ずるだけの覺悟と修養を持つて居る人々は、商賈人でも農夫でも官吏でも學者でも此等は天晴れ今の世のさむらひであり武士である。そして此等日本男子の精華といふべき大正年代のさむらひの卵は現代の若い中學生である。然り、中學生は大學生の卵であり、日本の國を代表すべき紳士の卵であり、雄々しくもうるはしい日本男子の卵であり、そして實に日本武士の卵である。従つて『花は櫻木、人は武士』と言ひ傳へて來た昔の人の言葉を代へて、私は今『花は櫻木、男は中學生』と申したいのである。

昔、武家の家庭にあつては、男子は十有五で嚴格な元服の式を行ひ、それから改めて若侍の列に入るのであつた。この元服といふことに丁度相當して居るものは、今の世の中等學校入學であると思ふ。昔、支那周代の大聖人孔子も十有五で志を立て學問を始められた。それと殆ど同じ位の年頃に於て、日本の

若い男の子が日本の高等普通教育を授ける中學校に入學する志を立てたといふこと、この立志の雄々しい武者振りに、困難な入學試験をも切抜けて、希望通りの中學校への入學を許可せられ、今日こゝに目出たくもこの入學式に列するの喜びに接したといふこと、新入學生諸子は今日正に大切な元服の式を行つて居るのである。

諸子は今日只今より、もはや男としての生活に第一歩をふみ出したのである。もはや赤んぼではない。又御両親の膝下にお菓子をやだつたり甘えたりして居るべき小學校の兒童ではない。今日この式に於て、新入學生諸子は自分の心に改めて此のことをチャンと考へ直さねばならぬ。

御列席の保證人各位並に父兄母姉の方々に申上げます。皆様の御子達御弟御を、今日只今から中學校にお入れになる以上、皆さまは是等の若い人々を只の赤んぼとしてお取り扱ひになつてはなりません。既に國民教育をも受け終つて、

男としての第一歩を踏み出した以上、皆様の御家庭には、今日只今新にさむらひの卵が一つ生れたとお考へになるが至當でありませう。

以上述べた様な考へから、私は今日のこの式を大切と考へ、この式に列するところが出来る様になつた新入生諸子並に保證人各位に對し、改めて心からのお祝を申上げる次第であります。『まことに目出たうございます。』而も天の助けか、人の心の目に見えぬ力の致す所か、今日しも日の本のこの都の櫻は正に満開、げに散りも初めず咲きも残らず、このうるはしい春の光の充ち満ちてゐる中に、目出たくも入學式・始業式を行ひ得るといふこと、何たるうれしさでありませう。殊に況んや東京府からは態々小栗學務課長の御臨場を辱うし、保證人各位にもかくまで多數御臨席を辱うした中で、三百六十餘名の新舊生徒に相見えるを得ること、實に無上の喜びであります。

本月初から、自分は實に始業式の天氣如何を氣遣つたのである。この不完全

な學校に於て、運動場も渡廊下も出來て居ない新造の吾が校始業式に、「なさけなくも雨が降つたら何としよう。」かく思ひ來る時、私共職員一同の心は暗く閉ぢ塞がれる外はなかつたのである。それは雨になやむ櫻の花のなさけなさを悲しみいたむ爲ではなかつた。實際お集りの保證人各位及び生徒一同と共に、しをれた暗い心の始業式をしたくなかつた故である。然るに、きのふといふきのふ、其の夕暮の入日を眺めながらも、あすは大丈夫日本晴と分つたとき、豊島が岡の頂に立つた私の胸は小躍りのする程嬉しく勇みつゝ、天を仰いで中心の感謝をも捧げた次第である。

吾等は決して今年の花の咲き盛るを待つて始業式を催さうといふ様な怠業をいたして居つたのではない。實際の處、三日の祭日も四日の日曜も、同僚諸君と夜を日について苦心準備、湘南組の人々の特別な御盡力、營繕課の多大な御勵精によつて、昨日までに漸く是だけの式場を完成し得たといふこと、何とな

く此の建物の完成と共に、吾が校始業式までを今年の花はこらへ〜て咲かなかつた様にも思はれる。それ故『花は櫻木、人は中學生』といふそれ等中學生中、東京府立第五中學校の御身等は、人にも花にも殊に恵まれたものと言うてよい。併しながら、自分は今第二學年生徒諸子並に新入生諸子に對し、滿城の櫻花正に滿開なるこの春の半ばに於て、特に繰返して言ふ、中學生は男の卵である、紳士の卵である、そして人生の春を歩む多望の人の子である。併しながら、花のさかりは短いものである。この一ときの花ざかりを作り出す爲に、櫻の木の幹と葉と根とは、去年若葉の時節から一個年間だけの努力で漸く今日あるをいたして居る。新入生諸子も亦其の通り、過ぐる一個年の間、殊に努力精を勵ました結果が、女子師範學校の校壁にはり出されたあの合格の發表となつたのである。名譽ある合格發表のよろこびは、例へば春の櫻の一時に咲き誇つた様なものではあるが、其れがその様に人にも世にも目ざましく認められるに、

至つた由來が甚だ永いことを忘れてはならぬ。今年の花も數日にして散りしく後は、やがて人目にはぢみに、空氣と水との養分を吸ひ集める青葉の生活に入るのである。それと同様、諸子も亦府立第五中學校に入學し得たといふ春の様な喜びにうかれるのみでなく、あすからのまじめなぢみな、あの葉櫻の木かげの様な生活に入らねばならぬのみならず、やがては其の青葉も霜に散りしく年のくれに及んで、冬の寒さにもつゆ負けてはならぬ寒稽古の意氣込と實力とを養はねばならぬ。然り、諸子に告げたきは實にこの入學といふ喜びに伸ぶべき覺悟努力といふ一事である。府立中學に入學したといふ其の事實だけでは、決して餘りお目出たいことはない。入學し得た後、如何に規則正しくまじめに勉強する人となり得るかどうか。目出たいか目出たくないかはそれに因つて決すること間違がない。吾等は、この學校の入學試験に合格し得た諸子が、一人残らず、立派な心身を持たしたしかな學力を有して居るものであることを確信して居る。

何となれば、本年の吾が校入學試験に於て、自分は同僚諸君と共に、殊に問題の選擇に苦心したのみならず、東京帝國大學の三浦内科から四人の方、生理學教室から永井博士外數名、心理學教室及び教育學教室から約十名、高等師範學校から十餘名、女子師範學校から三十名の方々のお助けを得て、心理生理體格の各方面から、十二分のしらべをいたした。其の上は、短いながらも本氣に吾等の口頭試問も致したので、入學し得た諸子は、實によく出来る、頭腦も身體も實に立派な人たちであると深く信じて居る。併し、吾等の見る處によれば、不幸にして不合格になつた人々の中に、君等と殆ど同程度によく出来る人、立派な心身を具へて居る人が非常に多い。實は諸子以上のねうちを持ちながら、不運にして不合格となつた人もないとは言はれぬ。之を思ひ之を考へるとき、諸子は今回の吾が校入學試験に不合格となつた壹千百三拾八名の人々に對して、心からの同情をよせると共に、心からは是等の人々にも感謝すべきであらうと思

ふ。新入學生諸子にして、若し『自分は府立中學校にはいつたが、彼は私立中學にはいつた』と思ふ様のこと露程でもあつたならば、これ實に諸子自らの價值を下げるのみでなく、諸子の恩人に對しても深く恥づべきであらうと思ふ。府立中學に入學し得たから自分は秀才であるなどと、心に傲を持つ人が一人でもあるならば、今日此の席ですぐにその誤を直して貰ひたい。一體男の長い生涯に、秀才とか秀才でないとかいふことは、小學校卒業位のとくに分るものときまつては居らぬ。少年の時にもいつも學校の成績がわるく、どこにもすぐれた點を見せぬやうの人が、大學生になつてから、眞に敬服すべき秀才である事を證據立てる人々は少くない。學生の時代を通じて、格別秀才らしいことも見えなかつた人が、三十歳四十歳になつて、眞の英雄であり大學者であるといふことを世に示した例は、外國にも日本にも昔も今も甚だ多いのである。萬一ここに列席して居る吾が校生徒の中、まことの秀才となり得る卵が少くないとし

ても、それ等の人々の中、もし自分は秀才であると思つて居る人は、眞の秀才となり得ず、小利口な人前に威張る少年時代だけの才子として終つて仕舞ふであらうと思ふ。まことにくゞに惜しむべきである。この故に諸子は決して慢心してはいかぬ。自分が今少し位よく出来ると云ふので得意になつてはならぬ。眼前の名譽に動かされるやうの事なく、須らく男子一生の雄心を立て、二十年三十年の後、ほんとに世の人々から重せられるだけの學問事業をなさうとの志を立てねばならぬ。況んや、秀才とか不秀才とか、人間の才といふものが吾等にとつて第一の尊いものではない。まじめで謙遜でほんとうの勇氣があつて正直で親切であるといふ人格、行のすぐれて居るといふ點に吾等のほんとうのねうちがある。いか程才があり學問があらうとも、人物の下等な人は少しのねうちが無いといふことを呉々も忘れてはならぬ。さて自分はこゝに言葉を改めて、新入生徒は全體誰の力でこの學校に入學し得たかといふことをきいて見た

い。諸子は生れながらに御両親から立派な頭腦とよいからだを頂いて居る。其の生れながらの素質がよいのと自分の勉強とによつて入學し得たには違ひないけれども、それ等が決して諸子自らだけの力ではない。この様に申す私の言葉は、賢い諸子の心には既によく了解が出来たことと思ふ。即ち諸子は去る三月三十日、竹早町女子師範學校の校庭で、自分の府立第五中學校入學を知つたとき、歸つてから直に御両親や其の外のお世話になつた方々、小學校の先生方から御禮を述べられ、或人々はうれしさ餘つて泣いた人もあらうと思ふ。どうぞ其の時のうるはしいやさしい心をいつまでも失はずに居つて貰ひたい。自分にはや中學生になつたといふ様な顔をして、かりにも母校の御恩ある先生に對して生意氣のやうな事があつてはならぬ。中學生になつたといふやうな氣取に、宅で女中や書生に威張りちらし、お母様などに對してもそろ／＼生意氣なことを言ひ出すといふやうな事が決してあつてはならぬ。

吾が校では、こゝに掲げてある佐藤海軍中將のこの御言葉の意味を生徒の心得として居る。是は去年の始業式場で私が述べた

男らしく 無邪氣に 品をよく

といふ言葉を、佐藤さんに漢詩に譯して頂いたものである。こゝに男らしいといふのは、先刻來述べた『花は櫻木、人は武士』のその武士の精神をいふのである。無邪氣とは正直ですなほで、中學生になつても生意氣でないこと子供のやうであるのを言ひ、品をよくとは無暗に書生風の亂暴無作法をしないことを言ふのである。そまつな言葉を使ひ、むやみに頑固なまねをしなければ、男らしくないなどと思ふたならば大變の間違ひである。この意味に於て、私は此の學校生徒には男ながらも作法禮儀を學ばせたいと思ふ。ぞんざいな言葉をば、學校に於てのみならず、學校以外の生活に於ても、諸子の口から全然追ひのけたいものと思ふ。

さて自分は更に

立志 創作 開拓

といふ三つの言葉をこゝに掲げた。

立志とは既に述べた通りである。中學校に入學したといふ今の世の少年の元服が即ち是である。

創作とは自分の力で出来得るだけの仕事を自分でなし自分で考へ自分で工夫し、他人のまねではない何かを作り出すといふことである。今の日本人は昔の日本人のした通りだけをして居つてはならぬ。日本の國民は西洋のまねをして居るだけではならぬ。ほんとうの勉強ほんとうの發明に自分の生涯の力をつくすといふところ、そこに男の男らしい楽しみがある。それについて自分は今こゝに述べたいと思ふ一つの例がある。今回の入學試験中、口頭試問の場合、『中學卒業後、君は何をしたいか。』といふ問に對して、『自分は家の都合もあるから、

中學卒業後はどの學校にもはいらずに、自分の努力によつて何かの發明をしようと思ふ。』と答へた。その答はほんとに氣に入つた。私は新入生徒の大多數が、卒業後には是非大學や専門學校にはいることを切望はして居るけれども、高等學校や大學にはいる爲の準備といふことは、決して吾が第五中學校の目的ではない。まじめで規則正しい勉強によつて、自分の目的とする高等學校や大學へ入學する位の實力は、是非この學校在學中に養つて貰ひたいけれども、高等學校や大學にはいり得たからそれでよいなどといふことは決してない。日本人として男としての尤も大切な教育を受ける間に、おのづから高等學校や専門學校にも入學し得る實力を養ひ得るからねうちがあるのではあるまいか。

次に開拓の精神について自分は今多くを語らぬ。この精神を理解して居る二年生が、一年生に對しても、其の中、順次に話をしてくれるであらう。昨年女子師範學校の講堂で自分の述べた演説の中のこの語を、昨年おなくなりになつ

た故の東京府知事閣下に、この學校の爲にとりて、去年四月九日の始業式當日書いて頂いたのがこれである。これは吾が紫友會の歌にもいうてある通り、

一

豊葦原の中原と
拓きましけん日本武
尊のみいつ吾孺路に
古りし歴史は二千年
今將た仰ぐ帝城の
武藏の國ぞ大いなる

二

流れも清き多摩川の
水にあらひて生れたる
男心は東海に
聳えて高き富士の山
略近き人の世の
雲のあなたぞ麗はしき

三

豊島の里に程近く
樹立も深き岡の邊に

結ぶや少カサき人情ひとこころ
理想の楯を振り上げて

吾學びやの開拓に
二つの腕の勇む哉

四

菅スガの荒野を飛ぶ鷺の
白雲遠き高原に
小草の露に光あり

羽風も高き飛驒の山
行く手の森を眺むれば
吾蹈む土に力あり

五

源遠き文明の
一もと咲ける野の花の
思は通ふ萬世の

科學の道に分け入りて
ゆかりの色を翳す時
眞理みちを究むる人の胸

六

東亞の光太平の

波の彼方に輝きて

みかどの恵いやひろく

五州の外に動くとき

奮はんかなや開拓の

吾が校友の精神を

本日この始業式を、設備の甚だ不完全なこの木香新しい體操場に舉行するといふこと、來賓の方々には失禮であるけれども、吾が校開拓の精神にも似つかはしくあるのを實は喜んで居る次第である。

この開拓の精神の説明ばかりでなく、二年生はすべてにわたつて、新入補缺生一年生の指導者であり兄である。年齢の多い一年生も、學校にあつて二年生に對する態度は、どこまでも弟としての禮儀を示さねばならぬ。この點からは、身體の工合等其の他の理由により、一年に居残つた生徒にも他を指導する責任があると思ふ。今までこの學校では、先生に對してのみならず、生徒同士の禮儀がよく行はれて居る。一年生は二年生に對して心からの禮意をつくさねばならぬ。同時に吾が校風として、小使及び給仕や外來の人々達に親切にして威張

らぬこと、よく案内をして上げること等、學校にあつては、先生は親、上級生は兄さんである。家庭の生活は仲よく和らいで居る間にも、嚴格なところがなくてはならぬと同時に、學校生活は嚴格でなくてはならぬと同時に、常に和氣がなくてはならぬ。

慈悲・報恩といふ言葉の意味が、學校のどこからどこまでも行渡るやうにありたいと平生から考へて居る。今や新入生を迎へるためとして、學校の設備萬端は甚だ不完全ではあるが、この有望な可愛らしい多數の弟を迎へる爲として、第二學年生諸君の心の支度は申分ないものと信じて居る。先日來の二年生の様子、其の言ふ所其の爲す所に見ても、一年生を迎へて學校の内外に開拓の精神を植ゑつけることに於て、二年生は一年生の見たる資格が十分ある。新入生諸君並に保證人各位は、この點に於て十分御安心あつてよろしいと信じます。さて以上の如き趣旨から、新入生諸子は今後のこの學校に於ける生徒としての生

活を如何にすべきかといふ點について、私は、

よく眠り、よく遊び、よく學ぶ

生徒になつてほしいと、自分は更にこの一言をこゝに附け加へたいと思ふ。

運動をば大に奨勵したい。一年生二年生位の間に、將來勉強の土臺となる身體を養成することが殊に大切であるが故である。併し運動のみが體育ではない。この學校では、運動以外にも自強術や静座や塞替古や、體育上重要な色々の方面に研究の努力を注いで居る。すべての人々に運動をさせたいので、少數の選手をきめて、其の人々にだけ澤山させるのは斷じてしないつもりである。

勉強は餘り多くしてはならぬ。併し一年生も一日に平均三時間位はしつかり自修する必要がある。殊に學生に取つて大切なのは、教室に於ての周到な注意である。この事をこの學校の特徴といたしたい。

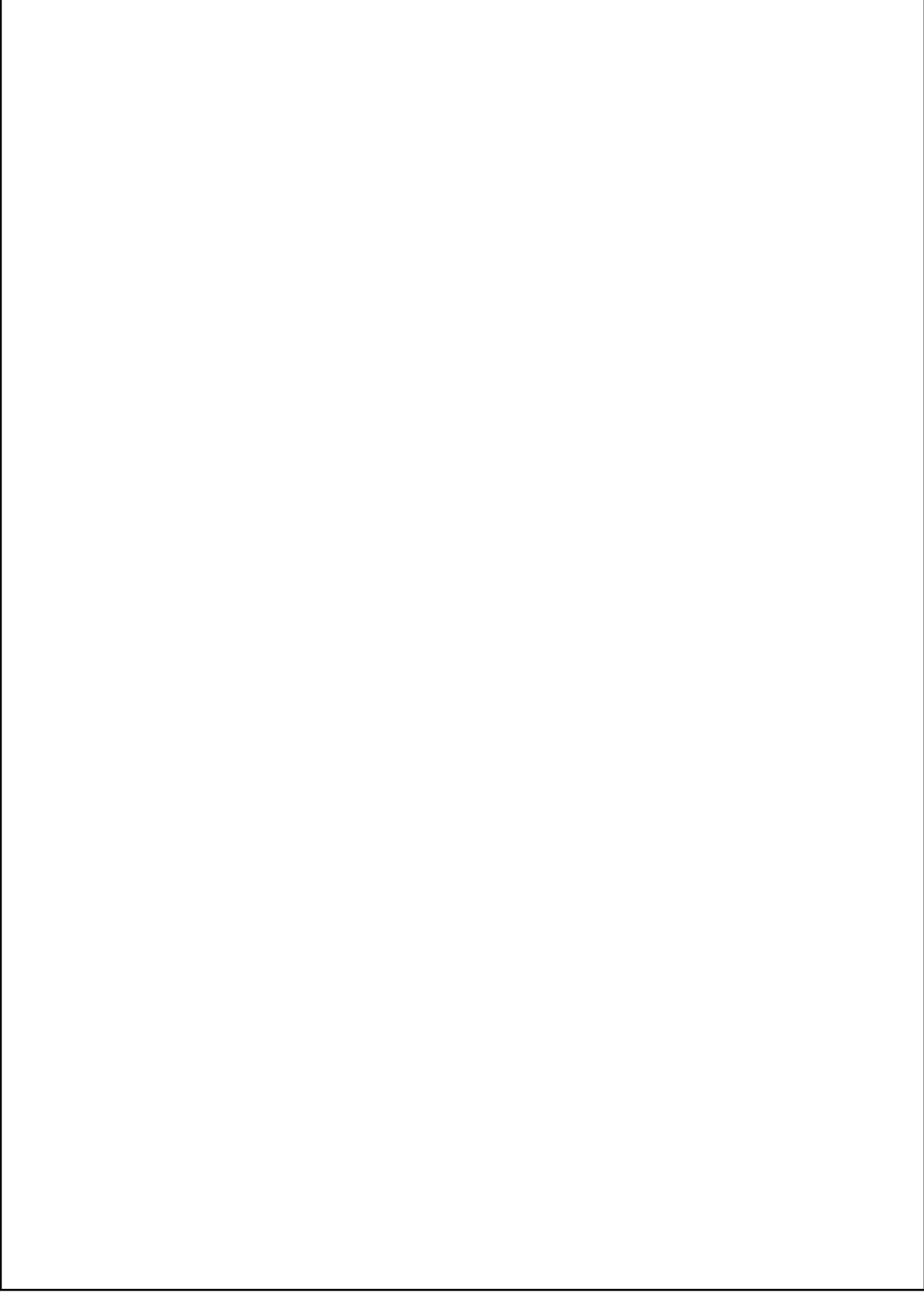
終りに小學校第五學年からの入學者に一言する。秀才と威張るなかれ。六年

生の下風に立ちてまじめに謙遜なれ。明年三月に至つて、諸子は始めて國民教育完了の資格を得べきものたるを思へ。

吾が校は過ぐる一個年餘り東京府女子師範學校の袖に保護せられて、今日この新校舎に始めて獨立の始業式をも舉げ得るに至つたことを思ひ、感謝禁せず、東京府知事を初め、當局の各位並に東京府女子師範學校の鈴木校長外職員御一同に甚深の感謝を捧ぐる次第であります。

本日は御多忙の處かくも御揃ひ御來校下さいまして、當校第二回の始業式に光榮を添へられた保證人各位に對しても、心からの御禮を申上げる次第でございます。之を以て今日の式辭といたします。

大正九年四月十二日



五月五日放たれたる鯉幟の心を

伊藤寒水

一 人の浮世に紙張子
鯉の姿と生れ出でて
吹くや春風高竿に
なぶらるゝ身て是非しなき

二 思ひかけきや方ある
男の腕に放たれて
恵の糸の一すぢに
かの大空をかけんとは

三 わが乗る舟は輕氣球
吾が行く方たはわたの原

限りし知らぬ久方の
空のあなただぞおこがるゝ

四 ぶりさけ見れば太平の
海に横たふ大陸や
彼方に布ける島の敷
いづれか人の世ならざる

五 吾に千里の心あり
君百年の望あり
共に語るや新緑の
つきせぬ御代の萬歳を

昭和二年二月十八日

開拓精神とは何ぞや

東京府立第五中學校

開拓と歌 三

男の願一すぢに

直なる道を原宿の

あなたに通ふ宮参り

人のこの世の苦しみを

こころの奥の勞働も

やがては目ざす永劫の

理想に向ふ東京府

いのれいのれ神宮に

開拓の精神とは何ぞや

クリストフアーコランパス西暦千四百九十二年サンタマリアを西班牙の岸に解纜して、其新大陸發見の立志に一路大西洋の浩波を踏破せんとせしもの、之を開拓の精神といふ。

億ふ昔勇武日本武尊、地を拓き疆を征す海の西東、其少年英邁の御姿を燒津の原に立たせたまひけん己み難き一片の雄心、これを開拓の精神といふ。

更に想へば、竹の園生のおの典雅なる御風貌にも、底ひ知られぬ剛銳の御意氣を藏せられ、御身を挺んじて泰西瘴熱の地を征し給ひけん北白川宮殿下の御志、さてはかの日本アルプスの絶巔、歐羅巴アルプスの峻峰に其御微笑の杖を樹て給ひけん吾秩父宮殿下の御心の姿、開拓の精神とはこれを言ふ。

北米ニューイングランドの一角ブリマスの巖に、今より約四百年前其の纜をつなぎけんメーフラワー滿船の男女、其の胸には何物にも代へ難き純情と信仰とを抱いて、

再び祖國に歸らざるを誓ひつつ、大地に膝まづいて千古に不朽なる彼等ビユーリタンの徒の

靜思默禱を捧げたる其至誠

吾所謂開拓の精神とは即ちこれなり。

明治二十四年と言へば今を去る三十有六年、日露の戦前十三年なり、時に短軀精悍の日本人、陸軍中佐福島安正は伯林府より行を起して、單騎歐亞の大陸を横斷せるとき、其の踏破せるところ馬上實に一萬哩、日本男子の爲に萬丈の氣を吐きたるのみにあらず、世界の學術界に對しても甚大の貢獻をさしげ、異日明治三十七八年戦役に於ける帝國全勝の素因を築けり。記憶せよ福島將軍の雄圖は決して一時の功名心よりにあらず、露、支、獨の現代語に精通せる上に、世界の地理を研究せること多年、節を屈しての勉學より湧き出でし民族的大野心に根ざせることを。

彼のマゼランの世界一週、かの博士ヘイデンの中央亞細亞探究或るはナンセン博士ノビレ少將の極地探検、さては吾山田長政、呂宗助左衛門等の雄圖、何れが開拓之精

神の發露にあらざらん。

日清戦争より十年前東方齊荒尾精先生は日清貿易研究所を創設して、其の門下生幾十の英俊兒と共に東亞を研究し、特に支那語の運用に練達せる多數の開拓青年を大陸に差遣したるもの、これやがて明治二十七八年戦役に示せる我が國大勝の遠因たるを
知れる者少し。就中荒尾先生の高弟浦敬一君は單身熱血、其の至孝至忠の胸を抱いて
深く新疆の省に入りつつ遂に不歸の英骨となりて

日本青年軍前進の露拂ひ

となりたるが如き、若しくは北亞米利加の地に馬鈴薯王として知られ居る牛島翁、
さてはアメリカの到る處に名をほしひまみにし居る高峰博士、野口博士の如き、或は
現に南米各地に移住殖民せる同胞の若き男女の如き、此等を眞の開拓者といふ。

然り、然れども、吾等の所謂開拓者は決して遠征家海外移住者の如きに限れるにあ
らず。眼を古今の文献にさらし、心を東西の典籍に潜むるもの、精愼細緻なる科學の
實驗室に其の生涯を没頭せるもの、キュリー夫妻の如く、マルコニーの如きもの、若

しくは齡八十にして發明の意氣尙熾爽、過去に成功せし一千一百種の發明を基礎として、更に新なる大發明を企て居るエヂソン博士の如き、これを眞の開拓者といふ。

もしそれ水戸光圀卿が大日本史の編著を志したるが如き、博士ダアキンが五世界を週遊して其の進化論を生み出したるが如き、或は一片の熱情に獨逸國民を激勵したる哲人フイヒテの如き、英國湖國地方のあのザアイダルターター湖畔に冥想しながら、田園詩人として志を尙うせるなつかしきウヤーズウヤース、北英の文化に不朽君臨の美を遺せし詩聖スコットの如き、何れか

心の開拓者にあらざらん。吾等は更にここに東西萬古に傑出せる靈界の巨星、東亞の光、

釋 尊

を思ふ。現世の榮華と生、老、病のすべてを超越して、更に死の關門以上に人間濟度の本願を志しつつ、深く雪山の奥に入りにはかの救世の太子よ！ 永劫より永劫に限らなき人の世のすべてを救はんとして苦衷黙禱せられたる聖者の本願、之をしも開

拓の精神と言はずして將た何とか言はん。

若しそれ、諸子が日夕に企望し實現せんと考へ居る上級學校入學試験と雖も、何ぞ必ずしも一高といひ二高といひ浦高といひ東京商大といはんや。北海道に、朝鮮に、臺灣に、支那大陸に、さては歐米の到る所に、高等學校あり、専門學校あり、大學あり。

進みて就け

新しきを開拓しつつ

人間到る所に青山あり

男子往く所綠草なきにあらざる

を思へ。

維新前七十餘年、かの幕末の風雲兒長州の吉田寅次郎は、佐久間象山先生の指導に勇みて、一夜浦賀淀船中の黒船に乗り洋行を企てたる雄心！吾等はあの突飛なる企劃を吾が愛する東京五中並に夜學校生徒に教へんとする者にあらず。然れども記憶暗

誦のみの學問にうづくまり、追隨の研究のみに甘んずべからざるを思ふや尤も切なるものあり。

今より十年十五年の後に於て、と子各自の頭上に降下すべき日本民族將來の輕からぬ使命を思へば、諸子は今に於て必ずや各々其天分を伸べんとすべき第一義の修養に志を立てねばならぬ事由あるを信ず。

東亞文明の今後に

開拓日本の將來に

紫友の健兒がこれ／＼の道に動き初むるとき、東京府立第五中學校と五中夜學校並びに、紫友會と紫星會すべてが初めて其の本來の使命に生くべき第一歩を

國際日本の進程

に蹈むを得べく、我が學校及び校友會の生き甲斐ありとせらるべき

眞の黎明

を仰ぐを得べけん。大丈夫自ら立ちて然る後、よく其の校友と共に母校の運命をも

立つるを得べく、紫友會紫星會員にして尙成す能はずんば、天下の事將に悲むべきものあらんとす。之を思ひ、之を想ひて感慨甚深、半宵筆を執りて一氣この文を草し東京府立第五中學校、五中夜學校生徒並に卒業生諸君に告ぐ。

昭和二年二月紫友自治國建設の前日

伊藤 長七

開拓之歌 五

寒 六

起てよ人々これの世に

山と水との化かうけて

光あまれき天々下

ひろき世界に働かん

よし海原うなはらは隔つとし

青雲せいうんとほく南米なんまいの

そこにも建つる日本村

すすめすすめ開拓者

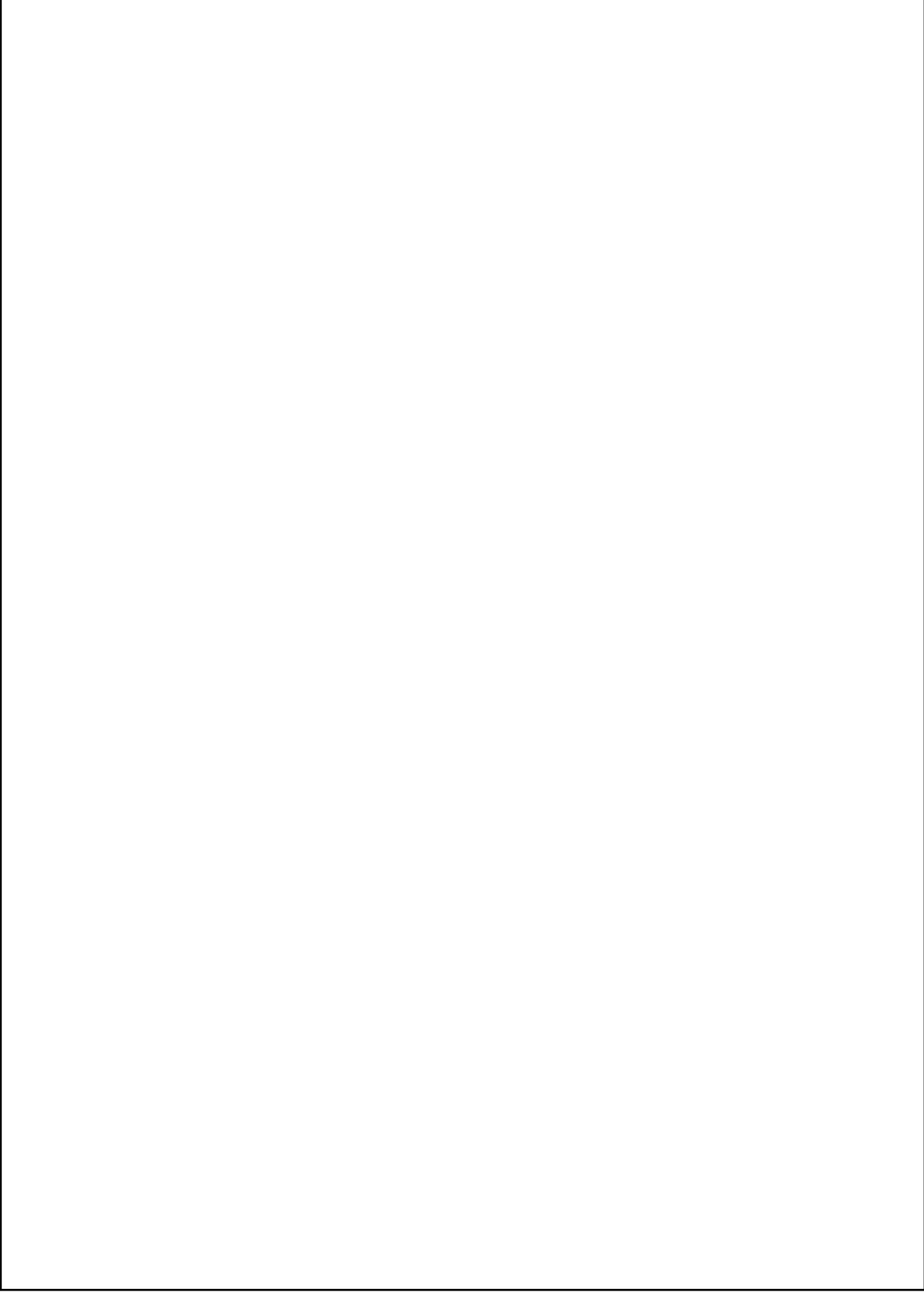
東京府立第五中學校の

職員 皆々様
父兄母姉皆々様
生徒 皆々様
小使室 皆々様
辱知 皆々様

パリ―エトワールの近所にて

伊藤 藤 長 七

大正十一年八月十一日



紫友會皆々様

八月十一日朝

パリーの宿にて

伊藤長七

父兄の方々 學校の諸先生 生徒諸君から 毎々御懇切なお手紙を頂いてばかり居りますのに 私の方からはいつも御無沙汰がち 手紙を差上げるとなりますとこの様に皆様御一同へとして 横着の書き方を致しますが 之も見學研究に寸暇を惜み居る只今の私には 已むを得ぬところとお許しを願ひます 英國でロンドン市内並に其附近の學校參觀を一通り終りました後 私はオックスフォードから ストラットフォード オンエボンに參り 日頃仰ぎ慕うて居つた文豪シエークスピアの跡を忍びました ヲリックの古城に立ち レミントンケニルウースの勝を探り そしてキャベントリーの古きお寺に 名高いゴダイバ夫

人のうるはしくもけ高い心操の昔の香りを慕うたとき 私の胸には古いアン
グロサクソンの其國民の心に植ゑつけられた教化の源が いかにも深く且遠い
といふことを今更の様に思ひ浮べました イートン ハローを初め 數々の學校を
見て 私が英國教育のすぐれて居る點に思ひついた 其色々を今こゝに書いて居
る暇がありません 英國の中學生の勉強ぶり 其私たちに對する接待ぶり 運動
場に於ける活動ぶり 殊に Shorto Spirit と言はれて居る其競技の 天晴れ男らし
く國際的である態度など 是等については私の感想を秩序的に整理して 歸國
後皆さんの前に委曲をお話したいと存じます 私は日本の中學校がアメリ
カの中學校に學ぶべき點の少からぬを明にいたしました後 英國に來てから 私たち
のお手本が英國にも中々たくさんにあることを痛切に感じました ロンドン市
内で私の參觀した Owen School 々々 St. Paul School 々々 Greenwich の Roan School
ごかそれ等はいづれも立派なものでありましたが 殊に私の敬服いたしましたのは

ロンドン市外の Charterhouse 中學校とラグビーの中學校とであります。Charterhouseの校舎と其運動場とが非常に完備して居る上に學校所在地がいかにも申分なき田園のよい丘を占めて居るといふこと生徒の風がしとやかで規則正しく元氣旺盛學業に勵精の態度がどの教室にも漲り溢れて居るのを敬服いたしました。就中最も私の眼についたのは其博物科の美事に研究されて居るといふ點でありました。標本室の内容を完璧にして生徒等の手に申分ない排列をしてある上に先生と生徒とがいかにも愉快さうに熱心に研究をして居る様子はほんたうに見上げたものでありました。併し私は吾英國教育見學中特に甚大の感動を與へられた學校としてのラグビーについて少しばかり皆さんに御報告することに止めて置きませう。

トムブラウン スクールデーズ Tom Brown's Schooldays といふ名高い書物は暫く後に五中の生徒諸君も英語の先生から教へて頂くときが來るでせう。後

に英國の國會議員となり其人物事業に於て一世の仰ぐところとなつた Thomas Brown 氏が 十二三歳の少年の頃から ラグビー の寄宿學校に居つたときの生活實狀 其間の感想を書いたものが 其 School-days といふ書物の内容となつて居るのであります 腕白な中學生間の交際ふりがいかに無邪氣に眞率に而かも趣味多きものであるかを飾らずに書いてある この書物は 中學生の讀物としてたしかに尤もよいものゝ一つであります 仲間同士のけんかもにらみ會ひもたくさんありますけれども 結局 ラグビー 中學校の生徒が學友同士いかに温情を以て交りつゝあるか 師弟の關係がいかにうるはしく温であるかを書中に見ることが出来る

殊に其頃の ラグビー 中學校長 ドクターアーノルド 先生と生徒との關係 アーノルド 先生が亡くなられた時の トムの 悲嘆にくれた心情などいかにもありありとよく書いてあるので 讀者を感動せしむること多大であります

私は以前に『Tom Brown's School Days』を詳しくよんだわけでもありませんでしたが、ざつと一讀しただけの記憶をたどりてラグビーに辿りついたのが七月十四日の夜半、停車場附近に一泊して、早朝ラグビーの校長 Van Rans 先生を尋ねましたところ、私が特にラグビー參觀の懇切なる希望を有して居る點をさいた後に、校長先生は非常に多忙であるに拘はらず、色々私の爲にラグビーの學風 アーノルド 先生のことなどを話してくれました。校長の令息でラグビー卒業生 目下ケムブリヂ 大學に在學中の青年が、私を懇切に案内してくれましたので、ラグビーの色々の方面を詳しく見學いたしながら、私はそぼ降る雨の中に立つて幾暫らくの間、なつかしくも偉大なる吾ドクター アーノルド 先生の像を眺めくらししました。そして更に快男兒 Thomas Brown 當年の腕白兒 トムブラウン の肖像の前にも立ちました アーノルド 先生の英靈を忍びつゝ、日本民族の前途の爲にも、幾分有意義なる中等教育の仕事をして見たいものと、私が其日ラグビ

1の境内で思ひめぐらしたあの印象と 自分獨りだけに 教員としての新なる立志を思ひついたあの日のことを私は永久に忘るゝことが出来ぬと思ひます

ラグビー境内に立派な博物館もあります。 *Sun school* といふ建物は全部が理科の研究室實驗場で 之は英米二國のすべての中學校を通じても他に比類なしと言ひ得る様な立派な完備せるもので 其中に實驗研究をして居る先生と生徒の態度が又見上げたものであるといふこと *ケンブリッジ* や *オックスフォード* の大學でも非常にラグビースタイルのことを賞賛して居ります 語學の教場や音樂圖畫などの教室をも見ましたが 私の殊に興味を感じたのは 幾百年來の古い建物の其寄宿舎の中に *ラグビー* の生徒等が生活して居る寢室や食堂の有様でした *トムブラウン* や 其外 *ラグビー* 出身の諸名士が勉強した机 *アーノルド* 先生が常に用ひたといふ椅子など いづれも私にとりての興深きもので 校長は深切にも私を *アーノルド* 校長の其尊い椅子に腰かけさせてくれました 到

るところで多くの先生生徒に遇ひましたが其師弟の情義のいかにもうるはしく立派であるのが目につきます 放課後は生徒のある人々と話しながら運動場に出て名高いラグビー式のクリケット競技も見せて貰ひ ほんたうに満足の日を年来想慕せるラグビーに送りました 校長の好意により 二年生のある組に出掛けて 日本からの手紙(五中諸君のも五六通其中にありました)をくばりながら色々私から話いたしましたところ 其先生と生徒とは其一時間をつひに私との懇談に與へてくれました 思ひ出多き其日の記念として 其ラグビー中學校の二學年の一つのクラスは 私のカメラに収められて居ります

何だか餘りくたくしくラグビーのことを書きましたが 私は自分の一念に願はくば新しく小さい一つのラグビー校を武藏の野にも生み出したいといふ様な平生からの心願が 其日殊に鮮明に私の心頭には思ひつづけられたといふことを皆さんに申上げたいと存じます

其後英國北方の湖水地方に遊んで ヅァイデルウァーター のあたりに絶代の詩星 Wordsworth を忍びました 到るところ山明に水うるはしくそしてそこらあたりの平和なる夏木立の間 夏草の緑りと野の花の毛せんを敷きつめてある間にやさしく頼母しさうな顔つきをして居る牛羊の群を到るところに見ることが出来ました 大なる自然の雄麗といふことと 詩人の創作といふものがいかに關聯多きかを今更の様に考へさせるのはあの英國の Lake District であります ウヲーズウヲス の舊宅にも立寄つて思ひ出の寫眞をとりました

Scotland は更に山河の秀麗を以て England 以上と言はれて居るのがうそでないと思ひました グラスゴー もよい エディンバラ も氣に入つたそして ヅァインネビス や 其他の山々が餘り高くもないがいかに氣持よく 詩人畫客の背景にふさはしいと思はせるけしきばかりです 雨の中ながら Loch Katrin (カトリン湖) を舟で渡り 更に ロッホロ、モント に浮んで あたりの峰と森とを指

呼しながらあの湖上の美人を書いたSir Walter Scottを忍びました スコット
ランドでは作家バーンスとスコット この兩詩星は其國の王様以上といふ程
 に國民から崇拜されて居ります 詩を作り畫をかくこのみが人間の尊いこと
 であることは私も決して申しません 人類文化の爲にも この國の爲にも 吾等が
 科學の研究に精一杯の力を致す必要があること 今更に申迄ありません 私
 たちの生活をつづける爲に そして この國この民族の光榮を維持するため
 實業家として 政治家として 又軍人として 醫者としての申分なき眞のねうち
 ある人々を どうぞ日本の將來にたくさん出したいものです 併し立憲政體の美
 果を結ばしめんとあせり 海陸軍に於て 世界に其光榮を發揮したと誇つて居る
 この國民の間に せめて數人でもよいから世界の詩人 世界の藝術家 世界の學
 者と言はるゝ人々を生み出したいものである 今迄の日本でも その様な人々
 があつたに相違ないけれども 國際的生活といふ點に於て甚不用意であつた日

本人は吾國の生み得たるそれ等の作家を世界に紹介することすら少しも出来ず今日に至つたと思はれます いづれにしても日本の少年少女が今から後に修業をつんで何か一かどの人物にならうとする其志は眼の前の功名や富貴を離れて學問事業將た文藝のためにほんたうの創作にといふことを目ざすべきである 紫友の若き人々に對して私が兼ねてこの創作論を繰り返すといふこと皆さんには又かどうるさく聞えるかも知れませんが之も亦スコットランドの湖畔詩星スコットの故郷から申送る言葉と思つていやと言はずに聞いて下さい

申たいことが甚多くて時と紙とが何分にも不足勝ちである 惜しいと思ふけれどこゝらで筆を止めませう 七月廿五日ドゥヅの海峡を越えてパリに着きました以來凱旋門の附近に下宿して幾度かその周圍をそぞろあるさしました エトワールと言はれて居る其門の頂に立つこと半時ばかり古往今來

民族の消長隆替といふことについて殊に感慨を深くいたしました Verlan の
戦跡メツツの要塞にも立ちました 皆さんにお話申上げたい感想はかげごもか
げごも盡くるときはあるまじき様に存じますが之を次のたよりに譲ります
それについての歌の文句が出来さうでまだ完成いたしません

今から百日位たてば皆さんと東京の真中でお目にかゝり得るといふ新なる
喜びに今私の胸は踊つて居ります 實を申せば折角外國のことも分りかけた
この機会にせめて今一二年位外國に止つて 思ふ存分私の志す

國際的教育

を研究したいと限りなき雄心にこの心とこの身を捨はれさうのこともあり
ます 併し私の胸に抑へきれぬ一片の真情を申せば もう故國へ歸りたくなり
ました あのように純なる心を開いて この私といふものを待つて居て下さる皆
さんに 一日も早くお目にかゝりたい そして私の微力にも 五中の生徒諸君の

爲になる何かを一所けんめいにやつて見たいものと矢も楯もたまらず考へる
こともある様になりました

五中の生徒諸君は先生方と今信濃の各地に轉地修養中の人々もあらうし
其外に旅行修養して居らるゝ人々も多いでせう 第二學期に元氣な福々しい顔
をして再び鴛籠町の學びやに集つたときに私のこの手紙を見て下さるでせう

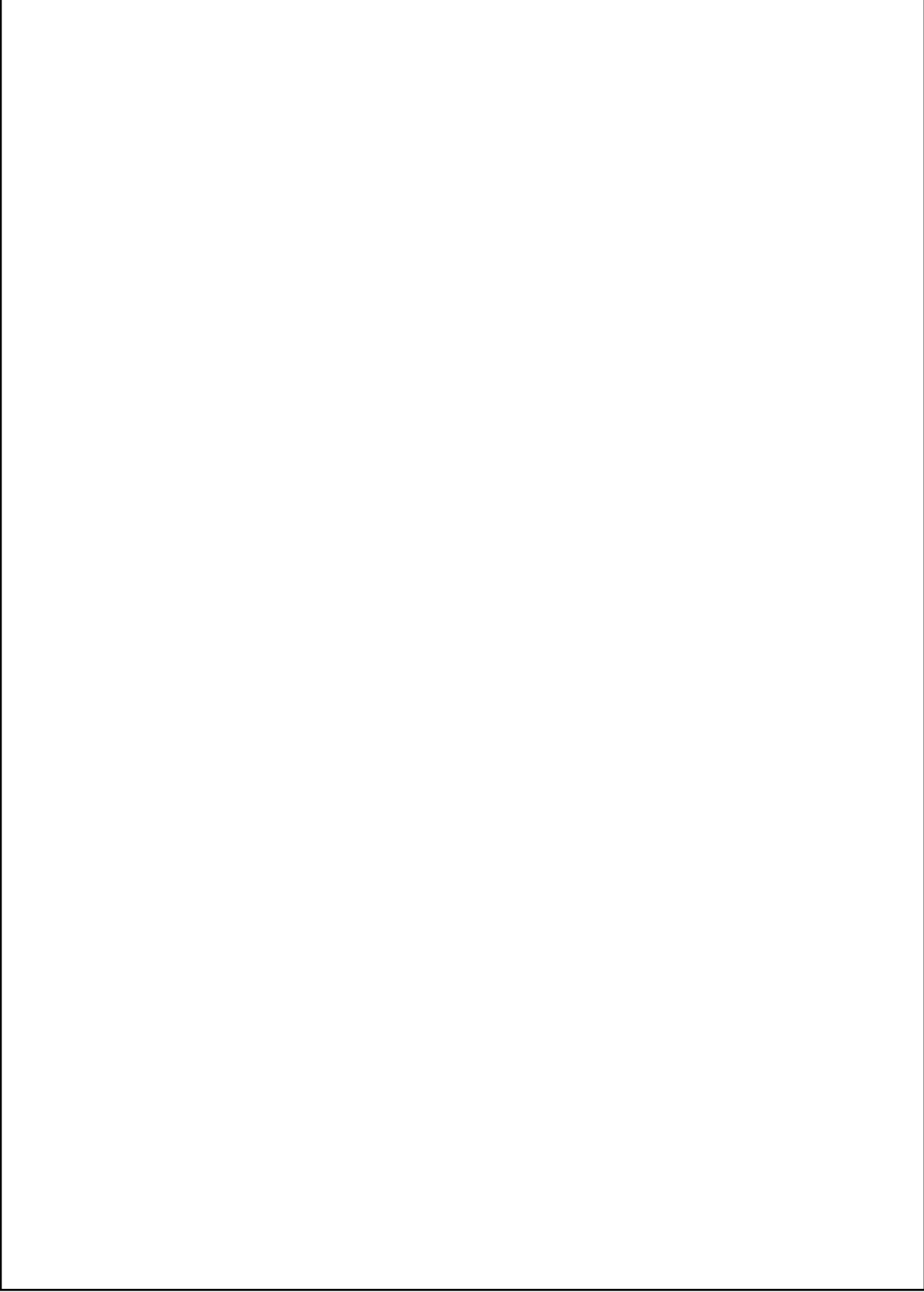
アメリカ以來の私の寫眞をこれと一所に少しばかりお送りいたします お笑
ひ草に御一覽 私の丈夫であるといふことだけは何卒御安心を願ひます

皆さんに宛てて歐羅巴から一々はがき一葉なり差上げたいと思ひ今勉強い
たして居りますがそれが出来ない中にマルセーユから船にのるやうになるか
も知れません 其節はお許しを願ひます 明後日から獨逸 瑞西 伊太利の方へ
旅行に出掛けます 所々から又々通信を差上げませう

英國の湖水地方で感じた思ひの一はし佛ランスの二三の場所で詠じた歌を

近い中にお目にかけるかも知れません

十一月十六日神戸に上陸後 皆さんの御健康なお顔を見ることの出来る日を
数へつゝ、私も精々自愛しませう 重ねて皆さんの御自愛御加餐を祈ります



紫友會員御一同様

大正十一年四月四日
米國ニューヨーク市の寓居にて

伊藤長七

紫友會御一同

四月四日

伊藤長七

今日午後五時私は Pennsylvania 驛を發 Florida を經て Texas の方に旅立ちいたさうと準備中 東京五中からの一封が私の手に落ちました 恐らく之が米國々内で私の手に入る五中よりの通信の最後のであらうと思ひめぐらしつゝ其 Brown 色の封を開かんごせし刹那 興味と期待と希望と（而かも幾分かの不安心配もなしでは無く）を以て 兩手の指に其帶封をつかんだ私の目つき顔つき手つきすべての表情を御想像下さい

開いて見ると 東京の諸新聞三月八日の紙面に佐藤武内兩君と其發明が紹介せられてある 紙面の鮮明な記事をよんで いつも變らぬ兩君の温雅な顔にも遇ふことが出來たときのうれしさ 私は今この紙面に 自分のうれしい胸中を其まゝうつし出すことの出來ぬのを遺憾に思ひます 橘先生を初め諸先生生徒御

二

一同もどんなにか喜んでおいでよありませう 武内佐藤兩君の御家族もさぞお喜びのことゝ存じます 併しこゝに考へねばならぬことがあります

紫友會員の發明が新聞に紹介されたからというて 其新聞の記事のため大喜びしたり得意になつたりするのは 少々ねうちがさがるといふことであります 發明其物が眞にねうちあり 其學生の勉強の態度平生の心掛けが立派であるならば 新聞に出されないでも 誰にほめられないでも 其人はほんとにえらい人と言つてよい

◎ 人にほめはやされるといふことは 少年時代の學問修業上 本人のために必ずしもよいことではない

◎ ほめられてもほめられないでも 自分の信する道をふみ 自分の志すところに心を潜めて 五年十年乃至三十年の後に 眞の成功眞の發明を出さうと 靜に規律正しく勉強して居る若き人々の前途にこそ 眞の大なる發明と成

功が生れ出てくる

此故に佐藤武内兩君としてはまことに名譽ではありますけれども兩君は新聞の記事などで得意になる様な志の小さい少年でないといふことを私は信じたいのであります 考へても御覽なさい 佐藤君も武内君もまだ中學の初年級學問の糸口を少しばかりかちり初めた時代に於けるそれ等の場合に一つや二つの發明を人にほめられたからと いうて得意になるなぞといふ餘計のひまはないはずではありませんか 兩君の如きまじめなおとなしい學生は私の申すまでもなく 今度のことで威張るやうなこともあるまいと 信じては居りますがこゝに以上のやうな一言の希望を申述ぶる次第であります

數學 英語 歴史 地理 理科 博物 國語すべての中學校の教科を 規律的にしつかり學修して 眞の實力を蓄ふることが第一に必要なである 音樂により 圖畫により 若くはうるはしい歌や文章によつて 諸君のうるはしく大なる想像を養

四

ふのも 諸君の創作に大なる力を與ふる種になりませう 全人間的教養の趣旨により 身體精神の統一的發達につとむる結果 どこ迄も健全圓滿な心身の持主にならねば 大發明の土臺を養ふことが出來ますまい 體操遊戯にも力をつくして頂きたいのはその爲であります

佐藤武内兩君は 五中の生徒の中の唯一二の例といふべきであります 他の諸君も其考案の中に 若くは研究の中に 兩君のやうな若くは兩君以上の發明創作を成功しかけて居るかも知れぬ 併しながら諸君の是等の發明創作は決して一年や二年や五年や十年の近い年限内に發表せねばならぬといふことは決してありません 中學卒業後でもよい 大學卒業後でもよい おぢいさんになつてからでもよい 何年かゝつてもよいから 一生生徒でゐるつもりで 是非ほんとうの研究修業をして頂きたい 世間でチャホヤほめる學校の優等生や新聞記事の主人公の中えらい人もあるが 時には餘りねうちのない人もあるといふこ

とを私は多年の経験から知つて居ります

この様に考へると私のやうに學問の未熟なもの今迄に何等創作も發明もな
い人間でも今からの努力によりて死ぬ迄には若くは死んだ後の遺言を育てる
ことにより（若くは之を人から育て、貰ふことにより）何か一かどの創作が出
來ないとも限らないなどとこのはげ頭のおやぢさへまじめに一所懸命に考へ
て居るではありませんか

況んや年少にして前途に限りない希望を有して居る諸君が眼の前の成功や
名譽なんかをあてにせず一心不乱にそして心靜に學問の道に力を集めたなら
ば諸君の前途に必らず見事なる發明創作を實現することが出来るにきまつて
居るこの點是非々々この校長がアメリカの遠方から申送るこの言葉を記憶
して頂きたいものとくゞい様ではあるけれども長々と私の熱烈なる一片の希
望を書きました

こゝ迄書いて来て今朝私のこの胸は一ばいになりましたうれしいのか悲しいのか諸君とはなれて居る心細さのための感激か若くは私の前途の希望に動かさるゝ爲か何かは知らぬ感じに私の兩眼はうるんでベンの手許もわからなくなりました皆さんと遇うて今朝の私の念頭に浮べるこの一片の思を話したいものと遇ひたさの心がうれしさと一所になつて私の胸に湧き出でたからであります

學校からお送り下さつた新聞の其紙の端にも田邊先生のお手で赤い文字に學校の事情が手短く書いてありました校舎運動場下水板塀何もかもごしく其工事が進行して居るといふこと紫友會開拓館の工事も着々進行するといふこと其簡単な記事が私に多大の安心と希望とを與へましたかゝる忙はしきとき學校進展の多事なる場合すべてのことを皆さんにお願ひして外國に旅行して居る私の一身に思ひ及ぶときこの私といふものがどこまでも自愛奮勵

何なりともして皆さんの御盡力の一はしにだも酬いねばならぬと考へます

さはれこの時この春この時代といふことを考へて見ても東京府立第五中學校其物は武藏野の廣きの中に今ほんどうに生れつゝあるのである 紫友會其物が今創作に取りかゝられたところであるといふやうな一種の強烈な想像が私の胸に湧き出づるを禁じ得ないのであります

諸先生と生徒諸君と願はくば紫友會の前途の爲にもほんどうに御自愛を祈りたく

父兄母姉皆々様に對しても今朝こゝに改めて

紫友會に對する皆さまの御協力を仰ぐ次第でございます

などと書きつづけてこゝ迄参りましたとき微なる東京の一中學校ではあります 五中といひ紫友會といはるゝ一團體が日本民族の將來吾國の前途といふものに對する使命の偉大であるといふことに今更の如く想到せざるを得ま

せん。こゝに詳しく申述べる餘白と時間を有ちませんが、アメリカ合衆國と日本との關係、世界の表に立ちて、今後の國際的生活を創設して行く日本民族の將來といふものは、極めて困難であると同時に、多くの希望に満ちて居ると言はねばならぬと存じます。少き日本人にとりては、眞に生き甲斐のある今後の日本今後の世界であるといふことを、華府會議の結果からも痛切に感じます。

こゝに一言申述べねばならぬことは、あの新聞の記事にあつた「東京五中の天才教育方針」といふ言葉であります。東京五中は全人間的教養を標榜して居りますが、決して天才教育を標榜いたしません。五中の生徒の中に天才と言はるゝ人々の卵も多くあるであらうけれども、誰が果して天才であるかは、中學時代などによく決定されぬと思ひます。天才の卵が吾學校に在學して居るならば、その卵を美事に育て上げるのが私たちの任務であると思ひますけれども、誰が天才であるか、少しもきまつては居らぬ以上、「五中は天才を教ふるところ、五中は

天下の英才を教育するところである」などごかりにも考へてはならぬと思ひます。人各々其天分の長所がある以上、其天分を養ひ育て、行く前途には誰人も萬人のなし能はざるある創作をなし得るであらうと信ずるが故に、五中が創作家養成所であるといふことは言い得ると思ひます。この様な意義に於て所謂天才教育といふものも畢竟吾全人間的教養主義の一部であると言ひ得るならば、新聞記事のあの言葉も間違つて居らぬであらうか。兎にも角にも五中の生徒はどこまでも謙讓に無邪氣な純なる必を以て、中學生としてのまじめな勉強をして頂きたいといふこと、之が私の今朝申上げた趣意であります。

佐藤武内二君の新聞紙上の記事をよんで取急ぎ筆をとりました。何れ次のたよりを旅中から差出させう。

窓外に春雨がけふる様に降つて居ります。ハドソン河畔の丘陵に Willow trees の若目が淺緑りに色づき初めました。先日フィラデルフィアからの歸りにも

春雨の中に汽車の窓からの感想を其まゝ、無鐵砲な文句を詠じました 新體
詩とも散文ともつかず 自分ながら何の形式にもはまらぬものを其まゝ口ず
さんだのでありますが、こんな氣分を大膽に言葉につづるといふのがアメリ
カ氣分とでも申すべきでありませう

今日はこの紙はこれで悉きましたので筆を止むることにしました

Virginia
Virginiaの野に立ちて

伊藤寒水

糸より細き雨のけふるといひたいやうな

大陸の眞唯中に立ちて

私の命はこのヴァージンランドが吐き出すいぶきの中に

動もすれば

あの空とぶ鳥のかげと共に
吸ひ込まれようとして居る

二、

限りなくもうつろひ行く世の中に
今より後のあらゆるものをも

生ましむべき

自然の大なる力よ

あのハドソンの川べりに

今しも萌え出でんとする緑の草を敷いて

私は今人の心の

創造といふことを思ひめぐらして居る

三、

物質文明の榮華を超越して

あめつちの不朽なる藝術に思ひを致すとき

吾等のあこがれはあの古き殿堂の

アクロポリスのあたりをさ迷うて

グreek文明の古に

たまさかなる理想のかわきを

慰せんとして居るではないか

四、

アジアの小さい島の中に

咲きさかれる櫻の春をのみ

誇ることをやめよ

御身等の思を轉じて

いつかは

人間の使命に企て得べき

永劫の花園に一步を進めようではないか

五、

天地あめつちの間にかりそめの一旅客である

といふやうな

果敢ない足どりに

首をあげて太西洋の彼方

吾行く方に思をはせながら

私の心はあのかもめの群を追うて

幾度か古の歌人の心を慕ふ

六、

一片の清き心は

萬のものにも打ち勝ち得たる

汝ビューリクタン^ユの祖先よ

やるせない青春の胸に

一管の筆を抱いて

其處女航海に

約束の陸に志したるワシントンアーヴィング^グよ

七、

歐と米と二つの陸の間に

嘗ては仇なす波を浮べ

又かつてはなさけの糸の

うるはしき文化の綾を織り成し得たる

あはれこの水よ海よ

八、

なれはしもさすらひの胸に

人の世の遠き岸邊をあこがれながら

さすが

祖國を思ひ離れがたき

この流轉の男の心をのせて

今はた何處にか

其白波を打ちよせんとすることであらうぞ

大正十一年初春

東京府立第五中學校の

職員 皆々様

父兄母姉皆々様

生徒 皆々様

小使室 皆々様

其他辱知 皆々様

北米ニューイングランド
ブリマスの濱邊にて

伊藤 藤長 七

大正十一年三月十七日午後十時

左記の所へ移轉致しました

小石川區音羽町四丁目十二番地

伊藤長七

電話番号町九三五番

こゝはマッサチユースェツ州の主都ボストンを去ること東南に五十哩 其昔第十七世紀の初めの頃 あのビルグリムの一隊がメーフラワーの帆船を乗りつけた名高いプリマスの濱邊であります プリマス ロックと言はるゝ長さ一丈ばかりの岩 そこにあの英國から流れゝて来た 清教の徒が 其うるはしくも清き信仰の手に初めてメーフラワーの纜をつないだと言はれて居りますので 岩には1680といふ数字がおごそかに刻みつけられてあるのを讀むことが出来る

この岩のすぐ上にある小さなホテル 其名をプリマス ロック ハウスといふ建物の海に面せる一室で 私は今敬愛する皆様に宛てゝの書信を認めようとして居る

カーティンを上げて見れば 彼方の岬らしいところに唯一つ明滅の光が見えて居る 外圍夜の眞黒い海に 西北の風が可なり強く吹いて居ります 今暫く前何かは知らねども 遠く近く水鳥の聲らしい啼き聲がきこえて居つた外 今宵此

地にありては窓外のいづこにも自動車のうなりがきこえない　この物静な異國の海邊に　私は今久しぶりに故國のなつかしさをしんみりと思ひ味うて居るところであります

大正十年十一月十一日皆様とお別れして　東京驛を後に横濱の埠頭を乗り出してから　早や満四ヶ月餘り　其月廿七日にサンフランシスコに上陸してからの合計百十日間といふものが　私に取つてあわただしくも過ぎ去つて仕舞つたといふ感慨が湧き出でます　其間に　見たいもの面會したい人讀みたい書物研究したい事柄が無限に多かつたので　毎日毎夜私は唯時間の不足といふ感じにのみ追ひかけられて居りました　それにしても私がアメリカ合衆國に費した過去のこの四ヶ月を決して一場の夢の様であつたとは考へませぬ　少くとも私の様に貧弱なる過去の經歷を有せる人間に取りましてはこの四ヶ月間程内容充實の生活をいたしたことは今までに無いと　自分にうなづくことが出来ます

桑港に上陸後私の兩脚に初めて踏んだのは北米カリフォルニアの地風土のよろしきと天産物の極めて豊饒なる點に於て恐らく世界第一の名に負かぬと思はるゝカリフォルニアが其學術教育の方面に於ても近き將來に恐らく北米の中心地となるだらうと推想せらるゝ若くして新しきカリフォルニアそこから初めて私の旅行見學を合衆國の各地に偏からしめた（偏からしめたと申すのは少々申すぎかと思ひますが西部中部より東部を通じてといふ意味と御くみごりを願ひます）後私は今ニューイングランドの東北なる尖端に腰かけて居るこゝは英國からの殖民隊其清教徒のメーフラワーが初めて上陸した地點であると思ふにつけ不思議にも私の米國に於ける見學旅行が最も若く新しいカリフォルニアから初め最も古きプリマスを以て結末とする運命に支配されて居るを興味深く思ひます

實際私の學校參觀及其他の見學はボストンに於ける今日の見學研究並に今

夜このホテルに於ける感激の幾時間を以て切り上げとすることに定まつて居るのであります 其故は今宵一夜をすごした後私は急行ニューヨークに歸つて荷物をまとめ来る廿一日朝アックイタニア號で英國に向はんとして居るからであります

今回私の行程は斯の如くにして全然歴史的逆進の順序を取つたのであります が今から先もあのビルグナムと正反對に歐羅巴に向ひ更にローマの舊都希臘埃及の古代文明の跡を追はんとして居るところ ごと迄も逆進的に人類文化の行程を辿らんとして居るのではありませんか

さて何から書いてよいだらうか 去る二月以來皆々様に對しても家族の者に對しても 其他の如何なる方々に對しても 私は全然御無音であつたといふ私の失禮を第一におわびせねばならぬと思ひます 併し二月の初から三月十七日の

今日に至るまで 私は實に寸暇を惜みつゝ尤も重要な私の使命に向つて心血を傾けたる時期であつたといふことを御了承の上 御諒恕を願ひたいと存じます

二月四日ワシントンにコンファレンスの第六回公開會議が開かるゝ由を三日の午後には明にしましたので 私は其入場切符の件を電報で日本大使館の杉村金井兩君にお願ひした後 夜行で駆けつけましたが 大使館の方々の特別なる御好意により 火急の希望であつたに拘はらず會議傍聴の榮を得ました

華府會議中殊に多大の注目を集めし第六回の公會を以て其公會にあらはれし當日の光景 其談論決議の内容は 日本の國民が永久に忘れてならぬと思はるゝ甚深の有意義なる會議でありました 其日に於て私は米國々務卿ヒューズ氏 英國バルフォア氏の偉大なる演説を初め各國を代表せる多くの全權の意見發表を聞くことが出来たのを光榮と思つて居ります それ等の演説等について私

は今こゝに詳述して居る暇がありません。且其あらまは新聞紙上等でもすでに御承知のことと思ひますので多くを申す必要はありません。但し私の是非共こゝに述べたいと思ふ一事は私が當日の華府會議々場内で尤も沈痛に又尤も深刻に自分の念頭に次の條々を感じたといふことであります。

一、日本人は今後自分の國とこの民族の向上繁榮といふことに苦心する外どうしても世界人道の爲といふ國際的見地よりの理想を體得せねばならぬ

二、世界の表に立ちて美事なる國際的生活を進むるためには斯の國斯の國民をして眞のうるはしき獨立的精神自ら自己を信するだけの實力を著へさせねばならぬ

三、華府會議の結果については日本人としても其他の國民としても色々な批評不満はあること無理のないことと思ふ。併し日本國民は今回の

華府會議が生み出し得たる結果に對して、兎にも角にも中心の理解と感謝を有つ様でなくてはならぬ

四、思慮に本づける軍備縮少のために、吾政府及國民は誠意を傾けて努力する必要がある。併し軍備を縮少し常備軍を減じたりとも國民のすべてをして殊に若き日本男女をして吾民族固有の雄々しき精神奉公義勇の態度を失はしめぬ様今後特別の注意を用ふる必要がある

五、軍備縮少後今からは一層多くの力を文化政策に致すべきであると雖も一口に言うて居る。其言葉の内容は何であるかを眞面目に組織的に研究せねばならぬ

華府會議々場に於て私の頭に印せられた多大の感慨は、とても文字を以てうつし得べきでないが故に、之をお目にかゝり得べき節にゆづることゝいたします

さて華府會議も一先終局となりましたので 其一休みといふ好時機に 私は是非一度國務卿ヒューズ氏に面會いたしたきものと苦心しましたが 誰しも今日の處それはとてもだめだらう 何人も公務以外に今國務卿に面會出來ぬ程 國務卿は多忙であり 且長き會議のために疲勞衰弱も重ねて居らるゝからと 幣原大使が懇々言はれたのにも拘はらず 私は厚かましくも大使に懇請して特に御紹介を頂き 其官廳で國務卿ヒューズ氏に面會いたしました が 私が一教員としても華府會議の結果につき感謝の誠意を陳じたき旨を述べ 且日本の少年少女の認めし書面約四千通を 既に米國各地の少年少女に頒ちたる旨を語り出でました時 ヒューズ卿は更に握手をし直し 私の計劃努力が非常によい (Thank's very fine) といへんに認めてくれました

そこで即席にあつかましくも「願はくは閣下の御紹介を得て大統領閣下に拜顔の榮を得 小子の敬意を陳じ 且兩國少國民間の親善につき愚見を述ぶるを得

たいものであります」と申ましたところヒューズ氏は満面の温情を以て承諾 (All right) と語調もいど力強く早速秘書官に命じて白館に電話をかけさせ且其署名せる紹介状を小生に渡されました

大正十一年二月十一日日本の紀元節といふ思ひ出多き此日は私に取りて國務卿から大統領ハーディング氏への紹介状を渡された記念日であります

翌二月十二日は米國でエブラハムリンカーンを記念する日其日の午後一時十五分前といふに豫定通り大統領の白館に參り秘書官室にて指圖を待つこと十五分後自分はあの狀貌偉大に而かも温顔慈父の如きハーディング氏の前に立ちました 中心の誠意を披瀝して華府會議の招集並に其結果に對する小生の謝意を陳べたる後「今後は一個の微なる教育者としても亦少年子弟と共に最善をつくしてこの平和會議の幸福なる成果其もの育成に努力いたしたいと存じます」とのべ且日本米國双方の青少年女間に文書交換を推奨いたしたき旨

語り出でましたところ 大統領も非常に喜ばれ 小生が別を告げんとするを少し
質問があるから (I have some questions to ask you) とて再び小生を着席させ「日
本の教育家はあの六ヶしき文字を今後どうするおつもりか」「全體あなたはど
の位あの六ヶしき文字を暗記して居らるゝか」などと抜け目のないくだけた問
を出されました。そこで私は「日本に假字といふやさしい文字がありません。そ
れか若くはローマ字かを以て今後すべての日本語を書きあらはすやういたした
い」と私の所見を述べましたところ 大統領は「それは結構である支那人すら
すでにやさしい文字を工夫し 實用して居る時代でありますから」と このと
き私は豫め用意し行きし長さ一尺位の櫻花の寫真 (ワシントン府のチェリーダ
イクに満開の櫻それは日本よりタフト大統領に贈りしもの) の真中に雲に聳
ゆるワシントン記念塔の鮮なるを見せて居るものを出し「この寫真面は日米の
うるはしき心と心精神と精神の融和を見せて居りますので 華府に移植せられ

し櫻樹こそ實に光榮の極みであると思ひます 願はくはこの櫻花の傍に御一言を」と申しましたところ 大統領閣下はニコリと大きくうなづかれ直に筆を執つて「全米國民の大なる親と仰ぐこのワシントン大統領を思ひ出づる高塔の傍に咲きさかれる日本心のさくらこの一面の寫眞が示せる真情の如く兩國間の和親よ願はくば永久に變らざらんことを」と書いてくれました

よ 吾敬愛する 東京五中の父兄母姉各位 並に職員生徒各位 其他の關係者各位

私のやうな微なるものが皆さまの多大なる御親切と御獎勵を頂いて 祖國を出かけまして以來此行一ヶ年間 願はくば海外にありて 何等か皆さまの御知遇にむくいたきものと苦心いたしましたが多の方々の御同情御助勢の御かげにより 此日大統領ハーディング氏から上述の溫情を頂いたといふこと 私としては故國の知己各位に對する お土産が幸にして一つ出來たと 中心の感激に打

たれた次第でありました

白館を出てからラファエット公園を横ざるとき 實際私の兩眼には喜悅と感謝との熱い涙が一杯たまりました

私は其後尙數日間華府に滞在し 米國の議會 कांग्रेस の圖書館 米國政府の印刷局等を研究見學いたしながら つとめて各方面の名士訪問に力を致しました 前大統領 ローゼヴェルト 氏の令息 今の海軍次官 ローゼヴェルト 氏に面會した 氏の統率せる米國 ボーイスカウト のことを問答した外 政府の能率局長 ブラウン 氏には度々面會して 特に有益なる指導を得ました 尙青年團指導に權威をなせる リビングストン 氏 人格養成學校長 ロバートソン 女史 米國勞働同盟會々頭 ゴムバース 氏 副大統領 クリーッヂ 氏 カーネギー 研究所長等にも面會 それぞれ紀念とすべき指導の言とそれ々の自署の言葉を頂きました

他の各地に於ける 中學校に於けると同様華府の學校でも 日本少年少女の書

面を配布して大に歓迎されましたが、殊に華府の中央中學校、初等中學校等では幾度か教室にて生徒一同に對し演説もいたし、多くの知己をそれ等の中學校生徒中に作る事が出来ました。尙華府にある米國々民教育會事務所を訪問いたして、其會員たる許諾を得、二月廿四日からはシカゴ府に急行して五日間シカゴに開かれし其教育大會に出席いたし、色々の討議會、晚餐會等にも出ましたが、おかげ様で全米の教育家、知名の人々の演説意見を一場の中にてきゝ得たのは、いかにも運のよいことであつたと思ひます。

其會期中名高いグリー學校にも參觀にまゐり、ノースウエスタン大學や其近處のトライア タウンシップ中學校を參觀いたしました。この中學校の校長さんタップス氏 (Tappan) は非常にえらい人で、其學校は米國中の模範學校とも言はるゝ位であります。この學校で私が百人ばかりの生徒に話したとき、生徒一同は大に歓迎してくれ、生徒自製のリンカーンの像などをくれました。尙この學

校の月々の雑誌は今後引つづき東京五中に贈つてくれる筈に依頼いたして置きました

シカゴからデトロイド　ピッツバーグに行き名高いフラーズの自動車會社電氣機械製造會社を見た外　中學校大學並に小學校をたくさん參觀いたしました
デトロイドの公立學校は新しく出來た内容の尤も立派な學校で　其生徒はいかにも品がよく　而かも無邪氣で學問がよく出來るには眞に感服いたしました
日米兩國の少年少女文書交換につきこの學校で私が十五分ばかりの短い演説をしたとき　尋常四年の一少女がすぐに立つて私の計劃に賛成の意見を述べ
他の二三人もつづいて賛意を述べた　其態度など何とも言ひやうなく可愛らしく　勇ましく　其誠實な言葉をきながら　私はこのときこそほんとに日本から手紙を携へて來たといふ私の使命の偉大に思ひつきました
併し私が各地日米親善について演説した中　尤も力を込めて思ふ存分に述べ

得たのはフヒラデルフィアで 去る三月十日朝 其セントラル ハイスクール（中央中學校）で二千人の生徒の前に話したときと 其夜市の教會堂の晚餐會に招かれたとき 費府の名士連百餘人に對して 日米關係に對する愚見を陳じたときとであります 皆様が「又々伊藤の手前みそか」とお笑ひになるのを覺悟の上でこんなことを申しますのも 自分の一片の誠意が かくまでに外國人に理解せらるゝうれしさよと 小供心の様な胸一杯のよろこびが こぼれる程に湧き出でて居るためと 何とぞお許しを願ひます

去る十二日一度ニューヨーク大學に歸り 前からの約束通りホーン博士の倫理學教室で學生に一時間の演説をした後 十五日ボストンに參りました 昨日ウエルズリーの女子大學を參觀後 ウースターのクラーク大學に 心理學の大家私共の多年景仰して居つたジースタンリーホール先生を訪ひました 本日はボストン ハイスクールで手紙を配布したる後 圖書館 美術館 ハーバード大學

ボストン工業學校等を大急ぎに見物いたし更にコンコードにあの有名なエマ
ーソン先生の住家を訪ねた後 ロングフェローにゆかりのある舊宅にもまゐりま
した。そして午後五時八分ボストン發アメリカの北の方なるこゝらあたり
は汽車の窓から處々にまだ氷雪の堆きを眺めつゝたそがれの時刻に丁度この
メーフラワー號の遺跡に着きました。

旅館に着後獨りでブリマスロックの上に座つて見た後さみしく静なるこゝの
濱邊をそぞろあるきいたしました。誰やらの俳句に「春の寒さたどへばふき
の苦みかな」とある其ふきの苦みと言ひたいやうな春風にまだつめたい針を
つゝんで居る様ですけれど天地の柔い春が現にこのアメリカ大陸に到來した
といふ感じが坐ろに私の心身を動かして居る。

職員諸兄 保證人各位 並に生徒諸君

私はこのアメリカの國の長所と短所と、きれいなところと、きたないところと、色々見せつけられた。併しメーフラワーに乗つて千六百廿年の頃初めてこの大陸に漕ぎつけたあのビルグリムの人々程、まじめに純潔に、そして男は男らしく、女は女らしい人々が、果してどれ程世界の他の國の歴史をかざつて居るであらう。

私は今この手紙を書いて居る室に、一枚の立派なビルグリムの繪がかけられてある。それは上陸したばかりの老若男女が、温かに力強くもまごゐしながら、或者は大地に祈りのひざますきをいたし居るか、と見れば、ある者は波打際に立ちて沖の方遙に祖國に歸り行くなつかしい其メーフラワーの帆影を望み見て居るところであります。私のやうに動もすれば輕薄な心の持主となる人間も、靜かに、更けて行く旅館の一室に、窓外太西洋のさゞ波の音をきながら、一幅清教徒の心情と相對するとき、念頭に一片の清い心が、一粒の種となつて生れ出

てたやうな感じがする 見よ我室内 その圓面と反對の壁には所謂ニューイン
グランド式と言ひたい恰好のしとやかな貞淑なまことに上品な少女が雪の野
らをいそ／＼家路に急いで居る一幅の外まめ／＼しくも絲を紡いで居る若き
妻が傍に賢こげなる少年の讀書して居るのを指導して居る一幅の畫面をなつ
かしむことが出来るではありませんか 一夜のやごをかりた私にとりては是
等が後日に此上もない紀念の追想となるであらうと胸一杯に思ひ味うて居りま
すが 而かも更に他の一方には ジョージワシントンの立派な全身像が 私の
旅情を慰め顔に 而かも何物かの大きな教訓を與へて居るかの様にかゝつて居
る

かくて此地この海邊に一夜をすぐして 其昔新しきアメリカの生れ出でたる
眞精神に 自分が今恰かも觸るゝことが出来たと言ひたいやうなこの胸の奥を
思ふ存分に切り開いて 之を八千哩外にある故國の皆さまに語り傳へるすべが

なせに無いであらう 筆の力に托して紙面につゞつたこの文字 この手紙では
どうしても私のお話いたしたい心のたけを皆さまにお傳へ出来ない 其れのみ
を残念に思ひます

併しながら 山海萬里の遠きにありながらも 真情の傳達は 文字以外に 必ず
や皆さまの御厚意に 私の申上げたいと思ふところをお察しも下さることゝ安
心いたして居ります

第三學期も早や末に 學年末試験すでに終了 只今は入學試験でどんなにかお
忙しいことでありましょう 橘先生田邊先生加藤先生常田先生を初め諸先生父
兄の方々並に生徒諸君から最近に頂いた色々の御手紙により 學校學年末の仕
事 入學試験の準備・新校舎並に運動場等のこと 紫友會建築物のこと等 何もか
も日一日と美事にはかどつて居る御様子を承知いたすことが出来ました おか
げさまで私は東京五中のこと 故國の方面のことに何の氣がゝりもなく 世界の

一旅客であるといふ視察者の快潤な胸をひろげて 到る處に見學をいたして居るわけでありませう。かくて私の留守をお預り下さる皆さまに對しては相済みぬと存じながらも 偏にこの後十月迄のことをお願いいたす外はありません。こゝにこの紙上に於て重ねて職員諸兄の御協力を切望し 父兄母姉皆々様の御同情を仰ぎ、そして生徒諸君の御自愛御奮勵を祈る外ありません。門候小使 給仕 諸君も一層和合協力して働いて頂きたいものと重ねてお願いいたします。

禮儀デーのことなどについて 諸先生からも生徒諸君からも色々喜ぶべき御通信を頂きました。橋先生を初め諸先生の御熱誠が 私の不在中學校の内外に溢れて居るためと申しながら 生徒諸君がどこまでもすなほに自覺して 校風の維持發揚に力を致さるゝに對しては 私として満足此上もなく衷心感謝をいたします。手紙のことを前に私から願ひましたが 諸先生も生徒諸君も 其大切なお仕事御勉強を缺いてまで 私に手紙をお出し下さるなど、いふことのなから

んやう祈ります 私も約一ヶ月半位皆さまに御無沙汰の失禮をいたしました見
 學觀察といふ當面の大責任を首とした爲の私の態度から來たこととお察しを願
 ひたいと同時に皆さんの本務を一部なり割いて迄私に通信をお出し下さると
 いふやうなこと之なきやう繰り返し申上げたいと存じます

私がこの國で見たいと思ふものを見つくし會見したいと希望する人々に會
 見しつくすことが出来る筈もありませんが日本の少年少女から托されたあの
 やさしく尊い手紙の米國宛のすべては之を配布し終つたといふこと私にとつ
 ての大なる安慰であります 之で幾分手紙を書いた日本中の皆さんに對しての
 義務をはたし得たわけそこで私は明朝早くこの海邊を撮影しこの地の博物館
 などを見てから ポストン經由ニューヨークに歸り二日間を出立準備に費して
 後 ハドソンに浮べる舟にこの身を托する次第であります

今夜といふこの一夜が私にとつては非常に有意義であり私は寢臺の上に横

たはつてからも何分眠を成し難く更に起き上つてこの長文句を認めました

アメリカの大陸から筆をとつて申上げるのも多分之が最後となるであります

窓外の浪風は今すつかりをさまつて仕舞ひました。そして廿日ばかりの片われの月が今しも東の海からさし昇つて居る。昔の歌人のまねに申すわけではありませんが、實際萬里の客窓にこの様にして月に對する感慨はまことに禁じ難きものがあります。私は今夜といふ今夜こそこの手紙が書きたさに夜半すぎ迄筆をとつて居りますけれども毎日毎夜眠食には頗る注意してこの心身を大切に取扱つて居るのは實際のところであります。皆さまも時候の御さわりなき様返すべく御自愛なさるやう前途多望なる生徒諸君が別してこの點に御遺算なからんことを希望いたします。

二申

アメリカ大西洋岸のクラム貝は味のよいので有名であると私は昔リীগー

でよんだ記憶を思ひ出で 今夜この宿でクラム貝のスープを注文いたし
ニューイングランドで澤山とれるといふニシン(Herring)も注文してたべ
ましたが すてきに結構でした

もと／＼小さな旅館であります が 今夜は私以外宿泊者もまことに少く宿
屋の主人夫妻が親切に話してくれますので私は着米以來こんな静なる気分
に初めてなり得たと思ふ位であります すべて申分のない様なニューイン
グランド式の空氣の中で 米國から皆さまに宛ててのこの書面を認め得た
るをうれしく思ひます

次にワシントン府チエリーダイクに植ゑられた日本のさくらの心を詠じ
た私の歌を次に書きます 私のもどからすきなヨネ山の「詠兒島高德」の
歌になぞらへたものであります お笑草までに

「咲いて櫻はやまどの色よ

春潮思^ハ遙^クボトマツク河

人生何^レ處^ニ無^ク綠草^一

根ざす心は「あめりかへ」

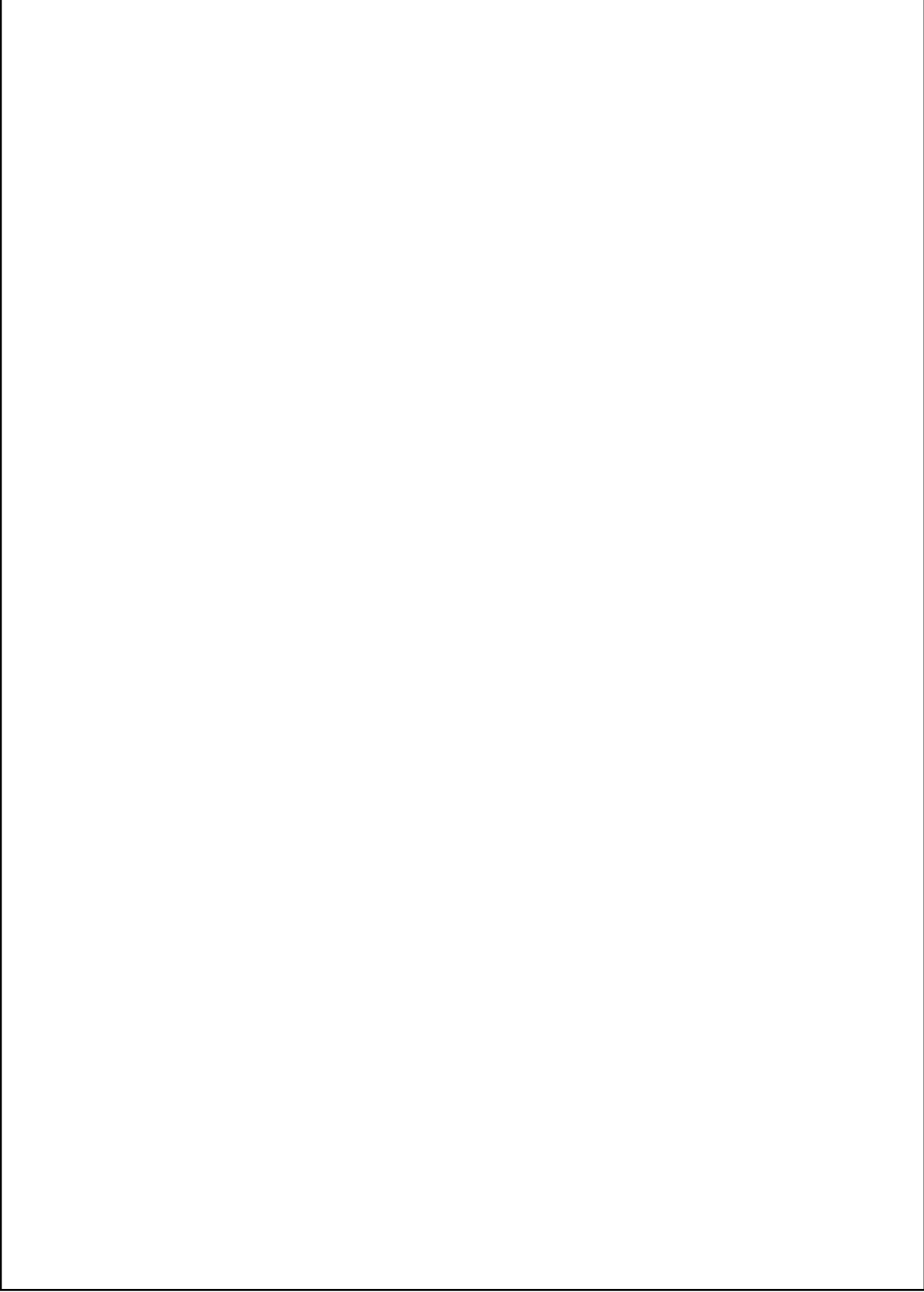
チエリーダイクのこの櫻もそろ／＼芽ぐみ初めた頃故國の春今如何と思
をばせて居ります カリフォルニヤに夥しいアモンドのうるはしい花のさ
かりが近づいたこのたよりが、きのふ加州から参りました あのアモンド
の花も見たい 太平洋の彼方なる日本の春が忍れる、そしてその春光の
ただよへる花かげに開かれし平和博覽會も見たいものである 佐藤武内兩
君の創作品及學校代表の出品をすら一度も見ない中に、其博覽會が閉ぢら
れるのは残念と思ひます

併しながら生徒諸君よ

春の花かげにうるはしくも陳列せられたる博覽會の出品を、心のどかにの

み見て居つてはいけません 陳列場に心を散りくさせるよりは諸君の
専心なる思考と努力を其讀書研究の上に潜めよ そして來るべき諸君の
前途にやがて生み出し得べき創作の源を 養はんことを是れつとめよ

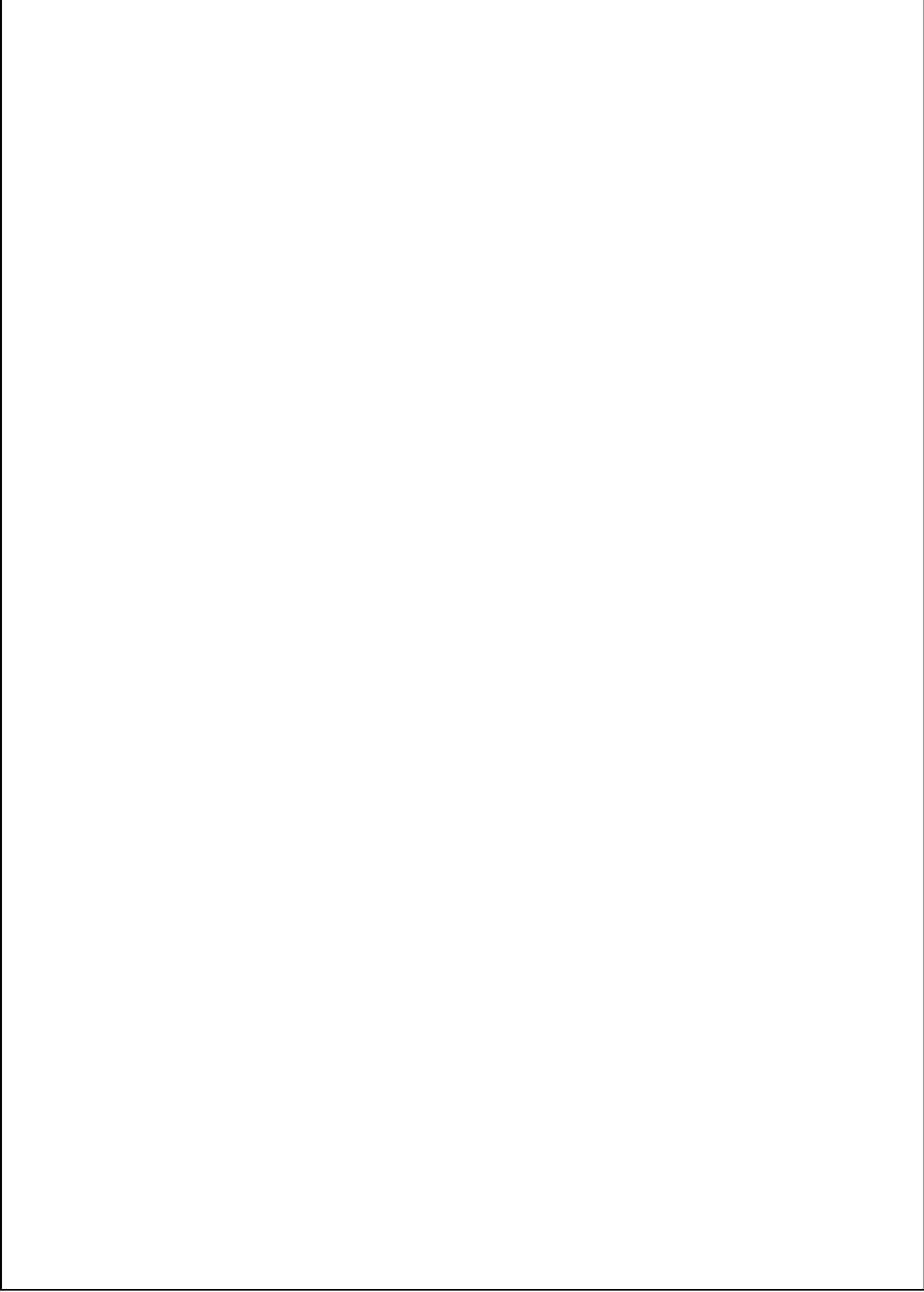
長
七



昭和二年二月紀元節

自治之國東京第五中

伊藤長七



へんとす今の大人等はさもあらばあれ少青年輩學窓に其心身の第一義修養を思ふもの
何が故に其心志を眼前の功名に跼踏せしめて入學試験の如きもののみに没頭せんとす
る

眼を亞細亞の大陸に放て

局面の新なる進展はそこに東亞の新文化使命を打ち建てねばならぬ時代に没入せる
この時この處

東京府立第五中學校の生徒も亦人の命令のみによりて生き他の監督の下にあらざれ
ば仕事をなす能はざるが如き意氣地なしとなり果てんか？そも／＼この國と民との將
來を如何にせんとする

爲すべきを自ら爲せ

學ぶべきものを自ら學べ

男の男らしき面目を立つる爲めに天下に率先して自ら治むる眞精神を發揮せよ

へんとす今の大人等はさもあらばあれ少青年輩學窓に其心身の第一義修養を思ふもの
何が故に其心志を眼前の功名に跼踏せしめて入學試験の如きものみに没頭せんとす
る

眼を亞細亞の大陸に放て

局面の新なる進展はここに東亞の新文化使命を打ち建てねばならぬ時代に没入せる
この時この處

東京府立第五中學校の生徒も亦人の命令のみによりて生き他の監督の下にあらざれ
ば仕事をなす能はざるが如き意氣地なしとなり果てんか？そも／＼この國と民との將
來を如何にせんとする

爲すべきを自ら爲せ

學ぶべきものを自ら學べ

男の男らしき面目を立つる爲めに天下に率先して自ら治むる眞精神を發揮せよ

天下を動かさんとするものは先づ自ら動かすんばあるべからず

Heaven Helps Those who Help Themselves.

働け

よく眠れ而して

心静に沈思冥想せよ

Thinking and Doing.

東京小石川の一角五中の一城廓を守りてそこに自治の一理想國を生まんことを希ひ
つゝ吾愛する紫友會並に紫星會々員諸子に對し特に昭和新時代の立志を促さんと欲す
餘白つきこゝに筆を廻く

昭和二年紀元節 紫友自治國建設前四日

伊藤長七

告

刻々に進展し行く現代支那の時局に注意せよ

亞細亞は亞細亞の亞細亞なりと絶叫し要求したる時代は既に過ぎたり亞細亞は世界の亞細亞なり而して同時に世界は亞細亞の世界なりといふ新なる自信に而かも謙慮なる吾等の心の奥の諍思黙禱に日本民族百年の計をなすべき機は正に熟せるにあらずや何事ぞ天下の青年學生眼前の成敗名利に跼踏して入學試験に應ずる努力にのみ其若き命の全幅を傾けんとすることや余は

入學試験に出陣する吾生徒諸子の十全なる成功を切に祈る然れども人格修養の根底を忘れ常識練磨情操涵養の本幹を度外視して現代世界の局面進展と日本民族運命の回轉機に際せる文化意識其物に没交渉なる青年學生の如きものは卒業後も其學業才識果して何の役に立つべきかを疑はざるを得ず

愛する生徒諸子！入學試験に出陣の準備に於ては必ず用意周到敢て或は人後に落つ

るなかれ

而かも男子四方の志を抱いて百年に生きんとすべき心願に於ては苟くも若き日本人の第二流に落つることあるべからず

この事を考へ居たる時昨日東京五中第五學年生徒、鐘口富雄、若山次郎、加賀美宗二、山田誠、澁口徹雄五君臺灣總督府立高商並に高等農林に入學を心願して志を帝國南關將來の産業に立てんとするをき、小生の喜び禁じ難きものあり臺灣に志を立つるは即支那に活躍し得べき素養を積まんが爲めなり臺灣一島に志を伸べんとするのみにあらずして雄心を南洋並に大陸に動かさんとするに外ならざればなり余は

五子の立志を壯なりとして本日こゝにこの感慨を叙し全校生徒諸子にそれに關する所懐を陳せんとす

五子の志はわが紫友會並に紫星會の志なり而して南に西に伸びんとすべき現代の活ける日本少年の志たるべきを信す

さきに上原千秋、宇敷清二君外數氏に志を立て、札幌大學豫科に入學せるとき小生は五中の健兒北門に活躍の第一歩すでに踏み出されたるを喜びたりしが今又南關の學府に五中少年の出陣するを見て滿心の喜悅禁じ難きものあり初老五十一歳にして伊藤寒水郎も亦諸君の志に追隨し今より更に雄心に鞭ち帝國圖南の第一線に一兵卒としての歩みを踏まんことを願ふ本日

御大葬を去る前二日降雨霏々として天意又吾等の志を勵まさんとするものゝ如し感激已む能はずしてこの一文に托し敢て平生の所懐を陳すもしそれ吾等が當初より期望するところの

創作之心

開拓之意氣

に至りては唯一片の至誠

お祈りのまことの力

に心の力と美とを生むにあるべきを信ずこれにつきて言はんとするところ多々今こ
こに悉す能はざるものあり(完)

昭和二年立春の翌

開拓の心

伊藤 寒水
長七

四

男の希望東天に

昇る朝日の不二の山

吾ふむ土に力ある

双つの脚をふみしめで

高鳴る血潮千載に

生きんとすべきこの胸に

若き誇をふ哉

ふるへく紫友會

六

さらば吾友手をとりて

學ばんかなや小石川

見よ武藏野の唯中に

つむや一もと紫の

昔ゆかしき花の色

學びの庭の朝夕は

つきせぬ世々の吾命

うたへく第五中

若き日本人に告ぐ

世界の局面に不注意なるべからず

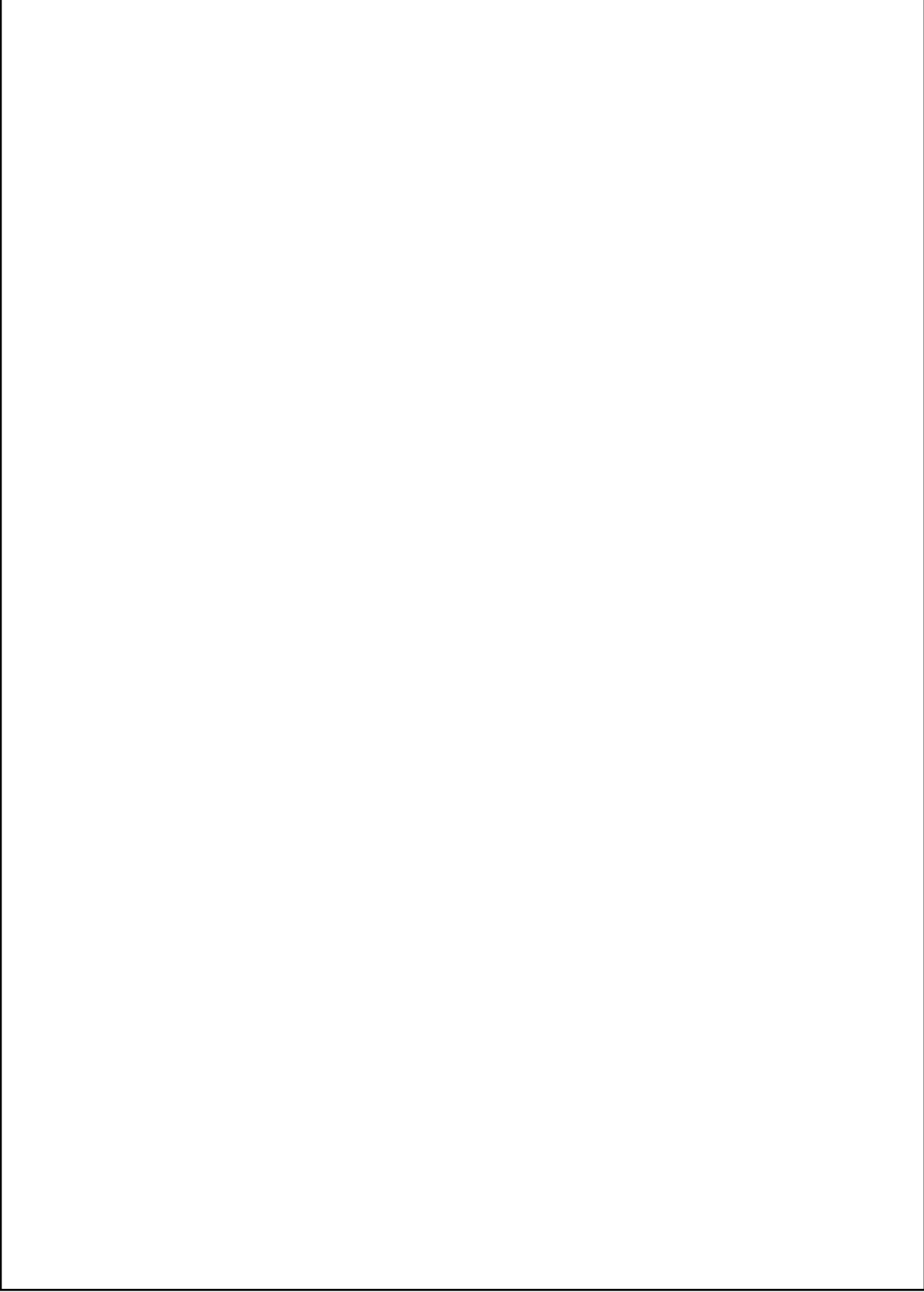
常に五大州の地圖を眺めよ 東亞刻下の進展は

明治三十七八年戰役若くは

日獨戰爭など其何れにもまされる大事變

精神的内界の回轉機なることを特に記憶せよ

昭和二年二月



昭和四年十二月三日

すこやかなる心身へ

伊坂長七

はしがき

すこやかなる心身へと自ら精進し、人の爲にもと祈る私の念願は「自然の母の懐に」と教へらるゝ達人の境地を慕ふこと。近頃殊に切なるものがあります。

動物體操はいかにもよく右の趣旨にかなへるものと私はふかく信じて居ります。而かもそれがいかにも分り易く、實演し易く、誰にでも、どこでも、屈托なしに楽しい氣分でやることが出来るといふ長所を有つて居りますので之を國民的に普及させたいとさへ思ひつきました、私一已として、は十餘年前から實行いたして居る外、近頃二三の機會にこれを發表したこともありませう。さきに妻を失ひました節御弔慰の御眞情を寄せられた方々に、この體操を御紹介申上げた微意から小冊子として頒つことと致し、尙内容の上に關係が密接であると思はるゝ他の近作二篇をも附け加へて、皆さまの御一讀を願ふことゝいたしました。

卷末には面はゆくも亡き人を思ひ出の數首を載せることゝいたせし私の愚を御憐みの上、三十一文字に練達のお方々からは別して御叱正を頂きたく存じます。

昭和四年十二月三日

長 七

目次

- 一、動物體操「熊鶴龜犬猿猫」……………一
 - 二、全人間的教養とは……………七
 - 三、山から出る文化……………二一
- 附、哀しみの歌の中より……………二九

動物體操 熊鶴亀犬猿猫

一

一口に體操と申せば、學校の科目で學ぶことのやうに考へる時代はすでに過ぎ去りました、只今では家庭體操とか、工場體操とかいふ名の下に、若くはラヂオ體操といふ名に於て、國民的共働の體操が年々に其芽を伸ばして居るのはまことに結構のことと思ひます。

ところが廣い意味から申しますと、大昔から吾國に行はれ居るお神樂も盆踊りも、武門の家庭で熱心に練磨した武藝も、是等はみな其時代々々に應じて發達した國民的若くは民衆的體操と申し得ると思ひます、そして歐米諸國民の間に行はるゝ田舎踊や、蠻人の各部落でも、萬衆がはめをはずして喜びおどるその舞踊は、何一つとして廣い意義の體操に入れられぬものはありません。

二

人間は萬物の靈長であるからその人間だけが組織的に思考をめぐらして體操といふものを教へた

り學んだりするなどと、苟くも人間独自の勝手な推定を下すべきではありません、林野を走る獣もその他の動物も、梢に遊ぶ鳴禽も、みなそれ／＼に踊つたり跳んだり、仲間と組みになつて歌つたりして居るその間に、生物としての自然體操を見出すことが出来ます。

これに着眼したのは仙人です、昔からの支那でいふ仙人とは志を得ずして山林に入りたる高士とか、大自然の懐に入つて風流の詩情をよせる達人もあつたらうし、又生來深山幽谷に育ちたるが故に、いつの間にも動物そのものを相手としての極端に簡素な生活をつづくること、例へばお伽話に出てくる金太郎の如きものもあつたでありませう。そしてそれ等の仙人等は、雲を吸ひ水を飲み、松の實をかみ、露草の根を味ふといふやうな單純化食料のために其命を延ばし得た事由もたしかにある、けれどもこれ等食物の關係ばかりではなく、山林幽谷、若くは自然の大原野で、動物の眞似をしながら、私のここに所謂動物體操をやつた爲め、物語りにも深山傳へられて居る様にすこやかなる心身と長壽を贏ち得ることになつたのであります。

この動物體操のことは大昔の仙人の書物にも書いてあるさうであります、近年日本人で四川省の奥に入つた人が、現に其動物體操をやつて居る仙人の仲間に出つたといふことを聞いて居ります。

三

この體操の值うちと申すべき一つは、號令の下で一齋に身體を動かす從來のあらゆる體操と相違して居るところにあります。即ち「今から熊をやります」「鶴をやります」「龜をやります」と言へば、運動する人々はいかに多數でも、各自自身は熊となり、鶴となり、龜となつたつもりで、からだを動かし、心を伸びやかに運轉するのであります、そして身軀は如何なる場合にも固くならぬやう、足の置き方なども自由に、唯背すぢを眞直に、晴れやかな氣分の持主となつてやればよいのです。にくく笑ひながらやるのが却て結構です、さて次にこの體操の一つくを簡單に説明いたしませう。

四

この動物體操の又の名を熊鶴龜犬猿猫くま かり 亀 犬 猿 猫と申します、六つの動物の動き方によつて、自分から動くのです。

熊は腰の躰のあたりを中心として、胸體を前後に、左右に傾け、若くは回轉するのでそれを一つ一つ順次に行ふのではなく、前後も、左右も、回轉も、傾けも取りまぜて誰でも、其體力に應ずる様に動かす、その時両手が自然にゆるる、それを大きく狐線を書いて前後、左右、上下に胸體と共に

動かすなどは尤も結構であります。(この運動によつて、腰の固くなるのをふせぎ、内臓を健かにして、腎臓系の病氣を豫防し得ること實に顯著であります。)

五

鶴は両手を左右に伸べ、水平よりも高くそれを上下に動かすこと鳥の翼に於ける如くしながら、同時に兩足一緒に、若くは互ひ違ひにとび上ることをくり返して、飛行機にでも乗つた様な又、鳥の心になつたやうに動くのです、そしてその要領で前方に躍進することも出来る、この躍進は私に於て太西洋上、毎朝私が一人でやつて居るのを面白がつて外人の追隨者が多くなり遂に二三十人で一所にこの鶴の躍進ダンスをやつたといふ愉快至極の追憶をも有つて居ります。そして彼等はそれをフライングダンスとかクレインダンスとか言つてするぶんもてはやしてくれました。快活に伸びやかに思ふ存分動いた後、終りには動作を順次ゆるやかに、呼吸を静平に、姿勢を調へて深呼吸の要領の後に手足を納める様に注意します。(これは少青年男女などに尤も適するよい運動です) 鶴は首を前後左右に曲げたり、そらしたり、回したりする、そしてそれも一、二、三……といふ様

なくぎりをつけず、運動数を制限せず、色々をとりまぜてやるのです、龜のやうに首をすつこめる代り、肩を上の前に後に昂げることにより肺尖部などによい影響を與へる運動をも是非加へるのがよいのです。(これを若い時から怠らずやりさへすれば、鬚溢血動脈硬化などを見事に豫防し得るといふ効能があります。)

六

犬は四つ這ひです、八疊の間を三回り位四つ這ひしただけで非常によい運動になります。屋外でやる時、若くは大勢一緒の時は、手を地面につけた右の手足を交互に、若くは一足跳びの要領で、兩手をば空中に動かすだけでも結構です。

猿は木登り、車井で水をくみ上げる動作の如く、又空中にとばせし紙鳶の糸を手繰りよせる動作の如く、但し兩足も交互に使ひながら猿の木のほりの要領を行ふのです。

猫は兩手できめこまかに顔のこまかい部分までをマツサージするのです、兩眼の周圍などもなでたり押したりすること、自衛術でもやるやうにいたします。鼻のまはりからおとがひにかけてこれをやる態度は、婦人のお化粧時になさる要領で、婦人は正しくお化粧することそれ自體が、よい運

動であるといふことを信じます。因てこの猫は時にお化粧體操ともいひます。

七

以上は毎日一回か二回、精々一度に七分か十分以内ですませるが適當です。疊の上でも、就寝前の床の上でも、屋外でも、旅行中の汽車中でも、汽船の甲板上でも、時には腰かけたままの姿勢でも、寝て居つても出来るので老若男女誰にでも呑みこみ易く、極めて平明簡易に行出来るのが特長であります。私は幼稚園の幼い人などに教ゆるときは鶴を雉子に代へて桃太郎體操、お伽體操などと申します。又目出度い意味を聯想させる席上に、若くは年長の方々にもおすすめる場合には、この體操を一口に鶴龜體操とよんで居ります。(四年五月二日)

全人間的教養とは（人間學の提唱）

一

我國にも外國にも、古往今來、教育に關する理論と意見は數限りもないほど御座います。私共が學校教育の見地から、また家庭教育社會教育の立場から、是等を悉く推考したり、批判することが出來やう筈はありません。それ等の教育學說多數の主義主張の中には、古今東西に亘りて人間の教化に偉大なる指導感化をのこしたるものがあります、又それ等教育の學理主義に貴い生涯を送りたる教育改良家、若しくは哲人思想家の心の跡が、千百世の後をも支配すべき力となりて、現に私共の胸に美しくも力ある感化を印して居るを認めます。

併しながら、孔夫子の道を究めんとするのに、論語其の他の經典を直讀直解することを忘れて、偏に訓詁記誦の末にまごつき居る末世の學徒を生み出したるが如く、又直指人心、萬有を洞觀する釋尊の本願を逸して、繁瑣なる外道の説議に囚はれ、徒に經文の口唱に心思を勞するさ迷へる佛徒

を輩出せしめたる如く、教育そのものに身を捧げ居る思想家教育家もまた、學としての教育、術としての教育教授に没頭し、大局を忘れ眼目を逸する憾の甚だ多きを現代到る處に見るを悲むものがあります。

二

大局を見逃すとは如何なる意味かと御尋ねが有ませう、それについて愚見を申します。日本の國民として昭和今後の世界に生きんとする若き男女には、どうしても系統的に、また、きめ細かな國際的教養を施さねばなりません、一口に國際的教養と申しますと、洋食の食べ方を器用に、外國語を手際よく口にし、氣の利いたハイカラ振りに身仕度するといふやうな、その種の軼をすることのやうに思ひ込む人々が少くないと思ひますが、これは大間違であります。洋食の食べ方も、身仕度も、外國語の運用も、國際的教養の大事な事には相違ありませんけれども、それは寧ろ第二第三のものでありまして、國際教養上第一に重要視すべきは

純真なる人類愛の心

正義人道に終始せんとする信念

に生きんとする心の姿を育てることあります。私は今こゝに、國際平和主義と國際對抗主義との兩者を較べて論述する餘白と時間を有するものでありません、率直に結論を申せば、國と國と相對立して、軍事のみならず、學問、産業各方面に競争の鎗をけづり居るのが私どもの眼前に見る世界の事實でありますけれども、それとあへこへに、國際聯盟の内容が年々に醇化せられ、國際協調の各種の備が創設せられ、國際善意デーなどのやさしい仕事が行る處に美しく舉行せられ、やがて不戰條約が列強の間に調印さるる氣運も生れ出でたといふ現實の事相を見逃す譯には参りません、即ち、渾圓球上今より後に戦争は斷じてなしなどとは何人も斷言し得ざる如く、世界列強各民族の間に、平和運動、人類愛の現はれが、年々その新なる姿を見せて居るといふこと、これ又何人も否定出來ぬところであります。

三

手近な處で、支那と日本の關係を考へましても、公義大道に立ちたる日本の支那に對する宣戰は至當であつたけれども、あの明治廿七八年戰役後、隣邦相助け相敬するといふ國際の通義を軽く見て、我國民が支那民族に至當なる敬愛を拂はなかつたといふことが、どれだけ東洋永遠の平和を果は

し、武士道に生きると自らを標榜する日本國民の面目をきつつけ、やがて私共の現代に見るやうな兩國間の遺憾なる姿を生み出したかといふことを、日本人の凡ては明かに悟つてもよい時代であります、封建の時代より明治にわたり、日本人の間に「負けるな勝て」皇國の爲に命を捨てよ」といふ奥底の深い力強い教育は出来て居つたけれども、佛のなさけ、神の愛と結びつく人間としての純情に、世界何れの國の人とも手を携へ、相親しみ、相共に仕事をするといふすなほな氣分の養成には缺くる處があつた、戰鬪力を失ひたる人をば、よしそれが敵であつても助けてやるといふ高義の心が、對外戦争に於て日本軍のうちに屢々現はれて居るのは事實であります、これは弱を助け強を挫くといふ如何にも氣前のよい、所謂男伊達、武士道精神の現はれと言ふべく、それが日本人の譽を世界に輝かしたことを嬉しく思ひますけれども、思慮あり系統ある國際的教養が出来て居りませんから、戦時平時を通じての世界に生きる我國民の姿は、多くの場合に於て、如何にもみすほらしく、唯戦好きであるやうな、國家的利己主義を露骨に振り廻す國民であるかのやうな、又個人としては、だんまりの氣の知れぬ交際し悪い國民であるかのやう、つまらぬ疑念や輕蔑を受けて國家民族の前途にも不條理にして遺憾なる結果を生んだことが幾度であつたか、これは日本人の團體とし

でも、個人としても、胸にあざやかなる記憶を印し居るところであるといふこと、これが明治より昭和にわたれる日本國民の世界的位置ではなかつたでせうか、外交然り、國際的産業然り、殖民移民の計畫また然り、世界に處する日本國民の教育學術方面もまた、そのやうな氣分の間に過して来たものでないか、誰が之を明言することが出来ませう。

四

私達は、初等教育から中等教育の時代に於て、若き男女を今後、正しく國際的に教養し、何とかして彼等の先輩たる日本國民が招きし不面目と失敗とを彼等には繰り返さしめたくないのであります。日本の國體は萬國に冠絶し居ること申すまでもありませんが、歴史に於て無暗に日本ばかりよい國であるなど、教へぬやう、また地理に於てわざと日本の氣候風土が世界に冠たりといふやうな獨斷を言はぬやう、殊に海を隔てゝ相隣りせる米、支、露などを頭からだいなしに感くいふやうな失態なからんことを切望します。場合によつては、今後の日本人たるものは誰でも、或は籍を外國に移して生活することがあると考へねばならぬ、其外或は外國人と資本を合せて仕事をすること、或は外國の學校のお世話になつて學問することなど、其他學問、事業、旅行等のあらゆる場合

を考ふる時、私共誰でも生活そのものが已に國際的になつて居るといふことを、是非眞味に、若き日本人に呑み込ませたいものであります、我が産業の行詰りを救ふ道も、人口問題の解決も、我國民の心の鏡に今や投げかけられたる暗影を拭ふ道も、上述の如く若き人々を國際的に仕立てるといふことがその主眼の一つであると私は中心より考へて居ります、人間らしき生活をなさしめる重要な一要素、即ち全人間的教養の一眼目として私が國際的教養を高唱するはその爲であります。

五

今の日本人が、學校教育上にも、家庭教育にありても、教養といふ大切な意義の眼目を逸すとは何を意味するか、私は今それにつき述べやうと思ふ。

教育とは所詮人の子を人たらしむるやうにと苦心することである、少き者が生れながらに抱いて居る天分を其まゝ傷つけぬやう伸び／＼と長大せしむる外、その心身の發達伸展のため、あらゆるよき條件を與へてやらうといふ努力である。

物心素と一如、精神と肉體とは一體であるこの心と體と一つに融合せる人の子を、全一の人間として取扱ふところに教化の眼目が存するといふことをいつの間にもやら忘れ果てた教育上の事實が、

なぜこのやうに多いであらうとあやしむ人すら少くなつたのが現代である、何が故にこれをいふか。

何々學校卒業生といふ肩書、何々大學出身者としての特權を狙ふを以て第一義となす誤り、尊い心の始末を忘れて、只運動競技にのみ狂奔せしむる指導の誤り、若くは尊い肉體の健康を廢外にして、偏に文書上の記誦に没頭する學習態度の誤り、若くはまた現世の功名富貴を目がけて少年時代より月給にありつかんことをのみ苦衷せしむる教養の誤り、是等は皆純眞なる教化の精神を逸して、全一的人間教養の眼目を忘れたものであります。

更に他の言葉をも以て言へば、教へらるゝ若人のその天分を發揮せしめ、生れながらの使命に生きるやうにと指導するを二の次ぎにして、無暗に傳統の生活に追隨せしめんとする。少年男女自らをして、よく考へよく究めたる後の力を内界から發揮せしむるやうにと努むるでなく、前人のなせしところを眞似させやうと指導するに近い、先輩の營みたる境の内に行きつ戻りつして、我が父祖の、我が師長の所作から恵みを索めんとあせりつゝ、自らの創意に物を作らんとする氣込みが貧弱である、學校の教室に教へられたることをそのまま繰返す忠實さに於て秀才の名を冠せらるゝ頭腦はあれど、學校外の生ける現代の社會に、若くは動植萬有の自然界に、學問研究の豐なる資源を求め

やうとする識見などいつの間にやら銷磨しつくして居るといふやうな、極めて偏りたる教養に、心身一體のこの全一なる人間的眞價を消費するのが現代の教育であるとしたならば、國家民人の前途のため如何にも憂慮痛嘆すべきである。而して日本現下の教育が、以上列記のやうな痛弊の甚だしきに陥つて居るといふことを、識者の眼に果して否定することが出来ませうか。

六

以上の如く申述べただけの材料で、私たちは早急に全一的人間教養の結論に到達するは輕卒の如くである。併し前にも申したる如く、私は現下の日本に於ても、寧ろ教育の學理方法の討究が無用な點にまで繁瑣に陥つて居ると認むるものであります。之を例せば、眞に有効なる研究調査は教育界の實地に容れられざること、彼のメンタルテスト智能測定の組織的考察が、我が教育界の眞實なる研究題目となり得ざるが如くである。然るに他の一方にありては、餘り役にも立たず、どうせ普及實施には不適當なるやうな研究調査が、所在にその威勢を張ることなども少くない。

都會の某々學校に於ける教授振りが、そのまゝ無考察に田園農村に傳へらるゝこと、若くは何れも式、何々法といふやうな教育教授が、鶴呑みに宣傳せられて、一時的の花を日本教育界の都鄙に咲

かしむるといふことはあるけれども、地味に底力のある研究體驗に立脚して、教育の神聖なる指導原理、國民性の如實と結びつく眞の教育研究は、その發達が如何にも寂莫であるのを憾とする。

何故とならば、試に現下日本教育界の重要な問題を數へて御覽なさい、義務教育延長即時斷行といふやうな、言葉の上の景氣よい、そして日本國民大多數農村の實情にあてはまらぬ論議が、何といふ空景氣で唱道せられたことであらう、そしてその唱道宣傳の果てが、主張に對する熱も自信も貧弱であつたといふことを現實に示して居る。所謂入學試験問題は撤廢すべきものなりと、大旗を掲げて、大多數の勢に理も非もなく教育界を顛倒しやうと動いたあの數年前の事實が、文政當局からは中等學校入學考査法改訂案となつて現はれた、而もそれが入學試験そのものを眞味に考察研究して居つた人々の意見を無視したるものなりし故、今日となつては學校教育上のかゝる適切なる問題に關して、當局と學校とは、未解決の氣のつまつた状態に投げ出された形になつて居るのが事實である。

七

中學教育改善案などにつきても、其眼目たる「一種二種の區別を置くの可否如何」につき、日本

代表の帝國教育會調査會、帝都教育會學制調査會、若溪會學制調査會など、何れも大多數を以て之を否と決議せるに拘はらず、文部省内の吏僚とその省が依歸したる少數の人々にて、「二種に區別すること可なり」と決議せし語詢案は、今常に文政審議會にて審議中である。中學校教育の内容に關する對時代的の改善を施さんとする轉機に當り、かゝる問題を全國中等教育家の眞只中に投げ出して、その主張體驗を集めんとする熱誠もなく、又帝國教育會等の諸團體が眞面目に發表したる調査案にも眼をくれず、少數の委員若くは審議會員にて、ゴツゴツ教育界の中堅的内容をきめて仕舞はうとする當局も當局、だまつてきめさせて置く教育界の幹部も幹部であると思ふ、是等は、唱代の教育正に全盛なりと表から見らるゝ日本教育界の中味が、如何に覺束ないものであるかを物語つて居る事實の一二例に過ぎない。そして眼にあまる多數の學校と大多數の學校生徒卒業生を有する日本の教育界が、その全一的人間教養に於てその成績如何にも貧弱である事由を説明するものともいふべきである、其の他初等教育と中等教育との關係、中等教育と、より以上の學校との關係、中等教育をして眞に中堅國民の養成所たる振れ込みに似つかはしき内容を有たしむること、未解決のままいつまでも捨て置かれたる高等學校と七年制並に中學校との關係を明快ならしむること、それ等に

於て、日本の教育界に局面一變の曙光を仰ぎ得るでなくば、私のこゝに所謂全一的教養は、一學校として、個人としても、少からず施し悪くなる、そして多數教育者の眞剣なる努力も、眞の教育的意義から考へて、常にその影が薄くされることを遺憾とするものである。

八

述べやうと思へば、この題目について、私は更に澤山の論議をも、例證をも引き出すことになりまされども、此小冊子の餘白はこれを許しません、そこで上來陳述しました中に隠見せる所謂全一的教養の眼目を、お分り易く簡約して次に併べやうと思ひます、勿論こゝには生徒を指導する學校教育の立場から、御家庭の方々と打合せをいたすといふ限られたる場面に於ける全一的人間教養の中味を述ぶるに止めて置きます。

一、健康なる身體と美しく力強き心の持主とならしむるやう、心身一體の教養主義から生徒を指導すること。

一、學校に於ける諸學科について實力を充實せしめることは申すまでもなく大切であるけれども、自ら信じて正しきを行ふ男の節操と、人に接してやさしく親切であるといふ美しき情愛

の教養は學科の學習より遙に重要である」ことを特に呑み込ませたい。

一、勇敢にして勝を好み、不屈の精神を以て其の志を貫くといふ勇らしき態度は、物やさしく品をよく、禮儀正しくするといふ少青年の生活と、少しも撞着せざる所以をよく／＼生徒に體得せしむること。

一、自分の心身を完成して、しほらしき内省の態度に自己の眞價を進むることを第一義とするが故に、立派なる肩書、よい月給など、世間的にきらびやかな功名富貴を成るだけ念慮にかけぬ眞面目な修業者となるやう指導すること、そして人のつくりたる物を消費する以上に、自ら何物かを創意し、製作することを多からしむる生活の方が遙に人間的であるといふ意識を、若き時代からよく教へ込むこと、そして生徒等のその創作意識が、將來我國の産業並に經濟生活にも少からざる意義を發揮せしむるやう、少き學生の自重を促すこと。

一、御頭に立ちては衆生の恩をおもひ、神社佛閣を拜しては靜思默禱の純一なる心を寄せ、家庭に入りては父母長上に孝順に、かよはき者をいつくしむやう、敬虔感謝の至情を涵養すること、此點特に家庭と學校との遺憾なき協力を實現したきこと。

一、自己の家族の爲に、我が學級學校の爲に、社會の爲に、國家民族の爲に、更に人類愛の爲にと
 いふやうな奉仕の心、團體精神のしほらしさを教養することは大切なれど、それ等團體奉仕
 の眞面目なる人格的基礎は、各人自己の眞面目なる内省的修養にあることを次第々々に吞込
 ますやう指導すること、即ち一日のうち一度なりとも靜觀の境地に思をひそめ、若くは無心
 なる黙禱の費い心眼を聞くといふやうな眞劍味を、年少なる學生時代からも養ひ置くこと、
 簡言すれば、よく考へてよく實行する人ならん様修業を積ましむること、これは往々にし
 て眞の宗教的境地に進むこともある、また所謂宗教的といふまでには至らずとも、純一なる
 態度に心境を淨うする修養の本幹にふれることが出来る。

九

この全一的人間教養の主張から、私は中等學校以上に一學科として、是非人間學といふものを置
 くべきであると提唱します、心と體と離れて居らぬのに、學校では生理學を教へて心理學を教へぬ
 といふやうな點が今までの大なる誤りと思ひます、現に私は、東京府立第五中學校の補習科に人間
 學といふ一科を置き、そこにて法制經濟に關する生活に適切なる智識、心理、生理、性に關する一

體としての常識、宗教觀の一斑等について適切簡約なる教養を施して居ります。そしてこの人間學といふ名稱が内含する意義と相俟つて、其の全一的人間教養が、一歩々々、日本の學校並に家庭教育の中に、新しき生命を生み出さしむるものとならんやう、中心の念願をこめてこの一文に筆を擱くことといたします。

(昭和四年六月一日)

山から出る文化

一

先頃東京日日紙上で秋の山にあこがれる石川欽一君の文を面白くよみました。少い時から上州の山々に親しみ、信濃の高原、日本アルプスの情態を心から味はうて居る石川君でなくてはと思はるゝ中味がその文字の間にもじみ出てるをうれしく思ふ。

學校を初め諸官衛會社等に關係ある人々が、一年中特定に與へらるゝ休みは夏においてである、そこで平原に勤務し、大都會に動きをるものが、この夏休みを利用して、或は個人的に、或は家族その他の團體をなして、海に山に旅行を企て、生活轉換の場面を高原地方に求むることになつてゐる。かくて、近來夏期の山岳旅行家が激増したといふこと、國民の風尚としても喜ぶべである。

二

ところが、高原の情趣、山岳の眞價は、夏においてのみあらはるゝものでない。私も石川君と同様一年四季の中では秋の山が一番好きである、ひがんで過ぎの頃、海拔二三千尺あたりの高原に亂開せる秋草の中をたどるとき、十月半過ぎに尾花のそよぎが目もはるかに連れる裸野をわけあるく時、その豊にしてしかも情趣纏綿たる眺め、それはとても夏草の野の及ぶところでない。連峰の頂はずでに新装の白いヴェールを披り居るを仰ぎながら、霜に染みし山々谷々の鮮かな秋色をめづるとき、鮮紅と淡紅と、黄と、橙と、茶と、銀鼠とクリームとそれ等の大きな錦が天地の心に織り出されたと見る外はない美しさを、澄み切つた大氣をすかして眺むるとき、麓の里に散點せる柿の木はどれもが赤珊瑚を聯ねたかの様、どこまでもつよいてゐる稻の穂波が豊であるのに對して、さうはしき吾國土よ、山岳よ」といふ詠嘆が覺えず胸の奥から流れ出る。

道すがら落葉を拾ふ、藪かけに濃い紫の野葡萄をあさるなど、秋の山登りには心のまぎれを寄せることが中々多いのみならず、どこまでも清い空氣と水と、その真確中に没入することにねうちがある。

三

このやうに秋の山は實によいけれども、初冬の山と嚴冬のそれと、早春の光を浴びてゐる山と、むら消え残る雪を頂きながら、麓の方はいちやく紅花綠草に裝はるゝ晩春の山と、山の姿態高原の風趣は、畢竟山住みの身に四時を通じてそのきはどく推移するところを山の懐から見るのでなくては、ほんたうに山を理解し山を味はふ域に達せるものといひ得ない。

常節の山を愛好する苦勞人でも、畢竟都會から山に入る氣のきいた山登りに過ぎない、況んや時代の流行を追ひて立派な七つ道具を背負ひながら、登山鐵道に身を託する都會人の數々、それ等が如何に山好きだといつても、高原にあこがると唱へても、そのすべてが都會の文明を山に持ち込む人々たちである、アルペンシュトゥック、リュックザックに氣のきいた登山服のいでたち、ぶどう酒、サイダーに罐詰に、何といふても都會生活そのものの山岳入りと申すべき事相を賑々しく展開して、一代の人心を引きつけてゐるのが、現代の登山熱である。

四

それも百人中九十五人までが、登山といへば夏期に限るものと思ひ定めてゐるので、秋から冬、春にかけてしつとりと落ちついた山の姿、季節々々のきめこまかな、同時に多様多趣味なる變化推移

を見せてゐる山のすべてを知らないでゐる人ばかりというても間違ひない、數多い登山家の中に、秋の山だけの眞價を認めてゐる石川君の如き人すらまことに少いと考へるとき、山々の心算は自分等の全體を知つてくれる人の少いのを心細く思うてゐることであらう。夏期においてのみならず、秋の山の姿態と情景に眞の理解がある登山家の來ることを、山はさぞ待ちこがれて居ることであらう、併しわれ等の心算かに考察せねばならぬ一問題がそこに横たはつて居る。夏に、秋に、或は春に、冬に、都會人が山に入つてその心身を養ふと同時に、山の空氣、山の動植物、山の眺望、山の生産、山の人文が與ふるところの感化を土産として都會に歸つて來る、健康なる身體、落ちついた心と共に、幾分なりとも朴素純眞なる山の氣分を、流動蕪雜の弊になやんで居る都會に入れることによりて、登山愛好家は都會文明に貢獻するところがあるといひ得る、併し、遺憾ながらそれは多量の登山家が、年々無思慮に、輕薄に、山に持ち込む都會文化に比べて極めて弱少なものといはねばならぬ。

五

現代の都會人に薦じて飲ませたいものは「山の心」である。それよりもむしろ引きしまれる秋の

山の気分、更に沈潜の姿態に奥深い心の力を示して居る冬の山、百物清新の天地の生氣をそのまゝ割つて見せたやうな若い力の漲れる春の山、それ等の間から流れ出つる強さ、美しさと奥深さを、今の都會に流入せしめて、その爛熟と行き詰りを洗ひ清むるやうにせねばならぬ。そのためには、都會に生活する身として、夏に秋に、一回一回山に出掛けてくるといふだけではまだ、大いに不足である、山に起き臥しをつゞけて、行雲流水に身を託する仙人にはうつかりなり得るわけでないけれども、春夏秋冬を通じて山の生活に沈潜しつゝ、或ときはたゞ一途に山を拜み、山にあこがれ、また或ときは科學的分解の理念に山を研究し、山について考察するといふやうに、そしてまた或ときは山に入りながら山を忘れ、渾然山と一體になることも出来るといふやうな人が段々多く出ればよい。

六

モーゼの十戒はシナイの山頂においてせられ、釋尊が衆生濟度の金輪を立てられたとき、その精進修養のためには雪山の奥に身をよせられた、米國の名高いサマースクールも、日本の夏期大學も、その内容の見るべきものは、海拔の高い高原の湖畔、若くは山嶺の靈境に設備されてゐること、例へば弘法傳教の兩大師が、布教講學の殿堂を比叡高野の山に設けたと同じ趣意に出で、居

る。

人間の文化は、例へば水の如く低きへくと流れながら、展開旺盛、大船を浮べ海洋をたゞへんとする方向を選ぶものの如くである。そこで現代の文化が、大平原の中央に、河海のほとりにその隆昌を見せて大衆の心を引き寄せてゐる事實は、大勢順應の已むなき流れの姿といはねばならぬ、併しながら、文化の行きつまり、人間生活の傍顧墮落も、また、この大勢順應の流れに原づくといふことを見逃してはならぬ。これを救ひ、ここれを清めんには、山からの滾々たる水を常に平原に流れさせねばならぬ。山といふものゝ感化をその山自體から送り出させる努力によりて、人間文明の純化を企てるといふことに、吾等は新なる志を立てねばならぬ時代が到来した。

七

十餘年前、上野の文展に朝倉さんが誰かの作で「山から出た男」といふ等身の彫刻が陳列された。其無骨なからだ、朴素そのものゝやうな姿態と表情の間にも、兩眼にあらはるゝ力強く純真なる氣分に、私は限りなく引きつけられたことを思ひ出す、ロンドンの議院の前に、ピットやヂスレリーや、グラッドストーンやソースベリー卿や、いはゆる英國魂の表現といひたい典雅なる姿の大政

治家が銅像として列せられ居る一方に、「野人クロムウエルよ」と呼びかけたいやうなあの田舎出の議員の姿そつくりの像に對したとき、私はありし日の面貌をそのまゝに刻んだ英國人に敬意を表すると同時に、日本の政界にも教育界にも覚悟のまゝなる、田舎出のあのクロムウエルのやうな、朴實剛健にして、所信をつらぬくことに勇敢なる「山から出た男」をほしいと思つた、私はクロムウエルのなしたすべてに賛するものではない、併し純なる心の力を發露して、熱情の遊りに因習の情弊を打開し得る人を要望する今の日本において、坐ろあの田舎議員のクロムウエルを思ふ。

八

石川君のやうに明徹率直なる心の持主は、山に入つて山男の氣分にびつたり合致することが出来るので、山小屋のあるじと見立てても高原の農村の若主人と見立てても、ふさはしく無いことはない、それ程の親みと因縁を山に有つて居る人でもつまりは都會より山に慕ひ集る登山家の一人である、唯多衆登山家中に卓越してよく秋における山の清趣を解し得るといふ様な洗練が出来て居るといふだけのことである。

繰り返して言ふ日本現代の文化に最も缺くところは朴素にして純真なる山の感化そのものであ

る。都會の行進曲を山に入れるのもわるいことではないけれど、今後それ以上に山岳行進曲の澄み切つた聲を山岳から都會の街頭に流れさせたい、一時的に山に入つて之を味はふ御利口連は、すでに／＼有りあまつて居る、山に座して思ひを潜め、高原の研究所に試験管をとり、創作のページに千古の思索を寄せんとする様な科學者、作家、經世愛民の志士、發明家、豫言者が、山それ自體にはぐまれし文化を抱いて、一人でも多く平原に、都會に進出せんことを待ち望む次第である。

九

自由はドイツの山林より生れしとか、けれども、山林に芽生え、高原に伸びて、山おろしのすが／＼しい風に純化せらるゝものはたゞに人心の奥に培はるべき自由のみではない、現下の日本において民心の根底に思をひそめつゝ、いはゆる思想善導の要諦に力を致さんとするものは、たゞ總動員といふ様な鳴りもの入りの方面のみで満足することなく、教化百年の源を思つて、すべからく一人々々の心頭に内省の曙を喚びさますべきである。そしてこの曙の九は山からさして來るといふことに心付かねばならぬと思ふ。

(四年九月一日)

哀しみの歌の中より

ありし日の汝が平すさびの井戸ばたの
赤きかぶらは太りしものを

うら庭にこほれしたねの朝顔の
双葉なでつつ亡き人を思ふ

いたいけの吾子年十二ひとりして
かみゆふもあはれ母に別れて

その上●妻を迎へし日を思ひいでて二首

なれを迎ふ心ときめく夏の朝
ばらの赤きをあはれとぞ見し

池水にうつる眞紅のばらの花
その一輪をなれはかざしき

廿五年前

一人子を負ひついできつ二人して
信濃の山をむかし越えにき

千駄ヶ谷初の世帯の水わざに
若きなむぢはしほらしかりき

妻烟の小みちをわけて乳子だきて
われも歸りを迎へし妻はも

ある年は芳野の花に加茂川に
茅渚の浦わになれと遊びき

とつ國に送りこしたるなが文の
ふかき情をいつか忘れむ

ロンドンのやどに目ざめし枕邊の
讀みなれし文字は汝が筆なりし

アマゾンの奥に旅せしわが夫を
おもひつゝ、汝は祈りけん

たよりなき夫の旅路は幾千里
なが小さき胸をいかにか痛めし

なが夫は遠き旅路をかへり来て
かへらぬ旅になれをしぞ送る

銀婚の祝をいかにあけなんと
語りし宵を思ひぞいづる

恩愛の過ぐればはやき年月よ
なれと結びて二十六年

いとせめて慰め得るはことし春
歌舞伎の宵に汝をつれしこと

青竹のすぐなる心まけぬ氣に
あらそひし妻今は慰しき

入棺の前

口もとに目もとに頬のふくらみに
生けるがごとし別れともなき

妻病兒のもとにゆく吾も亦家に病めり

いそ／＼と病兒のそばに歸りゆきし
うしろ姿よとはに別れて

十六の男の子も病めは乳のみ子と
變らじものと妻は急ぎし

夜を徹していとし子をうとりし妻ついに起たず

高熱のおそひ來にけむその宵も
つめたき床に妻はいねけん

吾夫よいとしき子等よさきくあれと
言ひも得ざりしあはれ吾妻

亡兒二人のかたへに妻を葬る

とこしへに眠る二人のいとし子を
よびさましつゝ母さびすらむ

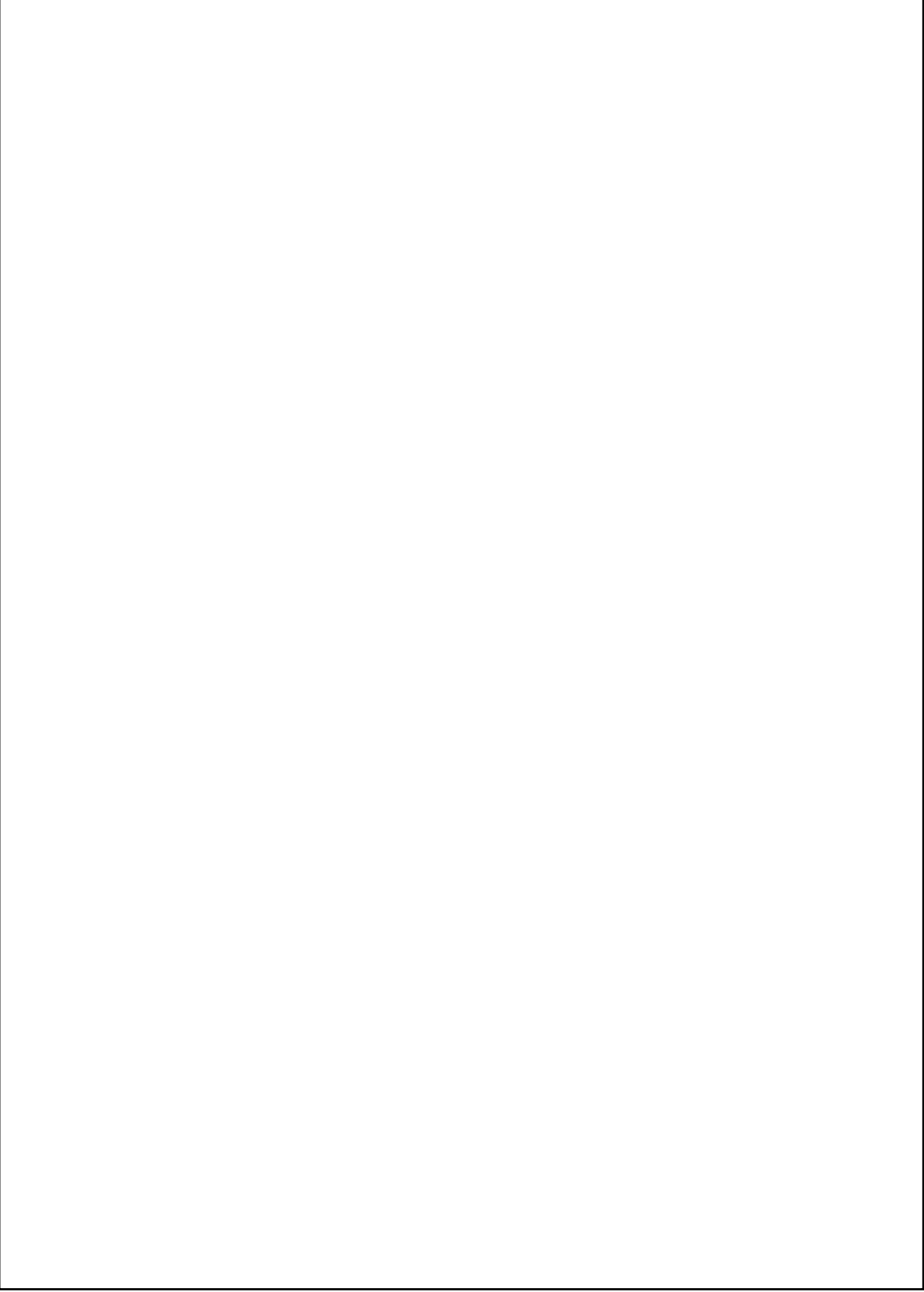
おくつきのながかたはらにいとし子の
二人をよせて何をかも語る

みすずかる高原の國に生れいでて
武蔵に眠るあはれわが妻

ながみたま安くぞねむれ初夏の
みどり色こき國のまほらに

しづかなるまひるにもあるか遠さか
車の音も別の世界に

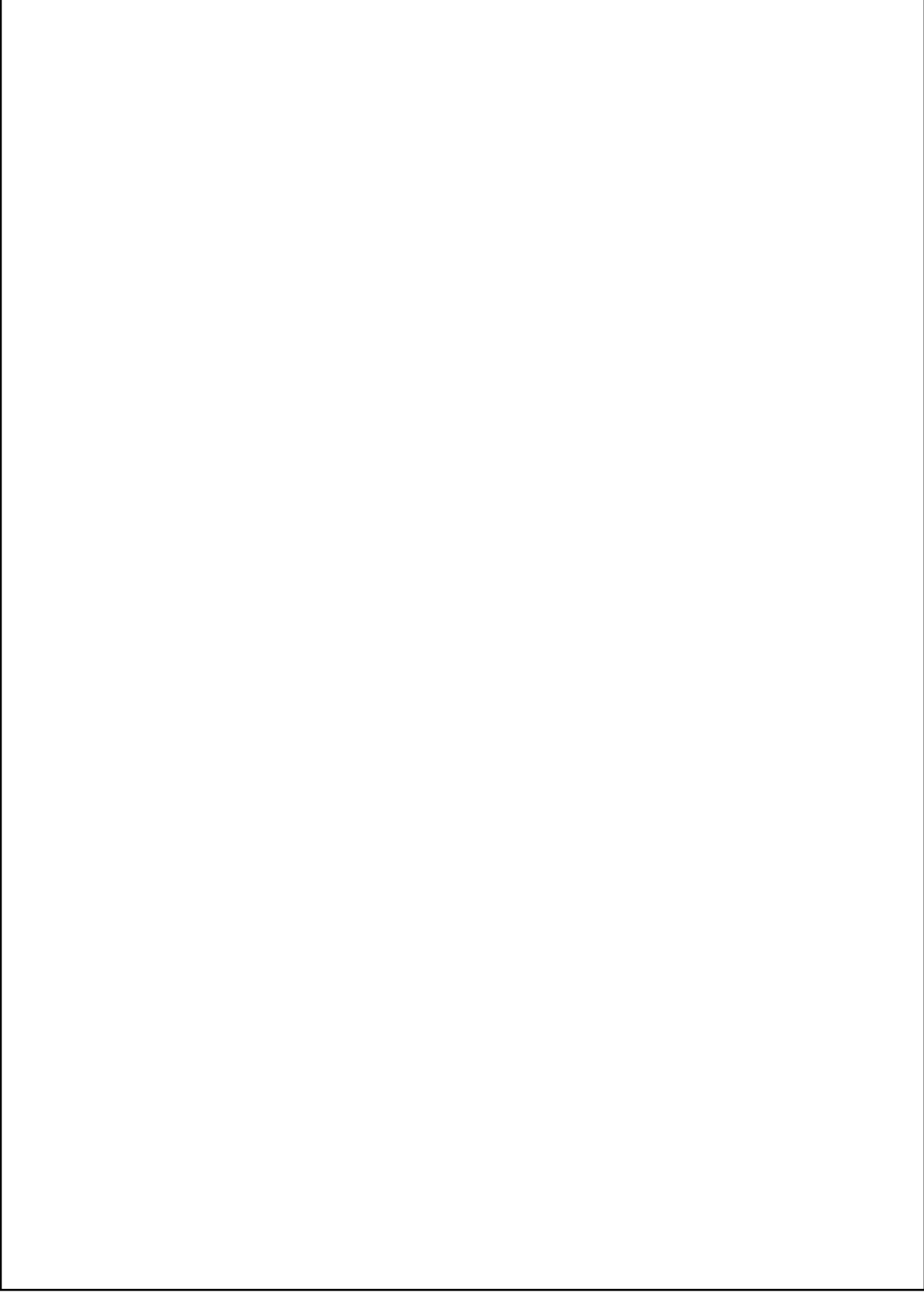
梅の木に夕日は落ちて病院の
瓦の屋根に鳥とまれり



東京都小石川區戸崎町十三

多木印刷所印刷

電話 小石川(市) 289.417
主 丁 1309



あとがき

『立志、開拓、創作、さらに自治と自由、この大きな流れを受け継いで、次の世代が未来に向かって輝くように・・・』五中小石川創立百周年に際し、紫友同窓会会長俵一雄氏（OIG）が初代校長伊藤長七（以降、敬愛を込めて長七と呼ぶ）の理念を若き同窓に向けて語った一節である。喉の病を押して声を振り絞り、百年の節目の任務を全うする姿は感動的だった。彼の胸中に長七が蘇り、支えてくれていたに違いない。長七を敬愛し、その足跡に再び陽を当てようと尽力した故俵氏。追悼の気持ちを込めてここに書き留めたい。

さて本稿は3つの部で構成されている。五中小石川の創立者ともいうべき伊藤長七、その活動と思想を伝えるものである。この一冊から、彼の生の声が聞こえてくるだろう。

第一部は長七の活動を人物交流から辿っている。寒水会（*1）の活動

や矢崎秀彦氏の「寒水伊藤長七伝」なども参考に、編集委員会（文責川口由紀子）がまとめた。

第二部は2003年5月本駒込（旧駕籠町）のキャンパスで催された創立85周年イベント（*2）でテーマ展示として製作されたパネルは、開校（1918／大正7年）から逝去（1930／昭和5年）までの五中創成期の記録である。現在も毎年開かれる創作展（長七の発案で始まり、今も続く）で「伊藤長七展」（同窓会主催）として展示されている。長く記録するため収録した。

第三部は、本稿の主題、小冊子の紹介である。長七は、東京府立第五中学校の生徒や教員、父兄へ教育理念や思想を当時の最新メディア・印刷物で発行し続けた。現存するもので22編400頁を超える。本稿ではそのうち7編140頁余を収録した。

それにしても、長七の考え、言葉が、一次資料のまま今日まで保存されてきたことは奇跡と言えよう。この小冊子を含む長七関連の資料は膨大であり、ご子息伊藤國男氏が収集し、戦火をこえて守り通した

熱い思いがこめられている（*3）。現在は千曲市の長野県立歴史館に収蔵され、誰でも閲覧できるので訪ねて欲しい。資料から長七の発する強い親和力（粕谷氏）が伝わってくるだろう。

五中小石川創成期の資料は、伊藤博子氏の呼びかけで学校、同窓会、（財）紫友会（*4）が協力してレプリカを作成し（2017年）、本校玄関ホールに納められた。そして2022年春、現存22編の小冊子全てのレプリカが伊藤家から85周年会（*5）の協力のもとに寄贈され、一層充実することとなった。本稿はこれら小冊子を記録し、原本に接して頂くことを目的に出版するものである。

2022年3月

85周年会代表 柴田知彦（017）

【注釈】

(*)1 寒水は長七の雅号。寒水会とは、五中小石川の紫友同窓会と諏訪清陵高校同窓会による長七研究会。二度のフォーラムを開いている。諏訪清陵高校は、長七の出身地諏訪に所在し、本邦で最も長いと言われる校歌を長七が作詞している。

(*)2 創立85周年記念イベントの詳細は、記念誌「我らは長七の教え子だった」にまとめられている。

(*)3 長七ご子息伊藤國男氏により収集された膨大な資料は、伊藤家に受け継がれ、お孫さん博士氏の尽力により今日再び日の目を見ることになった。2001年諏訪清陵高校東京清陵会の長七研究へ写真、原稿協力に始まり、2002年紫友同窓会（五中小石川同窓会）も加わり、資料の調査整理へと進み、今日の活動や研究の高まりへとつながった。

その後それら資料は、長野県立歴史館（千曲市）に伊藤家より寄贈され、大切に保存されることになった。

なお、國男氏は医学博士であり、外科手術の名手だったと聞く。著書「医者というもの」には長七の最期が印象的に語られている。

(*)4 紫友会は長七の組織した職員、生徒（現同窓会）、賛助会員（現PTA）の集まりで、開拓館など校舎や校庭を寄付するなど学校支援の母体となった。現在（財）紫友会として継続し、紫友会館（1968年創立50周年記念）なども寄付している。

(*)5 五中小石川創立85周年イベントの実行委員会は、その後85周年会として存続。毎年開催の「伊藤長七展」や「小石川の杜・植樹祭」などの同窓会活動に参加、支援を行ってきた。主催する「紫友まち歩き」は前後の世代も加わり、間もなく100回を数える程に盛況である。



我らは長七の教え子だった

2022年 4月 第1刷発行

2022年12月 改訂

企画・編集 紫友85周年会編集委員会

川口由紀子 小駒 清 柴田知彦 横山とみ

資料提供・協力 伊藤博子

発行者 紫友同窓会85 周年会

文京区本駒込2-29-29 東京都立小石川中等教育学校内

紫友同窓会事務局Tel/Fax 03-3945-1961 (同窓会直通)

印刷・製本 西武写真印刷株式会社

© 2022 Shiyu 85 All Rights Reserved.

ISBN 978-4-600-01026-3